

叛旗

9 JUN. 1974

戦後革命運動の鞍部と拠点＝三上 治 / 5

— 党派抗争と権力構想 —

生活圏の変容とかくめい＝神津 陽 / 23

— 集团的疎外と日常価値 —

支配の危機と情勢の旋回軸＝共産同政治局 / 55

— 反インフレ闘争の前進のために —

共産主義者同盟
理論機関誌

叛旗
九号

目次

第一論文

戦後革命運動の鞍部と拠点

三上治 5

— 党派抗争と権力構想 —

第二論文

生活圏の変容とかくめい

神津陽 23

— 集団的疎外と日常価値 —

はじめに — 問題の所在

23

I 幻想的革命と生活圏の行方

24

一 誰れにとっての革命なのかの整理

24

二 \wedge 法 \vee と \wedge 階級 \vee による疎外の位相

27

三 \wedge 国家—社会 \vee 制度と生活圏

29

II 関係の修羅場で考える

33

一 他者との日常について

33

二 情況の指標としての生活圏

35

三 関係のかくめいと家族制度

38

III 日常闘争と民衆の成熟

42

一 闘いの必然性と関係的回路

42

二 当事者運動と集団的疎外

45

三 生活圏の解放像

50

第三論文

支配の危機と情勢の旋回軸

共産同政治局 55

— 反インフレ闘争の前進のために —

はじめに

55

第一章 経済的分析の視座

56

(1) 経済的概念について

56

(2) 経済分析の対象

60

(3) \wedge 経済 \vee 闘争と「階級形成」

63

第二章 情勢の軸と経済的動向

65

(1) 国際通貨体制の解体・再編の意味するもの

65

(2) 戦後経済と再生産の構造・運動

70

(3) 危機の累積と構造的インフレ

79

戦後革命運動の鞍部と拠点

— 党派抗争と権力構想 —

三 上 治

「過渡期」というものはいつも同じようなことが起る。「過渡期」というほかない諸現象の生起のなかで、切実なのはどこか考えを変えることである。だが多くの人々は、先験的な理念、通念ではかれない事態、いかえれば自己の判断を超える諸現象を、異常な状態とみなすことで切り抜けようとする。どこか考えを変えなければと気づくのは少数なのだ。〈戦後世界と社会〉はかつて経験しなかった深い危機と流動にみまわれている。この危機の深さは民衆—大衆だけでなく、支配階級—上層も明日を信じるものが出来なくなっていることに、最も鋭く象徴されている。だが、いまほど〈革命〉が遠くて、彼岸のものと感じられていることも、又、ない。

たしかに、私達は「後退戦」という局面判断の中で、これらを予測し、把握してきた。が、私達はこのような過渡期の状況の困難さのなかで、観念的にか、生活的にか、いろいろな徒労感にみまわれ、断えず二つの傾向の誘惑にさらされている。それはかつてシモーヌ・ヴェーユがあだなる望みでいい気になっていられないと批判した、あの宗教的、信仰的なものに身をまかせたいということである。これはどこか、特効薬をもとめる気持に似ている。もうひとつの誘いは徒労感のなかで判断し、思考することを放棄したいという欲求である。これはすべてを忘れてねむりに身をまかせたいという欲求に似ている。この種の誘惑を断ち切る

困難に耐えていくために私達が己れに課した自己規範は醒てあれ、己れだけをため、だが練磨せよというものであった。この世にはおあえつらえむきの八身をまかせせるもの〈は〉はないとしても、「究幻想」、「軍事幻想」、「プロレタリア—被差別—抑圧民幻想」、「貨幣物神」と小信仰の素材、神話にはこと欠かない。思考や判断を放棄したいということが不可避なほど、諸現象の受容を強いられる。情報や判断素材の受容は過剰にあるのだ。思想的、実践的な自己規範を「どこか考え方を変える必要がある」という過渡期の問題へ転化し、血路をひらかねばならない。この方法・道筋はいくつか可能であり、広くて深ければよいのであるが、ここでは叛旗誌八号でとったのちがうかたちで、これらの課題に答えることを試みてみよう。叛旗誌八号では諸現象を説明する一般理論、その前提に環を設定するという方法をとった。ここでは、今私達が避けて通れない課題として現象している内ゲバ(党派間抗争)の諸問題に焦点をあてるという方法をとる。もとより情況に血路をつける課題として、一般理論やその前提を創出するとうときはかならず個々の諸現象を解き、個々の実践へ現象することを含んでいる。そして現象化されているものに焦点をあてる時、一般理論やその前提を内包しているものであるが、民衆の生活を直撃し、支配階級を苦悶におとしめている「インフレ」問題に私達の最も中心的な課題を設定している。「インフレ」問題は内ゲバと連

環するし、これらを総体的に浮びあがらせることは可能である。例えば「インフレ」と「内ゲバ」は広範な意味での「戦争」の問題へ絞り込んで解明することが出来るし、そういうスポットのあてかたが出来る。けれども、ここでは内ゲバ問題に軸をしばっている。「インフレ」問題については政治局論文を参照してほしい。

革共同両派のうちに極限的なかたちで演じられている内ゲバ―集団間抗争について私達は何らかの解答を要求されている。否定する、肯定、無視、どのように自己の立場を打ち出すにせよである。この問題への解答は何らかのかたちで両派のいずれかを支持するものと、そうでない立場のものに分れるであろうが、ただそれは距離の問題であって、ある位相にまでいけばそうかわらないものにはがいない。この問題への解答の難しさはあの連合赤軍派事件のそれに似ている。これに対する解答のひとつは両派を異常な人間の集団、異常な党派と裁断するものである。がそういった場合、自己がそれと無縁であるという立場か、何らかの規範的な思想なり、判断なりでそうしている。そして規範的な思想や、判断はつきつめればブルジョア思想か(仮想的には集団もしくは個々の対立の非暴力的、法的解決というようにあらわれる)、人民内部の解決方法とし誤謬であるというものである。私達はこれらの解答に批判を持っている。というのは自己が無縁であることを一般的にいう場合、かならずならなかたかちでの集団や党派への見解を含んでいても、自覚的にその止揚の見解を内包しなければ、それは距離の問題にすぎないという面を免れないからである。少なくとも私達がこういう見解をとらないといったとき、それは大衆の国家との関係を想定している。大衆にとって国家は疎遠な距離を本質的に有している。この疎遠な

るとき、第三者的に自由批評する立場にはないし、その気はない。それは私達も又、67年以後に絞っても、最近の早大闘争を含めて革マル派と党派闘争を遂行してきたその決着はついていないし、赤軍派との党内―一分派闘争を中心に、ブンド内での集団間抗争を演じてきたからである。私達は自己をも含めて、今日革共同両派に極限化されて演じられている内ゲバ的現象を不可避なものであると判断する。現象に濃度の差はあるのである。その根本的理由を党派、集団、「政治的共同性」の本質一般にでなく、時代的、情况的水準に把握する。現存の国家、革命集団の水準としてである。私達はこれら一括して、政治共同性の本質が法的疎外として情况的水準で現象しているのだととらえる。国家の情况的、時代的水準といってもよいのである。それ故に、私達は革共同両派に極限化される内ゲバをウォータ・ゲート事件、ソルジェニーツィン事件、批林批孔運動、中ソ対立(現在戦争の可能性を秘めている)中東戦争等々に象徴されて露呈して世界的な国家の諸現象と同一の脈絡でとらえている。たしかにここには一方がどんなに自己饜食的であれ、国家の否定の契機を含む革命運動としてあり、他方が国家の肯定的契機のうえにあるという違いがあり、これは重要なことだが、主観的な差と把握する。

国家(政治的共同性)としてあるものの、不可避的な現象だという把握をしたとき、同時に私達はこれを革命運動の敗北的構造と運動ととらえる。だから内ゲバを中核派のように「反権力闘争―武装闘争の端緒」と、又革マル派のように「反スタ運動」の前進とも根拠づけないのである。ある側面で、不可避ではないかと想いながらも、「革命的運動」とは違うのではないかという齟齬感や直観は正しいのである。それは左翼の側の国家論―権力論の現水準と「革命」の連環を直観しているのだか

距離こそ、国家の死滅の源泉となるものであるが、それは過剰に国家へのめり込んでいくものともなる。大衆にとりそれは不可避であり、責任あるものでないとしても、この疎遠な距離を国家の死滅へ転化されるべきところに任を持つ部分にとつて問題は別である。私達は距離一般の側からの批判ですますわけにはいかないのである。規範的な思想や判断の批判といったとき、現存のブルジョア的な国家思想や概念からする批判は、党派批判の内容として(共同体、共同的なものへの批判)、私達の想像をこえた怖しさを持つている。安易にイデオロギーの問題として、すりぬけるわけにはいかないものであるが、根本的にそのような思想も又戦争に象徴される集団間抗争や対立を、いいかえれば国家そのものを止揚出来ない以上、究極の批判となり得ない。ドストエフスキの「悪霊」に象徴されるような「政治」批判としてはそれはどうであろうか。もともと「政治や国家が、そこでの人間の解放が部分である」という批判を国家や政治の止揚へ転化するためには「環」が必要である。いわゆる人民内部の矛盾の解決論はいろいろのバリエンションを持つてあらわれるとしても、その基準が「イデオロギー的裁断」か「好みとの党派性」以上を出ない故に、どうにもならない限界を持つている。当事者が「反革命」、「反人民的」と裁断すればこの論理はそれで終るのである。

内ゲバ問題に関するもうひとつの解答は集団や党派にとつて、もう少し広義に言えば革命運動にとつて、それは不可避というよりほかないではないかというある種の肯定にたっている。その上で、それは革命運動の内的自己饜食ではないのか、(敗北の構造)というものから、革命戦争の一種と積極化する部分まで含んでいる。

私達の見解はこうである。革共同両派の内ゲバへの諸経緯を含めてみらである。私達は現象的に革共同両派、ブルジョア政党等々と同じような組織、運動構造としてたちあらわれたとしても、国家や革命について概念的にも、実践的にも、つまり党派性の根拠が異なる。そのレベルで内ゲバの評価は革共同両派を始めとする諸派と異なるし、実践的姿勢も異なる。ここでの問題はたつた一つである。君等も又、「革命」概念や国家について独自の主観的基準をもっているにすぎないではないかという批判についてである。私達の想定するものが歴史的条件的問題として相対的であることはあるが、認めたがらないとしても君にとつてもそうにちがいない普遍的なものだと語るだろう。さて以下、より詳しく諸点に軸を定めて展開してみよう。

①内ゲバ、ウォータ・ゲート事件等々をある脈絡において同一のものと解するという見解について。私達はこれまで革命運動として表象されていたものも包摂して、「過渡期と国家の諸問題」として把握する。

②「国家、党、階級」、「戦後革命の幹部」の検討と革命的なものの基準との関連に於てである。

①の問題は現象的にいえば塩谷雄高が「幻視の中の政治」で鋭くえぐつてみせた政治の本質の不可避的な展開と語ることが出来る。これらは別の用語でいえば共同幻想に於ける法的疎外といえるだろう。同一の脈絡にあるとはどういうことか。今日、自由的国家の最高水準をなし、戦後、人類史の永続性と幻想化されたアメリカ国家はベトナム戦争とウォータ・ゲート事件によつてその幻想の内実をもの見事に露呈している。そこではアメリカの民衆だけでなく、支配階級自身もその幻想を信じる事が出来なくなっている。戦後のもうひとつの幻想の軸をなしてきたソ連国

家、もしくは中国国家はどうであらうか。ソルジェニツィン事件や批孔運動はこれらが遺制的な宗教的国家としての姿を露呈しているのであり、もはやソ連、中国が「入社会主義国家」であるという幻想は誰れも持っていない。この事情はいわゆる第三世界の「入国家幻想」に於ても同様にある。私達がこれらを「過渡期」の国家の姿と把握するのはこれらの国家の幻想の拡散と衰退が、恢復することはないし、国家的なものの本源的危機を象徴していると考えるからである。「入国家」という概念に、政治的共同性を一括してとらえれば、それは宗教から法へと降ってくる幻想構造と、アジアの共同体、古代国家的共同体、ゲルマンの共同体の累積構造であるが、その運動が進展する展望を持っていないということである。

一般化して語るならば国家はその発生にいくつかの理由を持ち、その構造化への歩みが運動として成立するところで持続してきた。その一つは大衆の生活過程の利害をめぐる矛盾が何らかの幻想の共同性を疎外するはかなかつたということである。大衆の日常的な生活過程が不可避に疎外する幻想の共同性は、それが生活過程と逆立していく。生活過程の利害をめぐる矛盾が幻想の共同性を疎外するというのは究極のところでの生活過程の個性性（共同性という限り家族程度である）、人間の対他関係が幻想性を不可避とするところに理由をもっている。家族・親族から（性的基盤・関係）疎外された幻想の共同性と村落の基盤から疎外された幻想の共同性は一方で「現存的生活から出てくる」これらのこと（性・村落の基盤から疎外されるもの）をたえず繰り返すことを不可欠とする、と同時に年代や地域的制約から相対的自由に累積されていくものである。この幻想の共同性はイデオロギーや制度に表象されながら人

な国家体制としてあるあり方であり、それと爾余の国家体制との間柄は類とそれのもももの種との間柄のようなものであるが、ただここでは類がそれ自身、現存としてあらわれ、そのため、本質にそぐぬ諸現存にたいして、それ自身、一つの特異な種としてあらわれるというだけである。民主制の、爾余のあらゆる国家形式にたいする間柄は、その旧約にたいする間柄のようなものである。人間が掟のために在るのではなく、掟が人間のために在るのであり、掟は人間的、定在であるのにたいし、他の国家諸形式においては、人間が掟的、定在である。』（ヘーゲル国法論批判）

自由的国家が抽象的な法を核として、民主制の仮象としてあらわれるためにだけでも、人間は膨大な血を流さなければならなかつたのであるが、これが爾余の国家体制の一つであつたことは疑い得ない。それは又次のように書かれている。

『入直接的な君主制、民主制、貴族制においては現実的、実質的な国家と区別された政治的体制、または国民生活の爾余の内容と区別された政治的体制というものはまだ存在しない。政治的国家は実質的な国家の形式としてはまだあらわれない。ギリシアにおけるように、レス・プブリカ（res publica）は市民たちの現実的な私事であり、そして私的人間は奴隷であり、政治的国家は政治的国家として市民たちの生活と意欲との真の唯一の内容であるが、さもなければ、アジア的専制政治におけるように、政治的国家はただある一個人の私的恣意にほかならぬか、あるいは、政治的国家も実質的な国家のように奴隷であるかといずれかである。国民と国家との実体的同一性としてのこれらの国家と現代的国家との区別は、ヘーゲルがそう考えたがっているように、体制のさまざま

類史を連続し、高次化をたどる。一般に国家と呼ばれるこの幻想の共同性が生活過程と逆立し、そこへ覆さるようになりあらわれるのは高次化の過程が年代や地域的制約と相対的自由に累積されていくこと、つまり時間化の存在様式にある。いわゆる国家の階級性はこの逆立を支配や抑圧へ転化させていくことであるが、幻想の共同性に依っているのであり、国家によってこそ階級を成立させるのである。

国家の発生の理由をなしてきたもうひとつの問題は「個」としての人間の生涯から死への生涯の曲線の問題である。生涯による「類的過程」の接続と死による断絶の矛盾をならぬかの幻想の共同性として疎外したものの歴史的な累積である。幻想の共同性として、歴史的に累積された死の観念に（何故なら人間は死を究極のところを経験することが出来ない）逆立的に支配されるのは抽象を抽象化し得るだけでなく、存在へ転化出来ることにあるが、これらは宗教の核として、又国家の構成をなしたのである。国家の発生の理由や構成については他にもいろいろあるが、ここではこれらの指摘とどめよう。

今日、国家として、つまり幻想の共同性として、最も高次なものは自由的国家である。自由的国家は幻想の共同性としての宗教を法（いわゆる抽象的人格としての法）から分離し、私的なものへ転化し、市民的社会と呼ばれる日常的生活過程からより完成された姿で自己を分離する。この自由的国家と他の国家の関係についてマルクスは次のように語っている。『ある点では民主制と爾余のあらゆる国家形式との間柄は、キリスト教と爾余のあらゆる宗教との間柄のようなものである。キリスト教は勝義の宗教、宗教の本質、神格化された人間が一つの特異な宗教としてあり方である。同様に民主制はあらゆる国家体制の本質、社会化された人間が一つの特異

な契機が特殊な現実性へ展開されている点にあるのではなくて、体制そのものが現実的な国民生活と並んで一つの特殊な現実性へ展開されている点、政治的国家が爾余の国家の体制になつている点にある。』（ヘーゲル国法論批判）。ことわるまでもなく、純粋な自由的国家はないのであつて、一つの間柄は爾余の国家として表出される共同幻想を成層的、重層的にもつていく。最も高次なものとしての自由的国家は共同幻想性の構造を宗教から法へ、仮象の民主制へ、ある枠内で彼岸（天国）の共同性を地上へ奪還する「過渡」を歴史的に演じた。これらが爾余の国家との間で演じた闘争は歴史的な共同幻想の水準をめぐるものであつたが、人類史の「永続」的な共同性の闘争として、時間的・空間的にあらわれた。共同の幻想性の構造をあたかも世界宗教のように押し出す、歴史的、空間的な国家編成とそれに抵抗するところで、この国家の運動は異なつてあらわれてきた。この後者の中では歴史的な不可避性として自由的国家を共同の幻想へとせねばならぬという事情と、それらの編成への抵抗という二重構造をもつてきた。より過剰に宗教的な共同性と地域性と仮象としての民族性を強調せざるを得なかつた。いずれにせよ、この自由的国家も共同幻想であり、彼岸から此岸へ、共同幻想の全人間的実存への支配力がなされていくとしても、依然として日常的生活過程や個の現存に逆立しており、国家が上位におかれるという思想に支えられているし、次のような意味での「戦争」を決してすてざることはないのである。

『戦争によって「諸国民の倫理的健全性は、もろもろの有限な規定されたものが不動のものになることに対して彼らが執着をもたなくなるために、維持されるのである。これは風の運動が海を腐敗から防ぐのと同

様である。持続的な平和は海を腐敗させるであろうが、永久平和は言うまでもなく、持続的な平和でさえも、諸国民を腐敗させるであろう。」
(ヘーゲル・法の哲学)

「国家共同体はひとつの民族であり、個人態ですらあり、本質的には自分で対自的に存在するが、このことは、他の、諸々の個人態が、それに對しており、これらの個人態を自分の外に排除し、それらから独立であるとする形でのみ、そうだからである。国家共同体は、内に向つては、諸々の個人が個別化するのを抑えるが、外に向つては自ら活動する。この共同体の否定的な側面は、個人態においてその武器をもつことである。戦争は、人倫的実体の本質的契機を、人倫的、自己存在の全定在からの自由を、現実存在に保証する精神であり、形式である。戦争は、一面では私有財産や個人的自立の個別的体系にも、また個々の人格そのものに、否定的なものを感じさせると共に、他面では、戦争において否定的なものこそは、全体を支えるものとして顕われてくる。」
(ヘーゲル・精神現象学)

今日の最も高次の共同幻想としての自由的国家、種々の諸国家（歴史的な爾余の国家）が、共同幻想としての吸合力を衰退させ、恢復力を想定することが出来ない危機にありながら、国家の死滅へ転化する思想も実践もないことこそ「過渡期」なのだ。それは戦争の不可避性と全面戦争の不可能性の中で「戦争」を死滅させる思想や実践の不在といつてもいいのである。支配的な国家が幻想的吸合力を衰退させ、その腐朽が露呈しているということこそ「革命運動」の自己腐蝕はどういう脈絡をもつか。私達は支配的な国家と「革命的運動」は主観的であれ、後者が国家の否定を内包していること、ないし過渡の問題と了解しているところに違

呼ばれてきた。これが本格化するのは戦後過程であるが、このスターリン主義は左翼の権力論—国家論の正系を形成しながら、同時に国家の肯定的論理へ転化してきたものだといえるだろう。私達は69年以降の局面で、スターリン主義的な革命概念の力をあらためてみたのであるが、そこに象徴される「革命運動」の自己腐蝕はソ連・中国で進行する矛盾の展開と革共同派の党派間戦争は軌を一にするのである。これらは又、「過渡期の国家」現象の一つなのだ。

②の問題は今日の段階、局面で、擁護すべき戦後革命運動の鞍部を抽出することとそれを通しての革命的な基準の提起である。このことは集団間抗争への私達の思想的、実践的回答でもあるだろう。擁護すべき戦後革命運動の鞍部は何であろうか。いわゆる反日共系左翼として構成されてきた伝統なのか(9)。暴力革命思想と革命戦争の道か、被差別、被抑圧人民解放の立場か。私達の見解は異なっているといわなければならない。私達はこれらとまったく違ったところに擁護すべき戦後革命運動の鞍部を設定する。

△69年への過程で敗北し、敗北の構造を露呈したが、この過程に凝縮してきた戦後革命運動のどこに擁護すべき鞍部を総括するか。以下に三点に要約出来る。①戦後過程で不可避に形成されている民衆の自発的、内発的な共同性、生活利害の組織的抽出、運動展開。「天皇制」と分つところの日本の自然感覚、「仮象的民主制」と区別される現存的な民主的生活感覚等を革命の水脈として把握する端緒の形成。②自立と生活的価値を革命的なものに根底にすること。③「党、階級、国家」等々を始めとする革命概念の再生、理論創出の開始である。60年代

を想定す。この「革命的運動」はいわゆるスターリン主義から社会民主主義、新左翼まで包摂して考えてよい。ここで最大の問題はスターリン主義である。もちろんここでいうスターリン主義は革共同派の「反スターリン主義」をも含む。私達の使用するスターリン主義の概念は権力論—国家論のことである。レーニンや毛沢東の国家論—戦争論として最もよく体系化されているが、これについては三つのことが考察されなければならない。その一つはプロ独・民主主義論を含めて、理念的にせよ国家の死滅とその過渡が論じられていること。その二つめは彼らが自由的国家の世界的編成過程と抗するということとアジア的国家や宗教的国家と抗するという二面性をきわめて錯綜してあらわさざるを得なかったこと。その三つは彼らの国家思想の問題である。この中で、最初の最後の問題は彼らの国家の死滅への考察と理念の部分性はヘーゲルの国家論の水準にあるということである。これについてはしばしば展開してきたので詳しく論じないが、主観的にはともあれ、自由的国家を止揚するものでなかったし、法的疎外として国家の階級性がたちあらわれてくることの把握の弱点は後年顕在化した。幻想論として八号に於て、よく検討されている。二つめの問題は「近代—前近代」、「アジアーヨーロッパ」という概念、もしくははタームに於て、民族問題、インターナショナルイズムというかたちで論争を構成してきたものである。共同体をめぐる論争といつてもよい。これらの諸問題を含みながら国家の死滅への過渡的国家創出と近代的国家編成との緊張関係の中で、スターリン主義は国家編成自身を価値化し、永続化する体系へ転化された。いわゆる「前衛」という歴史的に不可避であった共同幻想の「前衛主義」への転化としてである。コミンテルンとして歴史的に登場した「革命運動」はスターリン主義と

の過程を通して、私達が絶えず感じてきた矛盾の意識は支配階級、「革命運動」の理念や思想の擬制とそれを止揚するものの未知という過渡的意識だった。「類」的な貌をしてやってくる理念、思想、いかえれば政治意識、社会意識への拒絶感、崩壊感であった。と同時にこれらの意識を先験性として拒絶し、自己の内在的感性でよってたととした。そしてこれは戦後日本の「類」な理念・思想が「死思想」ではないのかという直観に支えられながら、この砂漠の内醒めてあることだった。戦後日本の「類」的思想が「死思想」であり、その表象としての政治意識や社会意識に裸形で対峙せんとした自己の内面的、内部的世界や民衆の内発的、自発的契機がこの実体をなしていた。「天皇制」や「仮象的民主制」と違うものであり、「革命的」言辭や支配的言語のかなたで孤立のうちにあった内部世界の不可視の連帯感だといつてもいいのかも知れない。そして私達が演じ、視てきたのはこれらも又「死思想」へ繰り込まれていく惨劇であった。例えば、赤軍派もわれわれも、闘いの内発力を構成したものは自己の内面や、既成の理念や意識からはじかれていた社会・政治意識であり、それらに支えられた「過渡的」な感受性であった。暴力的な行動の内面を支えたものは自己の身体的契機しか信じるものがないと考えざるを得なかった私達、戦後世代の自己意識化した社会意識であつたらう。そしてこれらは啓蒙的な理念、概念の自己意識、社会意識への転化という倒錯した日本の支配思想、負的革命思想との対決を内包してきたし、その克服、そこからの解放を含んできた。どのような屈折をもつていたとしても「個」の自立や民主的な生活感覚を代表していたことは間違いない。けれども、これらが政治的構想力、権力論、共同の観念へと結実し、対象化していくとき、古典的で、啓蒙的な

革命思想へむしろ過激にのめり込んでいくものであった。純化されたコミンテルン思想へ、スターリン主義へである。これらは三島由起夫の八戦後への叛逆としての暗い感性と天皇制という思想錯誤の間の関係になぞらることも出来よう。いいかえれば政治的構想力、権力論、共同の観念としては錯誤というほかないところへ、過剰にのめり込んでいったということなのだ。革命戦争論やファシズム論等々というように。このことは別に次のように表現することも出来るだろう。政治的構想、共同の観念、政治行動の自己表出の解放性と指示表出の古典性、自己表出の現実感覚と指示表出の死概念の間の深い亀裂や矛盾であった。また現存的階級意識の革命性と歴史的階級意識の架空的錯誤といえる。以上のことを結論的にいえば、政治的構想力、権力論、共同の観念の指示表出、歴史性の側では支配的国家思想(自由的国家思想)、既成左翼のそれにかたてなかつたということである。そこでは前述した「過渡期」の国家の動向と運動にかたてなかつたということであった。このような敗北の構造の連続性の上に連合赤軍派の軌跡があったように、中核派の革マル戦争もあるとみなければならぬ。(啓蒙的な、倒錯した理念、歴史意識(死概念、死思想としての反スタ論)によって、現存的、自己表出的な闘いを一貫して妨害してきた革マル派はどのような急進的装をなそうと真正正銘の古典左翼、スターリン主義であつてつめのあかすらの革命性ももっていないが)。それ故、私達は主観的にはともあれ、客観的にはこれらは過渡期の国家の運動に繰り込まれていくか、決してそれにかたてないと断言する。私達は客観的な血路の側で、戦後革命運動の擁護すべき鞍部を救済せねばならない。革共同両派の極限的内ゲバへの私達の立場は私達の権力論の提示であり、又革命的なものの基準の提起である。程と歴史的過程の双方の架橋の構造の中で生きているのだからである。この架橋の構造は労働、性、言語の自己表出的なものと指示表出的なものとの関係といつていいであろう。

私達はこの自立や生活の恒常性を価値としていく上で法的疎外や階級的疎外と闘うことを不可避とするが、いくつかの回路を経なければならぬ。それらの道程を解明する前提として、自立や生活の恒常性という概念や思想への反撥を批判しておく。それらの多くはかつてな誤謬や標的のデッチ上げであるが、反撥は基本的には二つの傾向性としてあつた。その一つは共同性・集団性、政治性そのものを革命性の基準、党派性の基準とする部分であり、そこに集団の拠を置く部分である。どのようなイデオロギー的、行動的外被をまとうとも、今日の段階で党派を創るものの究極の党派性はそこにあり、 \wedge 自立 \vee 、 \wedge 生活 \vee を価値の源泉に置くというのはそれらの根底的批判であるから、自己の存在根拠の否定として反撥してきたのは不可避であつたかも知れない。これらは恣意的な、なんら普遍性のないものであり、また醒める前のものである。もうひとつのパターンは同様の知識人、その志願者である。彼らは非行としての戦争に、大衆・知識人が自己の生活利害、存在根拠から対峙するのでなく、過剰にのめり込んでいくのと同じかたちをたどっている。国家に疎遠な契機が、国家への過剰なめり込みへとなっていくように、 \wedge 共同性 \vee 、 \wedge 政治性 \vee と同伴だから、それらに過剰にそれらに意味付与したがるのである。徹底して闘うことも、闘いを止めることも、また \wedge 共同性 \vee 、 \wedge 政治性 \vee の修羅場をも演じたことがない故に、 \wedge 明るく \vee あらわれる知識人の変種なのである。これら、二つのパターンは自己の無知にあるのだ。自立や生活の恒常性を価値へ転化せしめていくという

結論的に、いうならば、それは「過渡期」に於ける新たな革命概念、「階級形成」論の提起である。それは「どこか考え方を要する必要がある」といったことの対象把握であるとともに主体へ引き寄せた展開である。

この私達の内容はテーゼ風にいえば次のようになる。『戦後革命運動の擁護すべき最低の鞍部は自立や生活的価値(恒常性)を自己の根拠とする思想と実践である。』

つきつめれば、結局のところここにいきつくのである。この内容は単純なことなかも知れない。がこの現実過程が労苦や困難のないものではない。私達は「過渡期」の國家の動向把握の中で、幻想の共同の、幻想力という核が衰退し、それは恢復することはないのだと語ったが、これらを生み出している大衆の存在様式は巨視的にみれば、自立や生活的価値の深化といえるだろう。ヘーゲル流の歴史の、理性の狡知という視点にたつならば政治や國家の不信を大衆化する内ゲバや選挙の戯曲化がこそ最も革命的なのかも知れない。まったく逆に、つまり啓蒙的に考えている当事者の悲、喜劇を別にすればである。

だが自立や生活の恒常性が価値となっていくためには、共同の幻想を生まざるを生ない現実の日常生活過程と共同幻想の累積過程としての歴史過程と闘うことを不可避とする。又階級的疎外としての日常過程とその歴史的累積たる生産様式や経済社会構成と闘うことを不可避としている。いいかえれば法的疎外や階級疎外と闘うことを不可避としている。そしてこの道は一般化するならば、日常的生活過程(現存的生活過程)と歴史的な累積物の運動過程の双方から闘わなければならない。それは「個」的にも、「集団」的にもである。何故なら、私達は日常的生活過

ことがある位相に於て集団的・共同的、政治的にあらわれることは前述のように不可避である。自立や生活の恒常性が価値の源泉であるといつたとき、誤謬したがるように集団的・共同的、政治的なもの一般との対置概念ではない。逆に彼らが集団的・共同的、政治的なものを対置しても、自立や生活の恒常性の対置にはならないのである。何故なら人間実存の形式にとって現存過程(日常性生活)と歴史過程の架橋の構造が不可避であるように、集団的・共同的、政治的に、又自立的、生活的に現象することも不可避なのだ。だから自立、生活の恒常性を価値へといつたとき、共同性・集団性と個が、政治と生活が逆立することをいっているのであり、この逆立を価値化していく、共同性や政治性の内的構造の批判をいっているのだ。逆にこのような共同性や政治性に同致されていく、個のあり方や生活過程への批判や拮抗をいっているのである。民衆の現存的、生活的過程から何らかの共同利害として疎外されたものが、支配と抑圧の契機へ転化していくにはかならず共同的、政治的なものを自立や生活過程より上位な、価値的なものとする思想や理念が、大衆の默契が関与しているのだ。このような思想や理念の人類史的収約がヘーゲルの思想や理論に体现され、レーニンの「党論」や毛沢東の「戦争論」もそこを脱してはいなかったのである。これら亜流である革共同両派、革命戦争派が客観的にどこへ行くかは明らかではないか。マルクス流にいえはそのような国家思想の「類」である自由的国家に敗北するか、「一種」である宗教的国家へ行きつくのである。それらがかつてのような共同の幻想(観念)としての恢復力をもたないとしても。それ故、私達が革共同両派の内ゲバを批判するのも、政治一般や集団性・共同性一般ではない。いいかえれば小林秀雄流のからめての批判ではないのだ。集団

間抗争や修羅場的情況の不可避性を価値性へ、肯定へ必然的に転化せざるを得ないことを孕む、彼らの共同性や政治の構造こそ批判するのである。自立や生活の恒常性を価値へいたらしめるものが、人間の社会的力を固有の力としてとり出すものが、歴史的局面の中で、共同的、政治的な構造や位相で展開されることが不可避であるとき、修羅場を避けることは出来ないし、矛盾に理由もなく耐えるはかないときがあるのだ。自立や生活の恒常性を価値とする思想や政治構造がそれと逆立することは避けられないところをもっているからだ。

さて私達がこの自立や生活の恒常性を価値へ転化させていく、そのような戦後革命運動の鞍部を擁護していく実践的展開は基本的に二つの道をたどる。

その一つは共同的、政治的内部の構造、いいかえれば広範な意味で国家の内的構造でのそれである。私達が組織論とは国家批判であるといってきたものである。

他の一つは日常的生活過程、いわゆる社会的過程でのそれである。この両者はレーニンやトロツキにあっては現実の大衆の存在様式そのものの歴史的転換と政治的(知的)集団のそれとの相関係のうちに想定されていたものである。政党と労働組合等々と一般に語られているものであるが、ここでは前者に軸を絞って展開してみよう。後者の問題は神津論文で展開されている。

「どこかで考え方を要する必要がある」という過渡期の自己規範を過渡期の国家動向と「革命運動」の構造の中にどのに把握し、構想し、かつ現実化するかである。このことは因ゲバの根本的、過渡的止揚のより鮮明な提起でもある。

客観的にも、主体的にも国家を正確にとらえることは依然として、重要だからである。

私達は人間の実践的、感性的活動を時間・空間の弁証法的運動ととらえる。

人間の存在そのものを時間的活動や空間的活動の累積、その弁証法的運動としてとらえるとき、 \wedge 唯物論 \vee か、 \wedge 観念論 \vee かという論争を超えること不可避とする。ドイツ観念哲学の頂点にたつヘーゲルの中では人間のものは \wedge 精神 \vee や \wedge 思惟 \vee の過剰な意味づけの中にとらえられている。そこでは人間の自然的要素、例えば本能的衝動や感情というものは、自然の一部としての人間の活動が不可避的に疎外されている。つまり人間と自然の对象的関係が思想の内部関係としてとらえられている。

逆にフォイエルバッハに見い出される唯物論の中では人間の感性的活動が深くとらえられているが人間のものが \wedge 自然 \vee のなものに過剰に根拠づけられて \wedge 観念 \vee としての人間の実存の要素が疎外されているか、低次化されている。いわゆる臓器も思考するというものである。これらでは人間の自然という概念が明確にとり出されていない。ヘーゲルでは人間の自然という人間的特質が \wedge 精神 \vee や \wedge 思惟 \vee に過剰に引き寄せられておればフォイエルバッハでは \wedge 自然 \vee や \wedge 物質 \vee にそうしているといつてよい。マルクスにあって人間と自然との交流関係は疎外という概念のうちに打ち立てられている人間の对象的活動はヘーゲルやフォイエルバッハにおいては別に考えられている。ヘーゲルにあっては人間の对象的活動は対象への浸透という概念でたてられているし、フォイエルバッハでは人間と自然の共通基底という概念がもちいられている。マルクスの自然哲学の根底をなす自然概念は人間の自然というものであ

私達が自立と生活的価値を根拠として、それから不可避的に逆立していく共同性・政治性がそれ自身価値性へ不断に転化していくことを批判するといった場合、それは同時に、ヘーゲルに集約的に体系されている国家論やその枠組内のレーニン、トロツキ、毛沢東の国家論批判をさしている。これらの展開をなす「環」は以下の諸点である。

- (i) 共同性、政治性の上位をなすものは国家であるが、国家とは何か、とりわけ、共同幻想というものをどのようにに了解するか。
- (ii) 歴史的にみるならば、宗教から法へ、共同幻想が累積されながら展開されてきたものであるが、この今日の構造をとらえるか。とりわけ、法的疎外と階級的疎外は国家概念の中でどのようににとらえられるか。
- (iii) 最も高次化された国家はいわゆる自由的国家(仮象的民主国家)であるが、そのキーポイントをなした大衆の権力(立法・憲法)と共同の幻想はどのようににとらえられるか。
- (iv) 国家の編成過程としての「戦争と革命」と共同体の編成について。

これらの項目についてふれてみよう。(i)の問題は私達に「党」、もしくは政治的集団とは何かと問うことと同じである。ここで重要なのは国家を共同幻想という場合、それが何らかの民衆の共同の幻想であるという面と共同の幻想である面であり、その絡みの構造であるが、共同幻想という概念が解されるためには、時・空間概念からとらえなければならぬ。というのは国家を共同幻想ととらえることは制度の面、イデオロギイの面を肥大させてとらえる傾向(レーニンの暴力装置論もその一つ)への批判をただでなく、現下の「党」、「階級」論の批判をもなすからである。死語化しつつあるとはいえ、古典的な「階級」概念が広範に流布されており、これらを存在論としての時、空間から批判することで、

り、人間が自然を己れの非有機的的身体・器官への転化(自然の人間化)していくことと、それらを含めた人間の存在を有機的自然(人間の自然化)へ転化していくものと考えられている。自然を自己の非有機的的身体・器官と化し有機的自然として自然の一部をなす人間的特質は人間の自然という概念によってのみ明確にとらえられる。ここでのヘーゲルの「観念論」とフォイエルバッハ的「唯物論」は対立的にみえて相互補完にたつのだ。ことわっておくが、この世にはヘーゲル的な \wedge 観念論 \vee の者とフォイエルバッハ的な \wedge 唯物論 \vee 者、(スターリンニスト)しかいないのである。主体的唯物論やサルトル的思想は折衷にすぎないのである。

人間が言語活動、労働活動、性活動を可能とするのは了解という判断の生成(概念の生成)の関係づけである。概念の生成や関係づけは生理的機能としての頭脳や身体的作用であるが、それは又 \wedge 幻想 \vee や \wedge 観念 \vee 作用なのだ。了解や判断の総合化(概念の生成)の度を、関係づけや関係の度を時間・空間の累積というのであり、時間化度や空間化度という。そして私達は感性的活動(生命的活動)の深度を時間化度や空間化度への深化というのである。

ドイツ古典哲学の中では(ヘーゲルにもっとも完成された姿をもつが)、感性・悟性・理性への発展という概念のうちに、この時間の累積、時間考えられている。

「マルクス主義」的な自然成長的意識や目的意識という概念も同一の内容である。現象学では経験の持続・直観という概念が登場している。ヘーゲルの、「マルクス主義」的体系では感性・悟性・理性、自然成長的意識・目的意識という概念が先験的に指定されている。そして「個」的にも、「類」的にも時間化度の体系的叙述にみえるがそれは本当の了解

や判断生成にもちこまれる「死概念」にすぎない。例えば、ヘーゲルが意識の経験の学として展開した精神現象学は人間の意識を時間の弁証法的累積・運動として叙述するという透れた方法と人類史と自己史と重ねた展開という壮大な体系をもっている。これが経験の学たり得ない秘密は感性や悟性・理性という先験的概念によっており、ここでは逆転して、ヘーゲルの思想や価値判断に経験的判断片があてはめられている。マルクスの革命性は物的過程を体系的叙述したことでなく、ヘーゲルとは逆に、「個」的「類的」歴史的「経験」を普遍的な了解判断へまで抽出したことにあるのだ。私達の時間化というのは「個」と「類」の、自己と歴史の経験を新たな了解判断へ転化していくことなのだ。現存的、關係的に生成していく了解判断、経験的時間と歴史的にやってくる抽象的時間の架橋されたものとして、私達が共同幻想というのは歴史的に累積されてきたこのような時間をさすのである。ある面で、これらは資本が労働時間歴史的累積と解されることと類比することが出来るかも知れない。

国家は共同の幻想として、一面ではかならず民衆や大衆の日常生活過程の利害によって疎外されたものを繰り返すか、それに支えられるかを不可避とする。それはもともと日常生活過程そのものに矛盾があるからであり、その必然性によっているのだが、このことは経済決定論風にならず、国家の現存的基盤であると同時に根拠であると解さなければならぬ。現存の国家が「階級的な国家」であるというのは日常生活過程の「階級利害」の疎外されたものであるからだ。他面、国家は共同の幻想の歴史的に（時間的に）累積されてきたものであり、地域的制約をこえて浸透する。それ故に、私達が国家を死滅させるといった場合、レ

である。

(ii)、(iii)の問題は次のようなことである。共同の幻想が宗教から法へ降りくだる過程は法的疎外と政治的国家の完成といわれる。資本制の生産様式とその社会経済構成の形成過程は階級的疎外と市民的社会的完成と語られる。この連環の構造は何か、そこからの解放の問題である。もうひとつは仮象の民主制、民族制としてあらわれてくる共同の幻想の内容である。いいかえればそこを止揚するとは何かという内容である。前者の問題はマルクスが経済学批判序文の中で定式化した上部構造下部構造論の問題である。これは日常生活過程の疎外と共同利害の最大のものである経済過程、いいかえれば何らかの共同の利害という幻想を不可避とするのが階級關係であり、共同幻想はそれに対応しているという意味ではそうである。けれどもこれは巨視的な關係としてそうである。だから例えば「労働者階級」と「資本家階級」として表象される階級關係に対応する共同幻想の構造が仮象的民主制の内容で構成されるか、宗教的遺制で構成されるかは即応的には判断出来ないのである。共同の幻想は、現存の日常生活過程が疎外する共同の幻想の内容と歴史的に累積されてきたそれで構成されるといったが、ある共同幻想を止揚するためには、日常生活のそれを繰り返すとともに歴史的に累積されてきたものを止揚するはかないのである。例えば自立や生活の恒常性を基軸にするといったとき、それらが日常生活過程で支配的なものとして流布される価値概念や社会意識と激突して流出するもの、そこで疎外されているものをとりこむことで、現存の共同幻想を止揚する内容の一つを構成するというように、私達が民衆の内発的、自発的共同性と呼んだものである。私達の貧しい経験に照らしてみても、「天皇制」的自然意識や

ーニンが国家死滅の経済的基礎として考察したものを日常生活過程へ拡張して現実化するのと、歴史的な共同の幻想を破ることである。国家死滅への過渡の問題は日常生活過程が不可避に疎外する共同の幻想を繰り返すことで現存の国家を打倒することと絶えず彼岸の共同幻想へ転化していく歴史的に累積されてきたそれを止揚することである。旧来の国家論との關係で最も大きな分岐をなすのは共同幻想という概念である。この把握が欠落していれば実体的に現象するものに過大な評価をせざるを得なくなるのは必然である。制度や機構の過大評価となる。俗にいえば物的過程や物質力のそれとなるのである。

これらは国家の対象把握においていくつかの誤謬をもたらすだけでなく、いわゆる「階級形成」、左翼の権力論でもそうなのである。67年以降の私達の経験でも、これはいくらかあったし、今日、そのまま横行している。例えば、この期の闘争は既成の社会意識や政治意識から疎外されたところで、内面的意識によって、裸形のかたちで、それらの対決する過程が身体域に引寄せられて表現するものとして在った。ここに暴力的闘争の根拠があったのに、それがそのまま軍事概念まで展開した秘密の一端はここにあった。了解や關係づけという幻想的V、観念的V作用も生理的機能、つまり頭腦的、身体的作用として表らわれることの混同ないし、逆転としてである。内ゲバの理論根拠をなしている党派解理論の背後には、党派物的力という錯誤ないし、一面化がある。政治的党派は決して物的作用で滅ぼすことも、解体することも出来ないのである。このような過程で滅ぶとしたり、政治を物的概念で考えている党派だけでも、党派が滅ぶのはその共同観念が別のものに止揚されたときなのである。

「仮象的民主的」意識の外にある生活的な自然感覚や民主感覚が新左翼の闘いのエネルギーと共同性を支えたことは確であるからだ。もう一つは彼岸的に歴史的に展開し、累積された共同幻想の外で、いいかえればその本質的な宗教性、神話性と対決し、止揚することで現存の共同幻想を止揚することである。これは「天皇制」、「仮象的民主制」の宗教性、神話性を粉碎することで闘いのエネルギーと共同性を構成してきたこととしてあるだろう。

が新左翼の今日の敗北的状况は日常生活過程で民衆を直撃し、彼らの意識や生活を揺ぶっている「インフレ」問題を注視することが出来ないことであり、「被差別、被抑民、プロレタリアート・軍事」等々の神話をかきまわっていることである。つまり、支配的な共同幻想と闘い、その外にいるつもりでいながら遺制的なそれに収奪されているのである。現存の共同幻想（国家）を超える、それは私達が権力を奪取するといってもいいのであるが、そこでの困難性は日常生活過程、社会過程で資本主義を追い詰め、既存の社会意識や価値概念と対決していくものが視にくいということである。そして、遺制的「天皇制」や「仮象的民主制」を共同幻想の構造として押え、それを止揚する内容の困難性である。日常生活過程の支配的意識、価値概念の動揺、共同幻想の回復力なき拡散が、つまり流動が世界的であるとしても。

私達にとってここでの問題、つまり困難性は二重に存在する。

その一つは民衆の内発的、自発的契機が共同の幻想をうみ出したことがないという私達の歴史的の問題である。人類史の視点からみたと、次へのいくつかの「過渡的」国家は想定されるであろうが、自由的国家は人類前史最後の国家である。この自由的国家が「仮象的民主制」にすぎ

ないとしても、政治的国家の全体性——立法権の民衆の手による樹立をその歴史過程への登場で伴った。けれども私達の歴史的過程では外部から、それ以前の共同観念に接木されてきたのであって、民衆の内発的、自発的な共同の観念が歴史を支配したという経験を（仮象的なものであれ）もっていないのである。共同観念が移植され、接木され啓蒙的に土着していくことに、生活的過程（生活の恒常性や自立性）から抵抗し、そこから不可避的に成立する共同観念（ナショナルなもの）が登場したことではないのである。それらは歴史にみれば敗北の過程をたどってきたのである。このことは日常的生活過程にとって不可避な（歴史的にみれば過渡的なものであれ）共同の観念の想定や、歴史的なたちで累積されてきた共同幻想の内部で彼岸の共同幻想を分離することを異様に困難にするのである。私達が「天皇制」、「仮象の民主制」というものに、日本の自然感覚や現存的民主的感覚というものを対置したとき、六〇年安保闘争や七〇年への過程での経験的総括としてこれをなしている。がそこで経験している困難さは私達のロドスをなしているのである。赤軍派の「毛沢東思想」への傾斜や、中核派等々の差別論への変節、ドイツ観念論的左翼の絶えざる輩出（福本主義の戦後版たる革マル派）、三島の「天皇制」への思想的錯誤、これらは鮮やかに敗北の構造を示しているのである。私達がいわゆる「大衆闘争」と呼ばれるものに、いくつかの意味をこめてきたのも、このような文脈であったのだ。民衆の内発的、自発的契機が政治的国家の全体性——立法権——権力として登場したのは世界的にみればフランス革命・パリ・コンミュン・ソビエト・解放区等々として存在したのであるが、それを支えた共同の観念を私達は自己の歴史体験の中に想定出来ないものである。

マルクスはヘーゲル国法論批判のところで自由的国家と宗教的国家の妥協と折衷に嚮心するヘーゲルを君主権、統治権、立法権等々についての彼の理論批判を介して批判している。ここでマルクスはあたら限り正確に政治的国家について把握している。そこで彼が最も問題にしているのは立法の歴史的性格である。

『市民社会と国家は分離している。したがって公民と市民、すなわち市民社会の成員もまた分離している。したがって個人はわが身相手に或る本質的な分割作業を手がけねばならない。現実的市民として彼は我が身が或る二重の組織のうちにあるのを知る。すなわち官僚制的組織——これは彼岸的国家である統治権の一つの外的、形式的規定であって、彼とその自立的現実性には触れるところはない——と社会的組織、市民社会の組織である。しかし、この後者の組織においては彼は私人として国家の外にあり、この組織は政治的国家としての政治的国家には触れるところがない。はじめの組織は国家組織であって、彼の質料は国家となっていない。第二の組織は市民的組織であって、このものの質料は国家ではない。はじめの組織において国家は形式的対立物として彼に相対し、第二の組織において彼はみずから質料的対立物として国家に相対する。したがって現実的公民の立場に立ち、政治的な重要さと働らきを手に入れるためには、彼は彼の市民的現実性から脱け出、その現実性を切り捨て、この全組織から彼の個性のうちへひっこまねばならない。なぜなら公民であるための彼の唯一の在り方は彼の純粋な、ずんべらぼうの個人性だからである。ただし統治としての国家の在り方は彼抜きで出来上がり済みであり、そして市民社会における彼の在り方は国家抜きで出来上がり済みであるからである。現存する共同体としてはこれらのも

もう一つの問題は共同幻想の構造を国家論として批判し、その死滅への内容を理論的、思想的に構築することの困難さである。共同幻想、国家の構造はヘーゲルの法の哲学といわゆる歴史的な共同体概念として理論的には集約されている。共同幻想の歴史的に最も高度な姿としての法的疎外の構造（政治的国家）への批判は初期のマルクスの労作や中期から後期の政治論文（フランスの内乱、フランスに於ける階級闘争）で一定程度、示されている。それらの理論的頂点であるヘーゲルの国家論（法の哲学）は批判しつくされているがマルクスがヘーゲルの法の哲学への批判として試みた「ヘーゲル国法論批判」の方法では国家の死滅への理論構築は困難なところをもっている気がする。そして、エンゲルスの「家族、国家、私有財産の起源」やレーニンの「国家と革命」の方法でもそうだと思う。エンゲルス、レーニンの方法は国家——共同観念が階級的利害の表象であることを一貫して暴露しているが、その構造把握と止揚の糸口は鮮明でないからである。たしかにマルクスはヘーゲル国法論批判の中で、近代国家（政治的国家——法的疎外の構造）について明確な把握と批判をなしている。そしてこの根底をユダヤ人問題の中で次のように述べている。

『現実の個別的な人間が、抽象的な公民を自分のうちにとりもどし、個別的人間のままでありながら、その経験的な生活において、その個人的な労働において、その個人的な関係において、類的存在となるときはじめて、つまり人間が自分の「固有の力（forces propres）」を社会的な力として認識し組織し、したがって社会的な力をもはや政治的な力の形で自分から切りはなさないときにはじめて、そのときにはじめて、人間の解放は完成されたことになるのである』。

のがあるだけであって、ただこれらの共同体との矛盾においてのみ、ただの個人としてのみ、彼は公民でありうるにすぎない。彼の国民としての在り方は、彼の共同体的、在り方の外に存するところの、したがって純粋に個人的であるところの、在り方である。√「権力」としての「立法権」にしてじつにはじめて組織なのであり、彼の純個人的な在り方にあたえられることになる共同体なのである。』（ヘーゲル国法論批判）。

『一、立法権が政治的国家の全体性であるということは、政治的国家の抽象の一つの見方である。この一つの行為が市民社会の唯一の政治的行為であるがゆえに、皆は一済にその行為に参与するべきであるし、また参与することを欲する。二、皆が個々人としてである。議会的要素においては立法活動は社会的な活動、社会性の一つの機能とはみなされておらず、かえってむしろそのような立法行為において個々人ははじめて、現実的かつ意識的に社会的な機能、換言すれば一つの政治的な機能にはいりこむというふうに見られている。立法権はここでは社会結合体の発露、機能などというものではなくて、かえってその立法権こそがやと社会結合体を形成するものなのである。立法権への形成は、市民社会のみんなの成員がお互いを個々人とみなすことを要求するのであり、彼らは現実には個々人として相対立しているのである。△「国家の成員である」という規定は彼らの「抽象的な規定」であり、彼らの生きた現実のなかでは現実化されていない規定なのである。√

政治的国家と市民社会との分離が生じる場合には、皆が個々に立法権に参与するということは不可能である。政治的国家は市民社会から分離した存在である。一方において市民社会は、もしも皆が立法者であったならば、市民社会たることを廃すであらうし、他方またそれに対立する政治的国家

は己が尺度にかなった形式においてしか市民社会を許容することができない。換言すれば代理を通じての市民社会の政治的国家への参与こそは、市民社会と政治的国家との分離およびそれらのたんなる二元的一体性の表現にはかならない。

もしも以上のごとくでないとするれば、こんどはその逆でなければならぬ。市民社会が現実的な政治的社会である場合には、政治的国家を市民社会から分離した存在とみる見方、政治的国家の神学的な見方、からのみ出てきたような要請を出すことはナンセンスである。この状態においては代表的権力としての立法権の意義はすっかり消えてしまう。ここで立法権は各職能が代表的であるという意味において、例えば靴屋が一つの社会的必要をみたす点で私の代表であるという意味において、代表なのである。それはそれぞれ特定の社会的活動が類の活動としてたまた類——すなわち私自身の本質の一規定——のみを代表するという意味において、各人が彼ならぬ他人の代表者であるという意味において、代表なのである。彼がここで代表者であるのは、彼があらわすところのなにか他のものによってではなく、彼という人間そのものと彼の行為によってなのである。

△「立法権」の獲得がめざされるのはその内容のゆえではなくて、その形式的政治的意義のゆえである。ほんとうのところは例えば統治権のほうが立法的な、形而上学的な国家機能よりも、はるかに人民の願望的でないならばならなかったはずである。立法的機能は実践的な活力における意志ではなくて、理論的な活力における意志である。意志はここで捉のかわりにものをいうことがあつてはならないのであつて、肝腎なことは現実的な捉を見いだしてこれを法文にする点にある。▽

国家の編成は共同の観念が歴史的に累積されていくことであるのだが、その最も象徴的なのは戦争や革命である。革命は国家的にみる限り、それ以前の歴史的な共同の観念からの解放であり、支配的な共同の観念の部分化や止揚である。例えば、フランス革命はそれ以前の宗教的な共同観念から、人間を解放し、自然法—人権・自由・平等という新たな共同観念が支配的となつていく過程である。そしてこれが立法として権力を構成していく過程で、それ以前の共同の観念に支えられた制度や機構を打ち砕いていくものであつた。また戦後過程で、それがどのような経緯をとまなうものであれ、「天皇制」的な共同の観念から、人々が解放されていった過程は「革命的」なものであつた。現在、私達が目前にしているのはフランス革命以降の自由的国家（ブルジョア国家）もロシア革命以降の社会主義的国家も、歴史的な共同観念としての吸合力を拡散させていることである。ここで問題なのは、共同の観念そのものを死滅に追いこんでいくことであり、その根底に自立や生活の恒常性というものをすえていくことであるが、それ自身も共同の観念として不可避にたちあらわれることである。そして、歴史的に累積されてきた（現存している）共同の観念とどう関係にたつていくかである。歴史的に、支配的な共同の観念が別のそれに編成されていく過程は「戦争・革命」のように現象する。歴史的、空間的に共時的に存在している共同幻想のたぐり寄せかたが問題となる。共同幻想の空間的現象の拡大過程が、共同幻想の包摂・止揚過程であるという錯誤にもとづく、「戦争論」、共同幻想の絶対化・価値化しての「戦争」の論理と、私達のたぐり寄せかたは異なるが。ただ共同幻想の部分化、包摂というたぐり寄せが、戦争のように現象することと「戦争」の論理をふわけしていくことは難しいことである。

ヘーゲル国法論批判。

マルクスが人間の「固有の力」、あるとここで生きた現実というように使用している言葉は「自立や生活の恒常性」ということと同義なのであり、立法という概念はそれから疎外される共同観念と解していいだろう。宗教から法へそれが有る枠内ではあるが此岸化したこと、平等化し、個々人の契機へ転化したことと「固有の力」を政治的な力として分離しないでとり出すことの間にはどのような連環と方法が想定し得るのであるか。多分、そこには立法—権力を形成するという概念の、つまりイメージの転換が要請されているのだと思われる。政治的国家が市民的社会から分離されたものであり、階級的疎外に法的疎外が関連づけられるものである以上、立法—権力が党派、もしくは共同体間の闘争として現象するのは不可避だと思われる。その場合、政治そのものが、個の現存や、日常的生活から分離し、逆立していること、その不断の傾向を価値化するのではなく、逆の過程こそ重要であることはしばしば語ってきた。とすると立法—権力の形式という概念が、政治的国家の体制、機構、制度の掌握と理解されがちなものと違ってあらわれるはずである。それ故にこそ、生活の恒常性や自立を政治の根拠にすることが、第一の課題であり、共同観念の歴史的性格（いわゆる歴史的な共同体—アジア的共同体、古代国家的共同体：等々）の理解や、構造把握が重要となるのである。人類史が歴史的に累積し、彼岸的展開をたどってきた共同幻想、共同観念からの解放過程が立法を形成するという今日の概念をなすはずである。この歴史的累積と現存的契機で構成されている共同観念から解放過程を過渡も含めて国家論として構築することがむづかしいのである。これは(V)の国家編成の問題と関連する。この問題に言及してみよう。

これまで展開してきた叙述は内ゲバ的な集団間抗争を止揚するための根源的な諸問題についてであつた。これが読者に難しかたでしか読みとれなかつたとすれば筆者の力量不足とともに問題の困難さであろう。だが、少くとも、内ゲバ問題についてはある面で、もっと簡単なのであつて、私達は次のように示せるであろう。

- (1) 集団への個的立場からの批判はいかなるものでも許容すること。集団への、個的立場からの批判に応えることは、集団としてでなく、集団構成員の個的立場で行うこと。
- (2) 集団間批判・対立において、集団の位相での対立と、個、家族の位相でのそれを分離すること。人間の実存にとつて、共同性と対と個は次元を異にしているのであり、このことの歴史的な現実化は（このような共同の観念の成立といってもよいが）、長い人類史の智慧なのであつて、混同する思想や論理がそれらによく勝利しえないことは自明である。集団間の批判と対立を、構成員の家族生活や個の実存の破壊へ転化して貫徹せんとすることは集団の存在自体の敗北なのだ。革マル派にこのようなあり方が、最も支配的であることはよく記憶しておくべきだろう。

(未完)。

☆好評につき限定増刷!

SECT6 大正闘争 資料集

B5版 ¥1,000

☆解説
 白星の後退戦から闇の中の後退戦へ……三上治
 SECT6について……吉本隆明

内容
 ☆「SECT6」機関紙各号
 社会主義学生同盟全国大会に結集せよ
 憲法と革命、「精神の闇屋」のたたかひの矢
 わずかな誤謬、プリント崩壊と社学同運動
 非情の状況、第二次東大派批判
 ……………他
 ☆「SECT6」パンフ1号・2号
 ☆中央大学昼間部自治会ニュース3号
 ☆belum omnium contra omnes
 ☆WASEDA クロンシユタツト1~2号
 東大教養部社学同機関紙「行動者」
 1~2号
 ☆大正闘争概観I・II
 大正闘争 60~62年

発行 蒼氓社
 東京都新宿区百人町1-11-31 齊藤ビル
 TEL (03) 362-0149
 振替 (東京) 162856 (予付140)

生活圏の変容とかくめい

神津陽

はじめにー問題の所在

栄光の68年から、69年秋の口惜しい敗北へ引き下ろされる渦中で、私たちは情勢の転変に対応しうる失地回復、蓄積力の巾をも含めて、新時代への射程を72年「沖繩返還」から75年「支配の危機と階級激動」に置いた。情勢の変容、支配の危機は私たちの予測通りの指示線上を、私たちの予測を越えるスピードで誰の眼にも明らかに立ち現われつつある。

69年以降の後退戦の意味は、民衆叛乱の日常秩序への回帰にも、支配層の強権政治への新左翼の屈服にもなく、国家―民衆構造を逆倒させる回路を透視し得ぬ革命派の構想力における主体的後退戦にあることを、私たちは口がすっぱくなる程主張してきたし、沖繩―砂川―三里塚闘争過程での経験内化を踏まえて、諸派へも公開の論争と協業を呼びかけてきた。だが、現下における政治状況の特徴は、一方における革共同両派間抗争に極限される内ゲバの歯止めなきエスカレートであり、他方での七月参院選へ向けての諸野党の保革逆転夢想と、これまたポンチ絵にも

ならぬ戸村一作当選を過ぎた選挙妄動である。民衆にとっての政治とは、自らの日常以外の輪郭のはっきりしない政治域総体としてある以上、私たちは絶望的内ゲバや戸村セレモニーをも政治の側の負債として思想的には引き受けざるを得ないのである。内ゲバが民衆を政治不信に駆り立てていると顔をしかめたり、本人は大真面目な戸村一作とその支持者達を、一億何千万円かの収入の上に青春の書を著す五木寛之や、お昼のワイド・ショーで楽しげに語るいいだもや、またぞろ参院選出馬の弁を述べたてる野坂昭如やと等しくだれ切った中年インテリのたわ言と一括して却ける自由は私たちにないものである。内ゲバ―戸村選挙に象徴される新左翼の惨状は、私たちにあって、ある時期闘いを共にした彼らが単なる党派好きや、政治好きに墮しているという無念である以上に、インフレ下の生活破壊に苦吟する民衆の日常にとっては全く無縁である。私たちは、政治思想、組織、運動の側から全政治域への必須の課題にこそ数年自信をもって肉迫してきた。本号での生活圏を真正面から扱う試みは、通常の左翼運動対象からの逸脱であることはもとより、私たち自身の歩みからしても思想的、社会的迂回路であることは明瞭である。だが現在、国家の、政治の、そして民衆運動の病いは徹底して重いのだと

共産同政治機関紙

叛旗

(定期購読の予約を!)

購読料 / 1部50円
 半月刊 (毎月5日・20日発行)
 定期購読料 / 半年 800円
 1年1500円

申込先 / 新宿区百人町
 1-11-31 齊藤ビル
 蒼氓社気付

共産主義者同盟「叛旗」編集委員会

赤燈社
 367-6098

●吉本隆明講演集

根柢への出立に向けて

B5判 / 一〇八頁 / 五〇〇円 / 〒一〇〇円

内容・根柢への出立に向けて / 国家・共同体・家族の原理的位相 / 「世界―民族―国家」空間・沖繩敗北の構造 / 若き戦士たちへ / 思想的課題としての情況 / 大学共同幻想論 / 自立と叛逆の拠点 / 共同観念の〈文化〉創造

*叛旗編集委にても取扱います。

I 幻想的革命と生活圏の行方

一 誰にとつての革命なのかの整理

いう衝動と、他方での「いかなる口説も、集団も先験化しない」という戦後民衆の楽天性との落差を私はここで検証してみたいと考える。沖縄闘争の敗北が私たちに強いた民族国家止揚の幻想的イマジニは、国家を民衆が生活上の便宜として遇し、社会との接ぎ目の不鮮明な日本ではいまだ思想内部の課題に止まらざるを得ず、民衆共同性との対比で構造として照射する作業の併行が不可欠であると思うからである。内ゲバも、戸村選挙も、先年流行の差別告発運動やも、革命をめぐる思想問題を回路に浮上している訳ではなく、日常をめぐる集団問題を要に主張、対立、運動しているという単純な事柄故に、私たちは党倒錯者や階級至上者や「虎の威を借る狐」然とした支援運動者達に、生活圏の自省は君たちこそまず必要なのだからと言っておかねばならない。本誌八号で触れたように政治集団や社会的利害集団の集団性は、民衆の歴史の集団編成水準の屈折した反映である。私はその箇所から、イデオロギーや、主観的限定如何に拘らず、誰もが強いられ、かつ引き受けている生活圏へ歩を進めてゆきたい。私は、インフレの天津波が垣間見せた民衆日常の海底は、政治革命の幻想的水準に引き寄せられるべき生活的現実を乗していると共に、現代社会における最も切実な情況の指標であることを確信して疑わない。だが、他面では情況の指標として生活圏をめぐる葛藤が浮上するということは田中角栄の五つの大切、十の反省、共産党の市民道徳強調の底流では既に民衆生活圏の現在感が失せ、関係が拡散し白け切った日常が進行しつつあるという重量を受けとめたいと考える。つまりこの分野においては「言の葉の栄える時現実には枯れ衰える」というイロニ

ーは常に私自身を引きづり込む穴である。以下、身の廻りでのありふれた事を、能う限り自覚的に検討してゆきたいと思う。

いないこと。第二に、社会主義が基礎をおくするのは「プロレタリアート」であるが、プロレタリアート自らが政権を維持している社会主義国はいまだ出現していないこと。それは、資本主義発展の未成熟なそれ故プロレタリア形成の遅れた地域でのみ「プロレタリア革命」が成就しているという逆説と、他方で資本家階級の一掃後も国家機構の官僚層による維持と、強圧的権力としての発現を突破する理念も形も登場しえないことを含んでいる。第三には、「社会主義国」つまり国家形態を持った共産党政権以外の、先進資本主義国や、第三世界諸国の革命運動も、結局社会主義理念の徹底府化と、依拠すべきプロレタリアート、および被抑圧民族の強調のレヴェルでしか血であがなったロシアや中国の革命を経験化していないこと。第四には、ソ連派、中国派から反スタ派、第三潮流に至るまでのごとくのマルクス主義政治潮流が「党」の神話に依拠し、自らの存立根拠をおいていること等であった。

②革命像を、一般の人間の実践と等しく、目的、手段、主体の連関で浮び上がらせるとして、まずその主体を問う時は党と民衆の関連に視線を集中させねばならない。通例言われる国家と民衆の関連は、党の内部での目的と主体の関連として予め組み込まれているとされてきた。だが党はつねに前者を掲げる政治主体として民衆にその支持を問うが、問題は本当はその後者が従属的に扱われる点にあるといつてよい。革命党の綱領「戦術」と呼ばれるものは、その目的体系と適応形態であり、どのような政治組織も美辞麗句を掲げ政治的立場を明らかに打ち出そうとしている。私たちはかかる党派の政治思想、共同性の内容をこそ一義に問い、党派への目らを含めての評価基準と為してきた。だが、多くの革命運動の歴史は、党派の共同性の陰に隠れた集団性を民衆からする評価へ逆転させ、国家の崇高な革命と人民の権利の宣言が民衆共同性の収

①「はじめに」で述べたように現在の政治が内ゲバと保革逆転。戸村選挙として主要に発現しており、情況の指標として、インフレ下の生活圏での葛藤をさしのぞくことも出来ないという対比は、自ずと私たちを自らの位置を含めて政治位相の点検を強いているといつてよい。

いうまでもなく、現代世界のイデオロギー的政治対立は、ブルジョワ共の意向を「国民」の名で語る自由主義、民主主義、保守主義と、プロレタリアートや農民、下層貧民、被抑圧民族の名で自らを主張するマルクス主義、社会主義、社会民主主義との対峙として名目上はある。マルクス主義陣営の中では、中ソ論争を筆頭として構改派や反スターリン主義や、日共型プロレタリアート執政まで含めて諸派が分立しており、互いにマルクス、レーニンの主張の誰が忠実な継承者であるか、誰がプロレタリアートの味方であるかをめぐる果しない論戦が続いていることは周知の通りである。

私たちは、右のようなカッコつきの「社会主義圏」と「自由主義圏」の併立という世界認識の前提のもとにある、それらへの反発としての中共、反スタ派を含めての政治主張を前提からして誤まった宗教国家レヴェルでの理念とみなしてきた。私たちの批判は第一に「社会主義圏」「自由主義圏」の空間的対立は仮象にすぎず、国家の幻想累積の水準差の発現にしか過ぎないこと、無論スターリンが強弁したような社会主義国家、社会主義的民族、社会主義市場などは観念の中以外のどこにも存在して奪の上のみ花開いたことを示している。如何なる革命権力も民衆に対して一方で啓発的に、他方で強圧的に立ちあらわれるという歴史の結果は、国家共同性と民衆共同性の接点で、革命の評価軸としての国家水準が定まるという新たな視座の導入を要請していると思われる。

③私たちに於ける「革命のかくめい」の試み、たとえば社会革命を内包した政治革命、国家・社会構造の打倒、行政的国家的打倒・幻想的国家的止揚。階級社会的打倒・問家族社会的止揚、民族・世界空間の破砕、世界同時革命・社会的階級形成等は、つきつめて革命論からいえば革命の目的体系へその基礎としての、主体位相を組み込まんとする政治党派の側からの接近である。政治革命はまず国家権力の問題であり、敵階級との攻防における権力奪取を当面の最大の目的とする。ここにおいて権力奪取の態様や攻防の環の如何に拘らず、そこにおける政治革命への必然的回路は、党派闘争における自然淘汰と、沈黙の領域をも含めた民衆の支持が決定するのである。だが政治革命が可能な条件と、政治革命の世界史的水準の獲得条件とは位相が異なるのであって、私たちの「革命のかくめい」への努力は権力構想を時間的に引き寄せて、政治革命の世界史的水準突破を目指したものでないといえよう。だが「革命のかくめい」への努力は、党派闘争、政治論争を場として党派における避け難い理論化と実践作業であるが、所詮それらは党派の側における努力であり、民衆基盤への接近の志向にも拘らず、現実の政治的結合は了解可能対象とのみ取り結びうるという、現代における「政治」一般が必然的に負っている民衆の側からの限定を突破することは出来ない。

「革命のかくめい」と併行して私たちが押し進めてきた「関係のかく

めい」への努力とは右の政治が引き受けざるを得ぬ負荷に自覚的に対処せんとする営為であった。党倒錯者批判と、社会闘争論の深化として為されてきた作業は、 \wedge 党—大衆 \vee 構造の止揚として一括しようと考える。だが、ここにおける問題は \wedge 党—大衆 \vee 運動の内部構造と政治的共通性水準への批判として依然として正しい指摘にも拘らず、その批判のスケールは党の側から立てられるという限定についてである。 \wedge 党—大衆 \vee 構造の批判は、政治集団の倒錯した主体価値転倒と、啓蒙運動パターン、他方での大衆運動の政治化、全国化仮象を意味過程として上げ底化し無自覚に受容する共通性と運動、および両者の安易な政治的秩序化としての結合に向けられていた。だが、ダメな政治党派とダメな大衆運動の政治的指導部への壊滅的批判は、それらも又民衆日常にとつての異和であり、等しく駄インテリ共であるという反撃に少しく身をかわして立論しているのである。

④革命の世界史的水準を越え出る権力像の獲取への想いと、自らの政治集団としての限定位置の自戒は、政治党派の力としての構想力—経験化力の裡に編み込まれる政治的成熟の鍵であった。だが、私たちの経験は \wedge 党—大衆 \vee 構造の止揚なる主張を如何ように引き寄せようとも、それは政治集団の倒錯した、大衆組織の上げ底された、各々の共通性と結合態様の批判と了解（それは極めて大切なことであるが）以上を出ないということと考えた。その限定を突破する導入口は政治組織、大衆組織を貫通している共通性のその内部における幻想性—集団性を分岐して取り扱うことだと了知するには、政治組織自体の集団性、日常性、構成員の生活価値をめぐっての迂回路としての諸経験が必要であったのだ。本誌八号における \wedge 幻想性—集団性 \vee を方法視座としての政治組織と民

込みで応えればよい。だが後者の領域については、政治組織も民衆の日常結合も等しく貫通する民衆の集団編成の水準の限定として大胆にとり扱かわねばならない。幻想的の革命、政治革命が民衆のための、民衆にとつての革命に引き寄せられる回路はここにこそあるし、ここからしかないのである。無論集団編成の水準からいえば、如何なる革命的理念を持った政治組織もそれから無縁ではないのであり、党派は自らの政治日常において常にその箇所への回答を強いられているのである。

従来の政治理念や政治党派に対するからめ手からする批判は、知識層の側からも民衆の側からも右の領域、政治集団の日常域に集中してきた。小林秀雄に典型的な、君達是如何に美しく革命理念を語ろうとも日常生活においては無惨な毎日を送っていることを私は知っているという語り口も、民衆の側からの保守も革新もくそくろえ、手前らの名誉や金欲しさに大義名分をつけているインテリ共の自己満足じゃないかという蔭口も、共に斜身に構えて為されてきた事に注意しなければならぬ。日常や、生活圏を傍へどけて他者を指弾するという傲慢さの対極にこそ、政治のリアリズム観、埴谷雄高から、連合赤軍、中核派まで貫ぬく民衆にとつての革命の必然性を党の必要性におき換える強弁が生き延び、容認さされてきたのである（無論、自分でやったことを口をぬぐってごまかす車マル派や日共等の品性劣等分子は問題外である）。私たちはといえ、その領域について、自らの側の限定された場における政治集団経験、異集団間交通を個々の日常営為において徹底的に掘りさげ、私たちを含めた民衆成熟の尺度を押し上げたいと尽力してきているつもりである。砂川で、学園で光文社等の職場運動で、特に現下の焦点としての三里塚での軌跡と試みがそれである。

衆の日常性をめぐる諸課題への切開は、私にしてみれば共同体論のモチーフの幻想域からの日常域への引き寄せへの中間回答であった。吉本隆明の「大衆原像の繰り込み」という狭い、古典的な、左翼党派性の止揚への方法提起に深く心動かされながら、 \wedge 大衆原像 \vee も \wedge 繰り込み \vee の視座も、政治党派、思想者を通してのインテリゲンツィアとしての限定的立場にすえられているのではないかという疑問に、共同行為や労働域を包括しうるより広い視座を求めての試行錯誤から「所有論を含んだ生活思想」や「行為の共同性」やの提起で応えんとしてきたといつてよい。私も60年代の自立運動者の通例と等しく、思想において吉本隆明に、実践感覚の跡づけて谷川雁に多く学んできたが、共同体論を経て共同性の二重視座を導入することで総合的なパースペクティヴを手に入れたとあると、70年代の中ばで考えている。共同体論におけるあいまいな部分を経験と構想の双方から見極めるとき、幻想域における個的幻想—対的幻想—共同幻想の位相差と、日常域における生活場における総合の区別もよりよく了解し得てきたつもりである。

⑤さて、私たちの政治思想における提言のうちで、世界同時革命や世界プロ独についての新視角よりも、関係のかくめいや党—大衆構造の止揚の側が圧倒的に波及力をもっていた。だが他方でお前たちも又あたりまえの政治党派だという論難をも受けてきた。私は、前者は依然として党神話がはびこる日本の革命運動の土壌の問題であり、後者は前者も成りたしめていた政治を日常にとつての異和として扱う民衆生活圏のあり様として受けとめたい。

前者の領域については、従来通り、否より更に歩を進めて党倒錯者集団の足場を掘り崩し、政治的共通性位相の明確化と経験の自覚的繰り政治嫌いや、党嫌いや、他方での現場至上化や、労働者、被差別者、被抑圧者物神化へ傾斜しがちな諸君からの \wedge 政治党派 \vee へのアレルギーや、優越感や、排他性に基づく批判には、諸君の足下を見よ、刃は諸君にも向けられているということこそを指摘し私たちは、三里塚でそうしているように自省しつつ抵抗を持続してゆく所存である。政治における理念と日常の垂離を指弾する諸君の多くが、小インテリのけち付けに止まることに、私たちは君達もまた惨劇を抱えているのだという、同レヴェルでの批判のみならず、より深く民衆共同性からの上げ底に自覚的であれと言わねばならない。

民衆にとつての革命の課題は、日常圏の姿容に、自らが生活の主人公に至る歩みである。政治革命の先行性がそれへどう関わりうるかは、実は政治理念の問題ではなく、政治日常からの民衆像 透視にこそあるのだ。

二 \wedge 法 \vee と \wedge 階級 \vee による疎外の位相

①現代世界—過渡期世界が民族国家併存空間としてある と、そこにおける基本矛盾が国家の一国的編成と資本、市場の世界性にあることはつとに指摘してきた。民族国家—市民社会編成が現代世界の共時的、つまり空間的基本構造であるという時、一つの領域に答えておかねばならない。それは世界には多様な国家があるということ、様々な民族国家があるという以上に、「社会主義国家」も近代国家も宗教国家も、前国家もあるように見えるということ。また、市民社会においても同様に、多様な併存と、歴史的多段階があるように見えるということへである。この双方には、国家にも社会にも歴史的累積度があること、この社会の

歴史的累積度は主に経済社会構成に引き寄せた生産諸関係として計られるし、国家における歴史的累積度は生産諸関係の上にそびえ立つ幻想的国家水準として計られるし、それら総体を規定づけているものとして諸生産様式段階をみておけばよい。資本制的生産様式段階下の、現代社会はブルジョワ社会であり、現代国家は自由国家の水準にあることは自明であるが、ここで必要な視座は「累積」Vと「段階」Vの区別である。多段階的国家の併存は、自由国家を最高度として幻想的国家本質が重層的に積み重ねられている証左であり、この自由国家の歴史的水準における国家間関係が多様な国家の併存の意味である。同様に、多段階的社会の併存は資本制的生産関係を上限に、重層的な経済社会構成が積み重ねられている証左であり、この資本制的生産諸関係は世界資本主義の中に多様な一国的社会を組み込んでいるのである。

民族国家―市民社会編成を世界を貫通する基本構造（構造としての骨格は共同体編成だ）であるという時、かかる歴史累積とその発現としての関係様式に深く留意しておかねばならない。歴史的累積の視座を手離さなければソ連や中国の神話化にいられることなく理論的には民族国家水準を止揚することが、世界的政治革命の課題であり、資本制的生産諸関係下の労働と所有の在り方と価値法則を止揚し突破することが社会革命の基礎をなすことは当然了解可能なことである。

さて、国家―社会構造の中で、人はどのように立ち現われるか。自由国家の下では人は抽象的法的人格として、資本制社会の下では人はある階級や階層に属する労働単位として扱われる。国家や社会を構造的に把握する時は総体としての双方の抽象的、具体的構成部分としてのみ位置を占める。右のような構造に自らの意志と無縁に位置づけられながらかくす法による均等な疎外が自由国家下の法の完成であることは付加しなくてもよいだろう。

社会において階級を介して疎外されるとは何か。これは、自らの意志と関わりなく、働いて食う生命維持活動が何らかの職業を彼に強制し、職業と所得にもとづく、差別の体系の中で私的階級分化として、収入諸源泉に見合つて市民社会構造的に析出される地主、資本家、賃労働者という三大階級への所属のことではない。厳密に言えば、労働態様としての職業を、更に所得が内部分割する階層的分化であり、この諸階層をヘーゲル風に互いに私的階級と呼んでいるのである。

④さて、階級による疎外とは、私見では（家族を基とする）生活圏からの集団性による疎外としてつきつめて扱われるべきである。法は共同性を押し出してどの場にある個々人の幻想累積をも歴史的共同幻想の累積水準に組み込むことにより、国家と国民という権利と義務の関係を形創る。階級は、これに比して私的階層利害を押し出して、個々人の日常生活、行為累積を社会経済構成体累積下の労働制度に集団的に組み込むのである。だが、はつきりしていることは国家からは国民という、社会からは特定の階級という規定を強いられようと、人は決して国民として、あるいは階級として、それらを含めて対外的に民族としても生きてきている訳ではないということである。個々人の日常生活は、幻想的主体としての個体のままでも、労働過程における強いられた協業場だけでなく、それらを含めて家族域を再生産の主戦場とする生活圏を舞台に演ぜられているのである。法による疎外は個に対する幻想的共同性からの疎外であることは明確であるが、階級による疎外とは強いられた集団として振舞わざるを得ぬ疎外である。生活圏の視座を導入すれば、国家に

も、人は国家の幻想単位として、あるいは社会の経済単位として生きていく訳ではない。過渡期世界論へのアプローチとして本誌三号で述べた、右の如き構造的把握に對しての關係的把握視座は、構造的、客観的規定を自らの外側から受けとりながら人は現存的、關係的にはどのように立ち現われるかの引き寄せを意図していた。それは国家―社会構造が、現下の政治、社会革命の壁であるということ。それら双方を科学的に分析し、矛盾をえぐり出すことと、生身の人間の幻想と日常をめぐつての葛藤としての革命運動の課題とは論理位相が異なるのだということ。包括的な国家や社会の下での人間の共同的、集団的、生活的諸矛盾のはざまに誰れにとつても日常はあり、その過中で人間の諸実践は為されており、革命運動の必然性はそこからのみ形成されるという視座であった。右の關係的把握に、先に述べた歴史の累積的把握を含ませる時、人間社会の構造と歴史は次のように浮上してくる。

③人は、国家―社会の構造の下では、国家の側からは行政単位、社会の側からは経済単位として疎外される。だが、人は国家―社会の關係の中では、国家からは法によつて、社会からは階級によつて疎外される。時代の国家―社会構造は巨視的生產様式段階によつて歴史的に構造変容するが革命は歴史―關係の中から産み出されるものであり、国家―社会構造の解体、つまり社会革命段階における国家の死滅、歴史的、關係的擬似共同性の死滅に至るまでは、幻想的諸關係―生産的諸關係を総括する国家との對峙、つまり政治革命として遂行されるのである。

国家において法を介して疎外されるとは何事か。幻想的共同性に個の日常意識が収斂されることである。ここにおける国家と個々人としての民衆の關係が歴史的水準をもつており、経済社会における不均等をおしおける法による疎外は生活圏からの幻想性、国家共同性による疎外であり、社会における階級による疎外は生活圏からの集団性、上げ底された民衆集団性による疎外であるという。

国家は、法としての幻想的共同性累積による国家―国民秩序維持に、民衆共同性の収奪による市民社会総括を加えて成り立っているのである。政治革命が幻想的国家を構想力で越え出んとする時、他方での民衆共同性の奪還、集団性の上げ底を空洞化する歩みは併行した日常的課題である。民衆からする政治評価は、自らの日常に抵触する後者に規準をおいていることは当然のことである。誰にとつての革命なのかと問う時、国民としての権利や、強いられる道徳や、社会規範の如何に拘らず、それらを受容し基礎づけている生活圏こそが、そこにおける個と家族と職場集団性の葛藤こそが評価の軸である。誰にとつての革命なのかとの問いは、誰にとつてもの革命という、民衆の集団編成、上げ底前の共同性の水準を問うているのであり、問いそのものが、對極に想定しているのは民衆の成熟度なのである。この箇所を撃たぬ限り、法や制度と闘う政治革命が、民衆日常にとつて見物の対象でしかなく、自らの生活圏にそれらが抵触した時は排他的に反撃するという、日本革命運動の弱点は止揚されるべくもないのである。

三 国家―社会V制度と生活圏

①人は法によつて民衆共同性を収奪され、階級によつて民衆集団性を上げ底化されることを二で見えてきた。ここで扱いたいのはかかる国家―社会に構造づけられている人間の解放とは何か、その規準は何かへの漸

近である。法と階級による疎外、収奪は人間の現存時間に対する外圧としての歴史的時間からの抑圧である。だが、歴史は人間の現存時間を共同幻想によってしか収奪することは出来ない。国家本質としての共同幻想は、経済価値法則に強いられて、人を国家へ総括すると共に、社会間関係を道徳や慣習やの上げ底化、公的性格の付与により秩序づけようとする。生きる為には労働を強制される人間は、かくして国家―社会制度にしばられつつ、決して収奪され尽くすことのない個の観念と実践と協業を、これまた対幻想に根拠をもつ家族へ引き寄せた生活圏の日常を営むのである。

宗教的疎外は自由国家によって制度的に止揚され、法的疎外は政治革命によって止揚され、人類の歴史的前史は、人間の人間の解放たる社会的解放によってそのピリオドを打たれる。以上の風にロマン的に語られる社会主義や共産主義へ至る歴史観には、途は平坦ではなく自ら形創る他ないこと、止揚とは発展段階の転移、対象の廃絶ではなく成層化されることだとの付言をなさねばならない。

宗教や法としての法は国家水準の中に累積されて残存する。前近代的生産諸様式は、資本制的生産様式の下につつまみ込まれて累積される。私たちが時代を飛び越えることが出来るのは共同的思想、予料の上でのみであるとするなら、革命はまず幻想域へ集中する政治革命としてのみ可能な根拠をもっている。

幻想的国家は自らの実体を行政的国家として押し出し、価値法則は労働と所有の社会制度による秩序づけとして自らを貫徹する。政治革命の本質は幻想的国家との格闘にあり、その規準は幻想共同性累積の突破の水準にあるが、目に見える形では政治、行政制度からの解放として立ち

ありながら地つづきであるということであり、個的―共同体的所有、主体、意識でいう「共同体」が包括的に、平面的に扱えられると必ず旧来の私的―擬似共同体的なそれへの退行を阻止しえないということである。

国家はその幻想核を歴史的な共同幻想累積に持っているが、その空間的維持は日々の民衆共同性の上げ底化と、歴史的共同幻想累積への組み込み、収奪に拠っている。国家は、構造的には社会の上にそびえたっているが、関係的には民衆に対し歴史にうらづけられた法を押し出し、民衆の側からの自然的、日常的、協業的共同性を道徳や社会規範の下位法化を通じて収奪しているといつてもよい。

③人が制度を作るにも拘らず、制度が人に対し強圧として現われる虚構を撃たねばならない。人と制度との逆倒は、法は民衆共同性の慣習から道徳、宗教への上げ底化、共同幻想態への組み込みの上に、自らを国法として分離して立ち表われていくことと、包括的民衆共同性は、国民階級、民族等の如何なる呼称を措えようとも右の上げ底化を阻止しえないという、人間の共同幻想域とのねじれの関わりに根拠をもっている。

人と制度との逆倒は、第一には民衆共同性の生成場を生活圏におくこと、第二に民衆共同性の共同幻想への収奪を集団性の幻想性への転化として読みとること、第三に制度からの解放を国家共同性からの個的幻想的解放、民衆相互間における集団性の制度化からの日常的解放として基礎づけることで再転倒しうると考える。

政治的死滅へ向けて政治革命を為さんとする時は、如何なる権力基礎を有しているかに拘らず、国家からの生活圏の解放がその規準を為すのである。だが生活圏の解放は、さしあたりブルジョワ国家に代わる、プロレタリア独裁(半国家)からの行政的、政度的解放として先行する

現われざるを得ない。同様に社会革命の本質は価値法則の止揚、強制労働の止揚であるが、実体的には社会、労働制度からの解放として立ち現われざるを得ないのだ。

政治革命と社会革命は、構造的、巨視的には段階的なものであるが、自由国家以降のつまりブルジョワ革命以降の政治革命はより幻想化されると共に、より社会革命課題を取り込まざるを得ない。社会革命を内包した政治革命とは、法による共同性的疎外と、階級による集団性的疎外を併進的に止揚せんとする。国家の二重性への狭撃であると言いつてもよい。

②多く市民社会―国家構造を階級社会と抽象的法的平等国家の矛盾として扱う人は、国家の歴史の累積に無知である。また、右を主体としての市民社会と幻想的国家との矛盾として扱う人々は、市民社会における歴史の累積に無知である。本誌四号段階で私たちが陥りかけた、市民社会が国家を無化するに至る革命過程、主体としての社会的階級の形成という構図は、巨視的にしか扱えないということ、構造的にそうであるということであり、歴史―関係的には全く別の視角が必要だという限定を含んでいたことを反省しておきたい。問題点は個的―共同体的所有論が、実体的に理解されただけのコミュニケーション運動に墮してしまいういう空転と、社会的階級形成の内部で個や家族の、理念ではなく日常思想は如何にあるかへの踏みこみの弱さにもある。

私たちは、多くの試行錯誤の中から把んだ解放への原イメージを共同体論の枠の内に組み込んだ。私たちの右の反省からはつきりさせておきたい。思うのは、共同体論へのモチーフは、この間述べてきたように集団性域にあるという確認であり、この集団性域は共同性域の対極にあり、その裡で政治化、全国化、上げ底化を拒絶する民衆の側の成熟、時間的奪取として進行するのである。

民衆日常は、法により共同性的に疎外されていると共に、民衆相互関係において階級により集団的に疎外されている。この二色の幻想的疎外は、搾取、剰余価値収奪そのものと、それを可能にする労働社会制度の維持要請に見あつて強化される。

④過去の、プロレタリアート、農民、被抑圧民族の血であがった革命運動の歴史は、私たちに法と、制度の勝利と、それを許してしまつていく民衆の敗北を教えている。民衆の側にとつてみれば、地主による土地への固定、資本家による搾取から、かっこつきの「社会主義革命」「民族解放革命」が試行錯誤であれ解放を日指してきたし、現に制度的変革は、中国文化大革命過程に象徴されるように進行している。革命は、如何なる国家制度や、官僚層内部の権力闘争や、党や階級や民族やの神話を産んでいようと、民衆の生活が解放前に比し格段に暮らしやすくなつていくという一点では、支持されねばならない。だがそれは、ケインズ理論が古典経済学に比して革命的画期であったと同じ意味であり、その前線にニューディール、ファシズム、スクリーン主義がくつわをそらえたという意味においてである。

他方幻想的、革命思想においては、国家神話は、歴史的幻想累積の突破という要請に、空間的集団性の包括化、上げ底化ですり換えるというシステムに従つて、社会主義や階級や民族やの名を称して、再生され、内敵、外敵、他路線との抗争の名の下に逆に強化されつつある。

共同性の歴史累積と、それへの絶えざる民衆共同性の組み込み、収奪として国家理念は累積されており、この様式と水準を突破している国家

も民衆も今だに現存していない。即ち、革命運動の政治革命としての評価は、人間の物質的生活水準の如何に拘らず、法が自らと社会に差し出す政治—社会制度の中に具体的に指標をもつ大義名分や、輝やかしい決議や宣言や前文や抽象的法的規定の背後で、生活圏は国家にどのよう待遇されているかを問えばよいのだ。

国家は民衆の個々人に法的規定を与える。民衆は自らが直接見聞しうる自己規定を、私的階級利害として押し出すか、民衆総体と同置し、道徳や社会規範を受容する。だが人は、頭で逆立ちして個々人で生きている訳ではなく、また階級や民族や国民として公的に生きている訳でもない。双方は生活圏の中の個の観念、そこから透視しうる民衆共同性としてのみ、構造的に普遍性と連なりうるのである。

⑤ 国家からの生活圏の解放は、家族、職場、居住地においての個々人が法的強圧から制度的に保障されている度合いでさしあたり規準づけられる。だが、その制度を関接に支えているのは民衆共同性、集団性の歴史的水準なのである。つまり生活圏における自己解放は、擬似的共同性、上げ底集団性、私的階級による相互差別からの解放であり、このことはさしあたり社会における家族の、対の独自性の獲得度が規準となる。けだし生活圏とは、自然的性関係としての一対の男女に引き寄せられた労働と居住の場であり、国家を無化するには、そこにおける相互関係を価値源泉とする民衆間交通と共同性の自己総括が鍵なのである。理念に対して現実からする「からめての批判」は、政治思想や共同性の領域においてではなくて、政治集団の日常性を自らの日常との地続きとして扱う時、相互批判と点検として意味をもつのである。中国において、ソ連において、個を含んだ家族を核とする生活圏はどのようにあるか、比較制

II、関係の修羅場で考える

一、他者との日常について

① 人は、自らの責任とは無縁に一対の男女の下に、ある環界と歴史段階の只中で生を享ける。人は生まれおちた時から身体と身体を容器とした意識を併せ持ち、最長一世紀強の物理的時間を、生活圏に引き寄せつつ生き、個的にだが類の一員として生涯を閉じる。人間の年令の加算は、意識の内部での、意識における身体容量に見合った生理的時間に対する、身体容量を越え出た観念的・個的時間の比重の拡大と、意識域総体と身体域との拮抗として、いわゆる成熟への道を途る。人間の精神史を、純粹に観念的、個的時間史として展開として扱い切ったのは周知のようにヘーゲルである。ヘーゲルにおいては、生理的反応—自己意識—客観的精神への歩みが、一つには弁証法的発展として、他方では価値化過程として扱われている。私たちがヘーゲルにおいて学ばねばならぬのはこの観念の弁証法であり、弁証法的発展とは時間の重層的累積であるという視座である。他方で私たちが排撃するのは観念の弁証過程が客観性の獲得・価値化過程として扱われている点である。観念の発展過程は、遠隔対象を引き寄せ、抽象レベルを上昇させる意識の自然的拡大、抽象化の過程であり、地方で身体行為に根ざす日常意識と場からの離脱過程である。

身体において、自然から、そして他者から隔絶されている個体として

度論への誘惑を一応断つて、次章では日本での私と私の周辺の日常から民衆の集団性と共同性の有り様へ追ってゆきたい。

の人間は、ただ観念の中で、思想としてのみ共同的でありうる。個の観念は、歴史的水準と環界に制約されながら、歴史的産物としての言語で観念する限りで、個の日常と個の観念のはざままで、また個の観念総体と共同的観念、歴史的幻想累積のはざままで、大きな埋め尽くすことの出来ぬ空洞をかかえ込んでいると共に、幻想の上では分ち難く自らと逆立している共同性と結びついている。

② 人は出生について自らの観念において責任を負えないと同様、言語で観念せざるを得ない歴史的幻想域の受容についても責任を負えないし、負う必要もない。ただ、観念が他者と日常に、言い換えれば環界と歴史に囲まれ、制約されて生成せざるを得ぬこと、その個所への着目は重要な意味あることである。観念の自然成長性の内部では、他者も又観念としてあり、自らの歩みへの手段としてある。また観念の内部では、外的時間としての日常の推移は、観念を再生産する容器としての身体の維持時間であり不当に卑められている。

個の観念は、その内部では空間的にも時間的にも無制約であると先験されており、自己至上化しようが、世界の命運を自己に引き寄せようが、高慢と偏見も、猜疑と狂信も、要するに自在であり自由である。

個の精神を問う時、観念内部の変遷をたどって行けば、自然成長的観念の他者と日常に対する当惑は、それをも観念の幹を太くすることによって成育するという仮構を産むと共に、他方では自然成長的観念の根幹への懷疑を産み自己敗北へこれらを導びく。私が前者を架構という由縁は自己観念の絶対性に、共同性を密通させることにおいて延命しうるに過ぎないからである。私が、後者を自然的転回と呼ぶのは、観念がその容器としての自体に直面し、地上へ引き下ろされる不可避な歩みである

からだ。

観念の一般論をそれとして展開しうるのは、自己観念の内部における絶対性と、共同観念の命運についての自己意識を掲げた考察のいずれかである。観念の一般論は、他者と日常を、意識の私有圏へ組み込み、自己増殖の素材へと転化し得るという錯覚に従い、閉ざれた自転の途をたどる。多くのインテリゲンツィアやインキゲンツィアの悩み、学問や科学や実生活の、文学や芸術諸活動と日常との落差への強いられた直面は、もちろん共同観念を引き寄せた、あるいは自己観念に忠実な個体の当惑であり、いわばその限りでは天上界における天上と地上の間での悩みである。良心的知識人であるか、前衛覚同併者であるか、階級的自覚をもった階級的科学・学問の研鑽者であろうが、等しく受ける右の閉鎖的理論、意識回路の解体は、知識層における神話の解体の第一歩である。

誰しもが、何を考えているか、何を表現しているかに拘らず、歴史と環境に規定づけられた生活場の累積、時間化で生きているという事柄への着目をこそ他者との日常は強いている。

③他者との出逢いも、日常への自省も、精神の上げ底化の基礎の解体において不可避である。親からの離脱と対幻想の引き寄せは他者との出逢いの指標であり、思想の容器としての身体の再生産を目前で為さねばならぬということ、強いられた物理時間の消費は日常への自省の又となり契機である。恋愛が他者への就職による物理時間の収奪が日常への自省の契機であるが、それらは可能態としての親世代の形成であり、物質生活総括への歩みであり、生活の生産と再生産の主体への強いられた、だが反面では自己生活圏獲得への、多様性をもった歩みである。

とる。生活の再生産が、人間と生活資料の両者の再生産であるということとの普遍性が、客観性の受容を強いるのであるが、人は一箇の生活圏においてそれらを受けとり、保持し、伝承するのである。ここにおいては、個の思想が生活圏を繰り込みうるかへの営為と、生活圏でよく関係や日常に耐えうるか、プラス価値へ転移しうるかは、分立し二重に表われる。

日常生活圏は、ひとつは日常生活の具体性、生きる為に働らかねばならず、定職に就かずとも稼がねばならないという側の客観性と、対幻想へ引き寄せた日常の中の抽象性、生活思想としての側の客観性の両者を提示するのである。

人はこの生活思想と生活日常のはざままで生活過程をたどるのであり、このことへの覚醒が自然成長的観念と、共同幻想に方向転換を迫るのである。誰もが同じライフサイクルを歩むということ、暮らし方にも色々あるという事は、生活思想と生活日常の間での自由の巾の問題である。

人は、自己相対化と客観性の受容を、科学的マルクス主義の追体験や、被抑圧人民や下層プロレタリアの現存への罪意識や、賃労働者としての憤激やからなすのではない。同様に、真空状態下での真理の探求や、法や刑罰への恐怖や、長いものに巻かれるとの断念やによってそれを為すのではない。人は、生活圏における他者との日常の只中で、体験の経験化と、構想力への客観的基礎の取り込みにより、限定場における関係密度と深度で測られる客観性を引き寄せるのである。如何なる諸個人も、反体制知識人も、もちろん革命党派も、この隘路を避けては、自らの観念のうちにも、実践行為のうちにも、客観的普遍性も日常性も呼び込むことは出来ない。唯物論の基礎はまさにこの箇所であり、科学や党や階

他者との出逢いも、日常への自省も欠如も含めて強いられた生存の歩みである。通常に人が歩む、産まれ、保育され、働らき婚姻し、子を産み、育て、年老いて死ぬというライフサイクルは、胆々と生きようが、精神的、身体的障害が壁となるうが、婚姻を拒否しようが、子を産み育てることなく通過しようが、不労所得に乗っかって遊んで暮そうが、誰もが胆々たる生の欠如として受容し生きていることが重要なのだ。それは、自己の生から死への総過程が境界と歴史のはざままで首なまれるという点での負荷であり、構想力が経験を突破しうる自覚的根拠でもある。即ち、人は自ら性関係の主体とならずとも、一对の男女から産まれたという母班を負って対幻想を引き寄せ生きているのである。また、人は自ら額に汗して働く条件を奪われたり、不労所得に安住しようとも、自らの意志と関わりなく、他者や親の労働成果を享受し、経済機構に組み込まれてるのである。

精神に対する他者との日常からの限定は、個に対する客観性承認への要求である。人は、自己精神の敗北を認めず、他者や日常を精神へのマイナスと件として遇し、観念増殖で生きることが自由である。だが、その自由は生活基盤と関係の安定に保障され上げ底化され、かつ自己精神を共同性（イデオロギ体系であれ、自己精神の普遍化であれ）と密通させた皮相な自己観念内部の自由である。つまり、誰もが持っており、通過していることを肥大化させているにすぎない。ここにおける最大の関心事であり、価値規準は、自己意識の行末と、自己意識を頂点とした秩序維持である。

④だが、人は客観性の受容を、生活圏における関係と、日常から受け級の神話の中にはないのである。

生活がその経済的基礎から解放される回路は、生活思想が関係に応えうるか、生活圏がどの水準の客観性を引き寄せうるかとして二重に準備される。かかる革命の経験的基礎は民衆日常を擬共同性から生活圏に引き寄せた集団性へ呼び戻すことで培かれ、革命への構想力の対極で、革命への幻想的諸準備を担うのである。

権力の奪取、経済、労働制度の改組は、かかる構想力と経験蓄積に導かれてのみ、民衆を真の歴史の主人公たらしめる過渡として受容されるのである。歴史を後戻りさせてはならないこと、革命運動や民衆運動の経験に学ぶということは、イデオロギや良心の問題ではなく、起死回生の方途から革命のかくめいと、関係のかくめいへ民衆を誘うのである。

二、情況の指標としての生活圏

①七一年八月のニクソンのドル。金兌換停止声明以降の構造的インフレに、七三年秋からの石油危機が上乘せされ、インフレーションの嵐は全世界を襲っている。日本も御多聞にもれず、否、資料・原材料海外依存の加工貿易国故にもろにこの大波をかぶっている。三月末の石油製品再値上げに続いて、電気料金、ガス代、国私鉄、米価等が予測され、御値安定、消費者物価漸増という日本産業編成の二重性に見合った戦後の物価構造は、御値上昇↓消費者物価再高騰という悪循環へ転換し、実質賃金、備蓄は目減りし、生保、年金、恩給は何ら頼みの綱とならず、国民生活はお手上げの状態である。七四春斗における官公労、民間大手を中心

とした三〇%賃上げの獲得も、今秋までに消費者物価上昇に吸収され、それが算定されているのであるから、国民較差拡大春斗下の組織労働者に倍す未組織労働者、持続的春斗下の中小企業労働者家庭にとってみれば、この先進諸国最高の強インフレが直接に生活破壊へ連らなっていることは日々の実感である。この強インフレは、戦後世界の体制間対立という仮構政治を支えた、経済、軍事構造の必然的変容に資源、食料危機が上乘せられており、過渡期世界の全領域にわたる回避不能な危機として、状況の指標の最たるものである。

だが、戦後世界の政治、軍事、経済構造の変容の指標たる強インフレは、同時に他方で戦後世界を「両体制」併存化の高度成長へ駆動せしめた社会秩序、ヤンキープラグマチズムを頂点として全世界に浸透した生活価値意識の解体を告知する指標でもある。将に状況の指標としてのインフレは、各人にとっての生活圏を状況の指標へ押し上げているのである。本項では民衆の日常意識の有様を私を含めた生活圏をめぐる諸矛盾の透視として為して行きたい。

②構造的に国家は市民社会の上にそびえつつが、関係的には誰もが生活圏の日常ではぐくむいわば民衆共同性の原基を、歴史的幻想としての法と、私的利害代弁装置としての階級に上げ底され、吸収されているのである。国家の社会との構造は、国家の民衆との関係であるが、国家は民衆の時間を慣習、道徳、宗教やをのみ込み累積した法により、また民衆の空間を不可避な構造的な資本家と賃労働者の対立から、私的階級相互間の利害拮抗とすりかえ二重に収奪せんとするのである。

だが、生活圏は、生活の再生産の場であり、たえざる現存時間と身体行為の集約環をなす。生活圏が産む時間と空間は、その思想の共同幻想

ここで誤まってはならぬのは、国家共同性に包括的民衆ナショナルリズムが度として対応しているという点であり、生活圏の小共同性は沈黙し、独自の歩みをたどるということである。

③現下の国家統括力の衰退は経済的危機への延命の模索と共に、支配層の危機を浮彫りにしている。戦後復興から反体制派を日本型議会一組合構造に組み込み、強搾取下の高度経済成長を謳歌してきた日本の支配層にとって、現下の強インフレは自らの枠組で補修不能な青天のへきれきとしてやってきたし、それへの自己防衛としての民衆への矛盾転嫁である。だが、前者の国民統合力の喪失は、戦後の国家水準に見合って歴史的に準備されてきた危機であり、ここでは丁度国民統合力の喪失に民衆の包括的、社会意識の拡散が見合っているのである。

福田赳夫の安定成長論、所得政策導入構想に、そのレベルで太刀打ちできず、田中角栄は徳目教育や靖国法案や文教政策で参院選を乗り切らんとしている。両者の角逐は来年夏目民党総裁選を射程に七〇年代後期ヴィジヨをめぐる為されているが、丸ごと支配層の政治委員会として把えてみれば、何のことはない、互いに経済危機と国民統合力拡散への打開等を補充し合っているに過ぎないのである。

状況の指標としてのインフレは、生活圏のうちに状況の指標を引き寄せつつある。しかし、情況の困難さは民衆が日々の日常の内産み出す、觀念や関係自体が各々を主人公とする生活の再生産の側へ向かわずに、擬似共同性と私人の側へ引き裂かれつつあることだ。民衆は自らの課題としてこの領域を引き受け、時空間を総括する場として生活圏を活性化することを介してでなければ、自らの解放へ近づくことはない。

④情況の指標としての生活圏が最も鋭くつき出していることは、職場、

への転化と、その関係の上げ底化を自覚的に避けるなら、どの一箇の生活圏からも思想深度と関係密度として国家へ、法と階級による疎外へ反撃しうる民衆の拠点たりうる。もちろん、生活圏が国家への反撃の橋頭保であるというのには関係的に、経験思想としてそうな訳であって、生活圏への固執が国家を打倒しうる訳ではなく国家を無化するに足る価値源泉を引き寄せうるということだ。国家は構造的にはその内部における法、行政制度、社会における労働制度、生産関係を押し出し、個人や一族や職場団結やでは到底たうち出来ない脅威をもった強力として立ち表われるのであり、それへの反撃が全国的政治組織や横断的労働者組合やを介してのみ公的な解体への道を拓くということも同知のことである。だが、政党も、横断的労働連合も、その空間的形式においては国家と社会の土俵での疎外態相互の斗争として進むのであり、国家―社会構造を打倒しうるには、時間の側で土俵自体の止揚の糸口を持っていないければならない。構想力において歴史的幻想累積を突破すること、身体行為としての諸実践を、生活圏を価値源泉とした経験思想の豊富化へ組み込むこと、この両者は政治革命における時間をめぐる攻防の鍵であり、革命党派の最大の思想課題であることについては、本誌七号、八号等で触れてきたことである。

国家は時間的にも空間的にも、生活圏を収奪し尽くすことは出来ない。だが、国家は民衆の社会意識を秩序づけ法内部へくみ込むことによって、衣食住の確保や生活空間の安定を国家が保障しているという仮象によって、絶えざる収奪を試みる。構造的に国家は社会の上にそびえ立っているが、関係的には密通しており、共同幻想と社会秩序とは地続きであり、国家の共同性の強度は民衆の包括的エネルギーのそれに対応している。

地域、家族を問わず貫徹している関係の拡散である。戦後民主主義は、生活態度としてのプラグマチズムを導入しながらも、戦前よりの生産力理論は手離さなかった。つまり戦後民衆は、頭の中で民主主義とその対極としての実存主義を、公けに對する私の等価優位として引き寄せながらも、家族や職場において生産力理論に象徴される経済国家原理に拮抗することは出来なかったのである。高度経済成長下で、春斗パターンが花開きつつも、合理化や労災や公害問題を正面切って扱えなかった根拠も私はそこにあるように思われる。

定期昇給、国民需要力拡大、更なる設備投資という高度経済成長を、総資本と総労働との間取り引きの下で、職場労働者は強いられてきたのであり、総労働の側の団結の建前つまりは階級統一の名のもとに職場団結は、部分化され、下部機関化され、上げ底化されてきたのである。職場における、労働意欲の減退は、消費欲望のニンジン鼻の先において生産性向上を画ってきたブルジョワジーにとって労働条件を生活環境や社会福祉と関連づけねばならぬ、頭痛のタネであるが、労働者にとってみれば敵のカラクリが読めてきたということにも拘らず働らかねば食えない、という労働日常の不満累積の結果である。

一方で資本家を敵としながらも、一方で生産性向上を画するという矛盾は、企業利害を労働条件と不可分のものとする、民間型、同盟型発想によってのみ職場段階で統合された。だが、春斗相場の形成が、先導組合のストライキと中労委、公労委介入で為され、中小企業や、地方や、下請けに至るに従って割り引き賃上げが決定するという構造は、職場段階での労働者の団結を、統一した秩序への圧力へ吸い上げる総労働者の団結の一部分と化したのである。職場の中では、終身雇傭制下の年功序列

があり、厳然とした男女較差があり、会社が作った差別賃金スケールの中で昇給額が上乘せされながら、職員と現業員、学歴差別が大手を振っている時、この職場日常を問わないで、労働者階級の団結を口恥かしくて語れる訳がない。

労働意欲の減退は、職場のありようにも規定されている。肉體労働者の原形をなすとされる製造業従事者より、第三次産業従事者が上回り、経験技術に裏うちされた労働のプライドを機械化が追い抜き、学卒の若輩が収入も地位も長年務めた現業員を上回り、中小下請け労働者は、本社や本工に頭を下げざるを得ず、婦人はお茶汲みと使い走りや職場の花へとおとしめられ、青年部首導運動に壮年層は管理者として抑圧の側へ回るが、家族の生活維持の至上命令の下で沈黙するという構造こそは仲間意識の拡散からする労働意欲の減退を作り出しているのだ。職場団結よりもサークルや政治団結が強いという逆転が、疑われずにまかり通っているという事態は右の証左である。

労働意欲の減退、職場団結の弱体化は、その内部で上げ底が進んでいること、職場を自己の持場として管理するという統括力が培われていないこと以上に、職場をも引きつけている生活圏の拡散である。家族を場とする領域については八で触れるとして、社会秩序の問題に触れておこう。

労働し、搾取されつつも多少の昇給を獲り取り、家族を養い、消費宣伝のルートによって文化的生活を香りだけでも匂い、多少の老後の蓄えをなすという、ライフサイクルの戦後の変容は、インフレと土地高騰と、子供の離反と、家庭での地位低下の前にももの見事に解体されつつある。公、私の戦後民主主義的分離はマイホーム主義を産み落すが、繁

② 情況の指標としての生活圏の現状は、家族問題として典型的に表われている。この間の三面記事をにぎわしている、子殺し、未婚の母、孤老の病死等は、世の良識者の眉をしかめさせ、孝養教育強調や優生保護法改悪やの反動的政治主張を引き出し、その根拠を与えているかに見える。

着目せねばならぬはいつの世にも派生した男女の愛憎と結婚制度の枠組みを飛びこえて、親から子へ貫通する時間軸の側により家族矛盾が現している点である。新民法における家族の理念が、旧民法的家族理念を放棄しつつ、現実の社会制度や、扶養義務や、家内労働への主婦のくびきやとの落差で、民衆自身が途を深しあぐねている点こそ、生活圏を修羅場たらしめているといつてよい。

ブルジョア共や、良識的小市民や、マイホーム主義者やの危惧は、自らにしのびよる危機の予測にもつづいており、民衆日常が形作る家族、親子、職場関係を社会の健全なる発達の観点から、法で規制し、公教育で是正せんとするものであり、ないものをもってほしいと夢想している点で喜劇的ですからある。支配層は、戦後一貫して民衆を土地から、農村から追放し、若年労働力の補充を都市化、消費社会化と核家族化で為してきたのであり、自らのみ安定した居住地と譲渡すべき財産を形成してきたのであって、風紀のみだれや、社会道徳の退廃を喚く資格などはありはしないのだ。市民道徳を説く日共は、最も高度成長経済化の片手間の政治参加の自由をくすぐり、職場や地域や学園の日常性を、統一と団結の名のもと、党に指導されるべき秩序集団へ上げ底化してきたのであり、自らも現状に責を負うべきなのだ。

③ 家族をめぐる矛盾は、新民法の理念と旧民法的現実の間にある。こ

雑な家庭でのせめぎ合いに疲れ、無機的な職場日常へ自らを埋める、意欲なく建前として、労働ではなく賃金獲得を自らの支えへ転化せんとする、アメリカ型と逆の公私分離が進行しつつある。だが、家庭も、安定した居住地を保障され得ない住宅事情も、白け切った労働者の孤独を埋めるものではなく、職場での長いものに巻かれるとしての処世術も自らにとって何がしかの強力を引き寄せうるものでもない。

職場の課題は、労働日常における職場団結の上げ底を拒絶する団結と運動にあり、生活圏の一部として職場を相対化し組み込むから出発せざるを得ぬのである。

三、関係のかくめいと家族制度

① 生活圏の中心領域は、職場、地域、全集団域をも引き寄せて家族の側にある。職場労働を軸とした私的階級社会は競争社会であり、労働評価は当然のことながら雇用者、使用者の側から為される。職場運動は賃労働制度の廃絶を引き寄せるに致るまで、生活防衛、保全が環であり、それに抵触する限度での全国化、政治化を目指すのであってその逆ではない。職場運動が職場組織を基盤にして政治運動に至らぬのは当然のことであり、政治運動は異質な結合軸と組織を持たねばならぬのである。レーニンの悪読みとして、社会党から新左翼各派を毒している外部注入引き上げ論は、木に竹を接合せんとする無謀である。だが、職場組織も異質な結合軸をもつ政治組織も、民衆共同性の水準として自然成長的に集団性の疎外としての小国家（ヘーゲル風にいえば市民社会内の国家）化を免れ得ないし、ここでの自然成長性克服の鏡は、家族に引き寄せられた生活圏日常である。

これは夫婦と親子との落差といつてもよいが、誰も法的に、公的に家族を営んでいるのではない以上、かかる法的規制の背後で民衆の生活圏がどのように変容し、どこへ行こうとしているかをこそ見ねばならない。良識派的旧道徳の強調が若年層から押し寄せてくる関係の拡散を押し止めるる訳はなく、また家族内での夫権の強調や保育の妻への押し付けや、男を法や権威や道徳やの最も身近かな国家Vの体現者として女に受けとめさせることも当然なのである。

家族問題の本質は、新民法や憲法が規定するのと否とに拘らず、男女の対幻想と対関係のあいだにある。親は、一世代前からの夫婦であり、子は可能態としての夫婦であることから問題を出発させねばならない。学生層や青年労働者の日常は、多くの場合個々の観念や、職場共同性を自らの拠点へ化したいという誘惑へと導びくが、彼らもまた生活圏からの観念的疎外、集団的疎外として価値転倒可能な条件を保持しているに過ぎぬことを見ておかねばならない。可能態としての夫婦へ構想力で接近する時学生層は自らの日常を民衆と等価に扱おうるのであり、青年労働者は職場労働者相互矛盾からの諸経験を自らに引き寄せる時、包括的階級擬制から生活圏を分離して透視しうるのである。家族の本質は対幻想にあるが、一對の男女は婚姻を通して社会的評価の資格を受け「制度」に直面する。私は対関係と家族制度とは別物であるが、誰にとってもそうであるように、そのような認識や判断は家族制度自体へ回答している訳ではない。

人は、国民や社会人として日常を生きている訳ではないが、家族を紹介してそれらと直面させられる。家族制度、出産、義務教育等がそれであり、職場で天引される源泉徴収等と異なる、自ら対処すべき課題である。

発端としての家族制度をめぐる異和は、法や社会と民衆日常との断面を典型的にさし示していると考ええる。

④ 一对の男女が等価な主体としての合意において家族制度に直面する時、問題象徴的には二重に表われる。その一つは、国家法の下での婚姻という法制度そのものの問題である。他の一つは、戸籍における筆頭者、統一姓確定の上での男女間の問題である。

第一は、主に国家への反逆の当然の帰結としての法受容如何である。このことは、ブルジョア社会とその上にそびえたつブルジョワ独裁国家を打倒し、廃絶せんとする革命家や、また自己にとっての一切の法的、外圧的強制を認めないとする思想の持主からの、家族制度を含めての法制度自体への疑惑である。

革命家は結婚すべきでないという暴論は近頃はあまり多く聞かれぬが、結婚が革命運動にとってマイナス条件となるという感情をもつ活動家は多い。

だが、少し考えればわかるように、現実には生きている人間は、特定の国家—社会制度の下で暮らしているのであって、これらが概念的な民衆収奪の機構であるという事と、生活圏日常がかかる機構へ抵触していることは全く別物である。学生活動家に多く見られる、かかる極端な主張には心情はわかるとしても、親の仕送りやアルバイトで食っており、下宿代を払っており、経済流通機構の中で生活資料を購入しているという現実を直視する地平から出発せよということである。

後者の側の、あらゆる権威、強圧を認めたくないという主張は、別に学生運動や新左翼やに加わってなくとも、全共闘運動の同時代者以降の若者の一般の意識であろう。私は、公に対して私を優位するという点は、

することは、決して離婚慰謝料や、子の養育や義務をめぐる民法規定の受容を認めることではない。対関係が破綻した時、法に任せず互いの合議で決すればよいことである。

だが、通常は女が嫁に行き男の姓を名乗り、男が例外的に養子に行き女の姓を名乗るという事柄には、以下の検討が不可欠である。

第一の問題は国家が戸籍を総括するという事、戸籍では男女が親から受け継いだどちらかの姓しか記入できぬということである。ここでは、婚姻の場合と異なり、理論的には、男と女が双方の親から分離して、第三の姓を名乗り、そのような法制度を作れという、机上の論しか解決の道がない。

第二の問題は、女が男の姓を名乗る場合が殊んどであり、応々にして男は無自覚に女が自らの勢力圏に入ったと錯覚し、女は無自覚にそれを受容しがちであるということだ。ここには一組の男女間の問題と、かつての累積された多くの男女間の問題が錯合して表われている。一組の男女の内部では、等価な両性の結合という内実から言えば、男の姓に統一しても、女の姓に統一しても可なのである。しかし、ここにおける女の姓への男の一致も、未婚の母が私生児の籍を作ると同様、法規の内部の操作にすぎない。

男女が等価な対主体であると、互いに了解しながら、男の姓へ同化するに知識層の女が異和感をもち、それと較べようがない位多くの異和感を一般の男が女の姓へ同化する際にもつという事は何に起因しているだろうか。両者の比重は明瞭に男の女への社会的差別、無自覚な差別を表わしているように思われる。しかし現存の一对の男女が個々の歴史の中で形成してきた、家族像、男女像におけるずれ違いと、落差につい

公的な意味付与の下に私を殺している自称革命家達よりもプラスと評価する。だが、市民社会を綱の目の様に法がめぐっているという事は、市民社会下の民衆の家や職場における日常がごとく国家に管理され、法に規制されていることではないのである。家族制度は市民社会の基礎単位として扱われ、法的規制は戸籍の強制として強権的ですからある。しかし、ここでも一对の男女がある時空に家族を組むということは、国家的法規制へ収奪された家族共同性と、民衆の日常の家族維持態様の両者に直面しているのだ。人は家族を、まず親や近隣者の日常から垣間みつつ、自らの像を独自に形成する。しかし、人は歴史的に累積された家への家族（共同性）の収奪を制度として強いられるのである。

法制度としての家族は、かかる前提に立つ時一对の家族を組まんとする男女にとってどのように対処してもよいことである。親や社会がどう思おうと同様時代を謳歌してもよいし、はかない抵抗だと胆々と受容してもよいと思われる。だが、根本の問題は、一对の男女が法制度を受容するか否かにあるのではなくて、対幻想がどの位の深度と時間尺度を持っているのかという事である。あいまいな同棲時代の結語としての離別も、法制度への反逆としての未婚の母も、法制度受容下の離婚と等しく、格別の意義がある訳ではない。同棲下の女性の負担や、私生児が社会的に冷遇されているという差別は、民衆相互間の差別なのであるから自らの責任で対処すべき事柄である。法的不平等の是正は、行政的な差別の撤廃の問題であり、国家への限定的な保護の要求であるという判断のもとに当事者がまず要求する課題である。

⑤ 戸籍筆頭者や統一姓をめぐる問題は前者よりは深い内容を含んでいる。即ち、法を婚姻届や戸籍の範囲で男女の共同意志のレヴェルで受容ては、男女の内部で相互点検し、解決する課題である。共に暮すという事柄への対幻想の時間射程を見透しうるのなら、それをこそ一義的に考えるべきであるからだ。

無意識の社会的男女差別なるものは（男の姓への固執や家への同化が、家屋敷は家長のものであり、男と結婚するのではなく家へ嫁ぐのだという旧民法的母班をはらんでいるとはいえ）一对の男女が引き受けうる問題ではない。歴史的に累積されたものは思想として止揚する他なく、現存秩序矛盾のみ可能な仕方で行くという、法と制度との落差は歴然としているのである。

⑥ 家庭における生活圏の葛藤は時系列に従うと、婦人労働と保育をめぐって、更に親の扶養と親族関係をめぐって、ほぼ誰もがたどってゆく。これらの事柄は、男女の対関係が主であり、彼ら相互がそれに抵触する限りでの他領域を扱って行けばよい課題である。社会通念や親や友人への忠告如何に拘らず、互いで最良の方法を、相互に限定を受け取りながら見出す他ないのである。例えば、かせがなければ食えないという事と、男が普通はかせいでいるという事は別である。子供には保育が必要であるという事と、女が普通は保育に従事している事は別のことである。女がかせいで、男が主夫を務めようが家族の内部で好きにやればよいのだ。

政治組織が生活集団ではないという事の日常矛盾については、家族域にも少し触れて本誌八号で述べた。共同労働、共同生活等の諸運動については、家族と職場とは、内部結合も、日常態様も異なる故、私は不可避なそれ以外支持しない。無論、やりたい人はそうしているだろうが、日常革命への最短距離とか、家族制度の破壊とかの過剰な意味付与をすべきではない。そこで全てはアウトである。共同保育についても、社会

性に過剰な意味付与をすべきではない。だが、子より親が大事という不可避な場合の相互扶助として、また伝習館等の開かれた親子関係を日常生活圏から目指さんとする試みは注目し、北朝鮮、中国、ソビエトやアメリカ、スウェーデン等の試みの制度検討や、教育それ自体や、親と子と社会の相互関係への切開として多くの課題をはらんでいると考える。

親の扶養と親族問題等については、私も私たちの集団も今だ年若く真正面から回答しうる段階にない。ただ、人は自己史の中で、親子関係からの分離も、親のその親に対する仕方を見ているのであり、法規範によるのではなく、ここでも一対の男女に引きつけた経験思想が道を拓くといっておく他はない。

Ⅲ、日常斗争と民衆の成熟

一、斗いの必然性と関係的回路

①私たちは、国家―社会構造を詳しく検討する中で多くの運動、組織概念を提起してきた。国家―社会構造各々の二重性把握、個―対―共同性―共同体逆立、生活圏と幻想的国家を貫通する幻想性―集団性視座、個―対―共同幻想の内部構造、相互連関等はそれの一部である。幻想的

評価である。

③私たちは生活圏日常を価値規準として、国家の共同性の累積とそれへの集団性の組み込みを批判する。全幻想域―全集団域は政治革命の主戦場であるということも誰も詰めて考えるとよいのだ。

国家における歴史累積は、重層的な宗教―法の自転と民衆共同性の上げ底化と組み込みとして為される。ここにおいては、国家の国民支配の歴史水準は、国家の対外関係度に対応している。自由国家は内部における擬制的法的平等、国民の等価支配に、関係的な相互対等交通、国家等価理念を引き寄せる。国家の理念に累積された歴史と相互関係は、その理念の最高水準の内に低く、古い支配理念や道徳を包み込んでいる。国家の先端性は純化された共同性をタブーと法体系に組み込み、民衆共同性内部および相互関係において集団水準の階層性は習俗化され伝承される。梯明秀が言うような、階級社会と擬制的法的国家の逆転モデル、黒田寛一好みの虚偽のイデオロギーとしての国家像は、空間的に一時代の国家と社会を輪切りにして扱う限り決して国家―民衆関係には追り得ぬのである。国家にも社会にも累積度があり、歴史水準とは即ち関係度であるという視座こそが浮上せねばならない。市民社会における階級による疎外とは、貨幣と教養による職能集団間の疎外である。ここでは日常時間には家族の側へ吸い寄せられ再生産のメカニズムを作り、抽象的労働時間には空間的階層的差別にくくり込まれてある。職能集団の内部強度は、国家共同性を密輸入し上げ底化するか、集団優位性を階層的に確立するかで転位するが、それらは職場成員の職場集団性への家族の引き寄せにより保持されているのである。

国家―社会構造は、実践的には階級矛盾の累積、階級斗争の歴史の結

領域からの政治集団への考察については、その編成、規律、対生活域、対社会関係等も含めて七号で一応検討済みである。また生活圏の諸問題についても、その規準、構造的位相については八号で触れてきた。私本章で検討したいのは国家―社会構造下の法的―階級的疎外が、関係的に発現する有様であり、その現水準についてである。誰しもが身体と意識を併せ持ち生命を保持していること、国家―社会構造の間には、本当は人は家族や職場や居住地やで、多くの幻想性、集団性に取り囲まれているのである。

②ここで言う関係的世界は、水準的に言えば国家に歴史的に収奪され上げ底化されつつ、他方で現存的日常圏として再生産されている民衆共同性の累積度で画られる。

この民衆共同性の水準は、集団編成度として全ゆる職場、地域、家族小共同性から離脱した諸社会集団を規定しており、もちろん理念と実践で現状国家を打倒せんとする政治集団をも集団性、組織性の側で逆目で規定しているのである。

政治集団、社会集団は自らの内部に幻想的、集団的核と目標をもち集団表現を為している。他方で検討の視座を変えれば、政治集団も、社会集団も単一的に、同一スタートラインから、典型的な運動や組織展開を為している訳ではなく、政治集団相互の、あるいは社会集団相互の、また政治集団と社会集団間の対立や拮抗や支配差別関係を集団的に為しているのである。

ここで問題にしたいのは、権力や支配者との集団的対立、集団相互の緊張、差別などを、階級疎外―集団性疎外の視座からより具体性へ追いつつ分析することである。そしてその内部での必然的契機の変容への

果的産物であるが、他方では人間の理念的、日常的諸文化遺産の累積の国家形態への総括としての成果である。歴史を愉快と見るか不愉快と見るかは別として、人は構造の中では無機的であり、関係の中でのみ有機的に表われる。つまり、ブルジョアジーは彼の個人の恣意で悪徳経営や強搾取を為している訳ではなく、行政官僚は彼の悪魔のような心で人民を国家の下に抑圧し支配している訳ではない。国家―社会構造の現在水準は、人間の誰をも強いられた関係に閉じ込めておるのであり、法的平等―経済的不平等の搾取のカラクリはその構造の一部分である。

④人は歴史と環境を引き込んだ関係的世界の中で生き死にするが、その関係的世界をも法を介して国家に、階級を介して市民社会に包括的に構造づけられる。この回路をこそ撃たねばならない。国家―社会構造への斗いの必然的契機は行政国家の尊大さであり、また階級社会の抑圧的壁であろうが、この必然的契機が、思想や集団を吸引する、つまり時間を獲得するのは、あくまで二色の意識的領域においてであるのだ。国家が政治的国家を社会的国家と二重化させるように、社会が包括的社会概念を国家に対する民衆の側のものとして擬制し、私的、階層的、差別社会と二重化させるように、いわゆる思想と日常思想は誰においても二重化されている。

思想的必然性は、理念の普遍性を価値と捉え、国家を対抗主体と捉える錯誤によって、集団性を引き寄せるのである。生活的必然性は、関係的世界の集団編成、つまり錯綜する階層度に応じて、当初より集団的に扱われる上げ底の基盤に立っている。

思想や理念は個体に宿るものであり、抽象的に語られる共同意志、集団意志は一つの歴史的共同性の水準を示すが、決して共同意志主体があ

る訳ではなく、ある必要もない。他方で生活的現実の中での個は関係づけられた限りの個でありその舞台は生活圏である。

思想の必然性が外形を引き寄せる政治集団は、その共同的な核として扱われる思想水準に評価軸を持つ。生活の必然性が外形を引き寄せる社会集団はその生活利害の必然性が評価軸であり、集団編成は自然的であるが付随的事柄である。

理念の共有は個体を場とした共有であり、利害の共有は生活圏を場とする共有でありながら、その斗争型態、実践形態が集団的になされるのは何故か、何故なされざるを得ぬのか。このことは民族、国民から階級、職場団結に至るまで実体価値として集団が政治的、社会的に評価されている現在、充分検討されてしかるべきである。

⑤ 幻想的現実の側から来る思想の必然性も、また生活的現実の側から来る利害の必然性も、つまり目に見えぬ敵との闘いも、また目前の敵との闘いも共同的、集団的な回路を通してその目的達成を目指すというのは、実は双方共に国家―民衆関係に有様を規定されている故である。

思想は、いうまでもなく個体に宿るものであり、個体に引き寄せられた歴史水準で評価されるものであり、その限りで全ゆる芸術活動等の知的表現と同一性格を持っている。政治思想は、その対象を国家の歴史と構造に措いており、国家を研究するのではなく、打倒し止揚せんがためには、現下の国家を理念的のみならず共同的、集団的にも追い落さねばならない。政治集団は政治思想を核として集団を組んでおり、その核の喪失以外に集団を集団自体として解体する必然はなく、だがその集団性はそれ故に民衆日常と理念を異にし、形態を共にする疎外された集団性である事に徹底して自覚的であればならない。政治集団は政治思想の

社会集団にとつての集団編成は、それが生活圏からの一時的疎外態であること、また常に国家共同性へ上げ底化しようという二つの反省回路をもつ。逆説的には集団の存続を目指す政治集団と異なり、独自の延命根拠を持ち、価値化された社会集団はもうそこで擬似政治集団化しているのである。闘いの必然性が理念の側からくるか、生活利害の側からくるかの政治集団、社会集団の区分とは別に、両者を貫通する集団表現の構造と関係の回路は検討されねばならない。つまり、差別や抑圧や支配は、人間の生活圏から外れた、集団相互関係の中で為されているからであり、その評価軸は民衆の成熟度として鮮明に掲げられねばならぬからである。

二、当事者運動と集団的疎外

① 生活的、日常的利害をめぐる闘いは、闘いの必然性を有する当事者の運動である。当事者の闘いは、日常的、生活圏に対する侵害、抑圧への反撃としての防衛斗争として開始され、通例その停止、克服と共に終了する。人間は誰しも闘うために生きているのではなく、生きる上で斗わざるを得ぬ時闘うのであるという生活圏への視座から私たちは出発する。もちろんこの視座は、人間の生活を巨視的に自然との闘いであるとしたり、包括的に階級斗争の歴史としたり、意識的に生きること自体が環境と歴史の只中での闘いであると把握する視座とは、別箇の生活の恒常性、環節的有様を対象としている。

斗わざるを得ぬ必然性の二相について、一で検討してきた。思想的必

実験場であり、集団編成し集団間抗争の水準をも組み込んで、現在国家を如何に越えうるか、誰が歴史をよく引き寄せうるかを常に問われているのだ（本誌第一論文参照）。

生活的利害が引き寄せる集団は、その理念実現ではなく生活の現実的要請の解決を目指しての過渡的集団である。この過渡性が固定化し、他方で生活利害が幻想的利害へ上げ底化される中で、社会は、経済的、職能的階層とは別の社会的地位に基づく集団群を国家の下部に差し出すのである。

集団行動、組織、理念が人間にとつて本来的な有り様なのではない。国家がそれを間接的に強いるのである。国家は幻想的共同性として延命するには、過去の歴史的幻想累積を固守すると共に、民衆日常が産み出す集団性を画一化し、均等化し、上げ底化して組み込むことが不可欠なのである。

多くの政治集団が自らを階級の代表部とおめでたく錯覚しているように、多くの社会集団は集団力を価値化して政治圧力へ転化せんとしている。集団日常におけるかかる二重の錯覚の上に、政治集団、社会集団を貫いての差別、抑圧、支配構造がミニ国家相互間で成立するのである。

⑥ 政治集団にとつての集団編成は、それが民衆共同性と対極に、同一水準に規定された理念的共同性であるという点と、また民衆共同性も常に生活圏からの疎外態へ転化しようという点と、二つの反省回路を持つ。今、激裂に展開されている中核―革マルに典型的な「内ゲバ」は彼ら自身の集団編成の水準を示しており、その内に彼らなりの国家―民衆関係への像を、彼らの権力編成水準として写し出しているのである。

然性と異なる生活現実的必然性はどのような運動表現を持ち、それは如何なる集団的形態を採るかを、私はここで生活圏視座から見てゆきたい。

② 国家はその核たる共同幻想性について歴史の水準をもち成層度を有している。社会もまた経済的社会構成における累積の段階をもち成層度を有している。経済社会構成段階に、歴史的な国家水準が一对一的に対応している訳ではないし、また国家も社会も累積度を持っているという事は各々の内部に前時代的水準や構成を保持していることであるという点については何度か述べた。現代の自由国家―資本制の生産様式の国家―社会構造を水準的に突破することが持つ、世界史的課題についても述べた所である。

六九年秋期決戦敗北以降、六〇年代新左翼運動が見落していた、あるいは力点を強くは置いていなかった諸領域へ全面的にスポットが当てられた。周知のようにそれらは、女性解放運動であり、入管体制下の在日外国人問題であり、沖縄斗争であり、部落解放斗争であり、森永、水俣等の公害企業追及であり、環境汚染対策や地域住民運動であり、身障者や精神障害者問題であり、山谷や釜ヶ崎下層労働者の闘いであり等々としてあった。これらが総じて差別告発運動として呼ばれ、様々な形で差別撤廃、差別構造解体論議を巻き起したことも旧聞に属するであろう。

私たちは当時、共同体を介した国家―社会編成の狭間から、国家において対外関係として入管法体制が、対内的に沖縄が、社会において対外的なものとして部落差別が、対内的に私的階級矛盾が、象徴的に溢出していると把握しつつ、当事者運動の不可避性と、告発支援運動の代行批判視座を示しておいた。七〇年分派以降の四年間に、実践的に右の課題の多くに直面し為せる範囲で回答してきたが、沖縄斗争敗北を経ての国家

の構造と歴史、↑関係位相の了解は一つの大きな収獲であった。

六九年決戦に登りつめる政治斗争が、国家―社会構造解体への政治集団の突出としてあり、全共斗運動に代表される社会運動が国家―社会関係を問いつつも、前者が国家水準の壁に、後者が民衆の歴史的共同性の引き寄せに敗北したと言いうる。七〇年以降全面開花した差別告発、弱者救済運動パターンは、経済基礎から言えば日本のいびつな二重構造の解体過程の矛盾噴出を、また国家の擬制的な国民総括力の拡散下の矛盾顕現を衝いたのであるが、形態的には国家批判を切り返す刃で左翼戦線批判として為したという特質を持っている。前者は差別構造論として津村喬等に代表される主張として表われたが、主に新左翼レヴェルでは後者の側で自己批判や差別用語相互告発が為されたのである。私たちは、前者は論理的に狭く、後者は観念的に転倒していると指摘してきたが、私たちの政治思想においてそれらがつまらないものと見なすということ、政治的日常においては無縁ではないということの間で、実践の側にゲタを預け我が道を行くという応え方をしたことも事実である。以下迂回的な言い方をしてきた領域にも触れておきたい。

③まず、民族差別について見てみよう。差別構造論は近代国家―市民社会編成はならず、他民族差別と、社会内ゲッターを構造的に形成するのであり、旧来の国民運動、市民運動は、その外側から異邦人からの告発にさらされており、この告発に応えることこそ、コスモポリタニスムとしての新たな翼の地平をこえる七〇年代におけるインターナショナルな課題であると要約しようと考える。津村喬は『われらの内なる差別』などで、民族差別を軸に国家論への新たな視座を提起せんとした訳であるが、もう一つの軸日本文化大革命論と共に成功したとは言い難い。

共同作業で打倒する領分なのである。〇〇民族の立場に立たねば世界革命は出来ないという倒錯については、太田竜のブラックパワー、朝鮮、琉球、台湾、アイヌ等々への放浪自体がよく示していることである。

④最も、新左翼運動の大きな斗争課題となりつつある部落解放運動について触れよう。私たちの組織における学園、職場、サークル等々の活動家の一部分は自分たちの意志と考えで部落解放運動に関わってきたが、私たちは組織総体としては「新左翼」のごとく関わっている狭山差別裁判糾弾をはじめとするこの運動に取り組んでいない。私たちは、自らの為すべきことを為すという原則で実践に携わってきた故に、いま政治的に関わっていないことにつき為さざるを得ぬ時にそうすることは当然であるが、思想的には全ての課題につき応えてゆきたいと考える。ここでは本稿の主題に引き寄せて、部落解放運動に対する私の思想的問題意識を何点か述べるに止める。

―部落解放運動において、長い屈辱の前史を経て「全国に散在する吾が特殊部落民よ団結せよ。」で始まり「人の世に熱あれ、人間に光あれ。」で結ばれる格調高い大正十一年の水平社宣言以降、幾多の屈折を経つつその宣言や綱領を引きつぎ精力的な活動を展開している部落解放同盟と、多くの新たな翼支援党派の主張には大きなズレがあると思える。

部落解放同盟の要求の主眼は、法的、政治的、経済的な全ゆる差別の撤廃を国家や自治体や資本家共に認めさせることであり、同時にジャーナリズムの諸表現や部落外民衆一般の無意識の表現も含めて一切の差別言辞、表現を糾弾し、撤回させる事にあると思える。前者は狭山差別裁判を頂点とする、就職、進学、教育、住宅等を含めた糾弾と、要求斗争として、後者はオールロマンス斗争以降「たいまつ」の山崎朋子問題に至

差別構造の現出を国家問題として扱う時、それは共同幻想としての近代国家における「内には国民として、外には民族として」立ち表わる水準を指している。この国家水準は、外に向いては国家間関係の尺度をなし、内においては総体としての民衆共同性の国家への包括度をなし、二重のナショナルリズムとして表われるのである。国家の国民総括の、あるいは社会の市民的擬制ののっぺりした包括性は、いかにえやしめ石として扱われる被差別者をおおい隠しているのである。だが差別構造は、実体的には関係の構造をめぐるものであり民衆間交通の問題である。

津村君には、差別構造を国家の問題として言う時は国家の歴史的水準が関係度を規定しているのであり、これはまず幻想的に突破する他はないこと、また差別構造を在日朝鮮人と個々の日本人等という風に実体的に把握するならば、それは、集団的疎外として立ち表われる他ない、民衆の相互間関係におけるいびつさであり、その壁を破る他ないことをここで付言しておきたい。さて、多くの党派の民族差別に対する理解は右に見た津村君等のレヴェルかそれ以下である。日帝のアジア侵略史から引いての、沖縄、台湾、朝鮮、中国人民への日本国民、民族の立場からの誠実な自己批判の立場から、真のアジア人民の連帯が勝ち取れるという通常のパターンは、将に「政府と国民を一緒」にしているのである。国家政策に加担した事を謝罪する？ 私たちの親や祖父の世代の悪行を私たちが日本人として謝罪する？ 国家と国民が地続きで扱われ、一つの国民が他の国民に謝罪するというパターンそのものを返上せねばならないのに、誰も自らの意志で国家や時代を選んだ訳ではないのに、である。民衆間交通が、集団間対立、差別、抑圧として表われる双方の民衆成熟度こそが、具体的事例に応じて問われる。その他は互いの国家の領分、

るまで為されている摘発、撤回要求としてである。私はこれらの斗いの(特に後者の)評価はともあれ、その必然的展開は充分納得できる。

新左翼各派の主張を『刑と鎖』に要約させれば「疎抑民族の解放の立場にたちえない共産主義があくまで帝国主義的抑圧者と同じであるように、部落解放の立場にたちえない『共産主義』はあくまで現存する支配体制の擁護者である」「部落解放ときりなき戦闘的革命的民主主義としての、永い日本共産主義運動再建前史を、確信をもって埋葬しなければならぬ。部落解放をはらんだ共産主義として、したがって部落解放闘争と全く同質のもの普遍化としてのみ、日本共産主義運動の再建本史は歩みだすことができる。」ということである。彼らは「部落解放を日本労働階級の解放＝プロレタリア革命の核心」としてとらえ関わりんとしているのである。私は、ここには自らの部落解放運動への熱意にも拘らず、その主体と支援を転倒した、悲しむべき錯誤を見るのみである。

iiさて、身分、職業、地域等によって生活そのもので差別されている部落民にとって、この苦痛からの解放は現実的克服のとして為さるべきである。自ら責任を負う術もない出生や環境やによるいわれの無い歴史的差別に對して、自らの力を蓄えつつ、要求を貫徹する斗いは、全ゆる差別者に対し具体的に為される他はない。生活における差別は社会的に為されているが、被差別者がいわれなく差別されるのに対し、社会的差別者の個々は何らの社会的規制を受けぬ現況故に、差別者への法的規制と、被差別者への制度的保障は当面の大きな要求領域である。ここでは、法的、政治的解放は即ち社会的解放ではないことを十分承知の上で、最大可能要求を国家や自治体に対して為しつつ、一々の具体的差別を被差別

者の団結で打倒し克服してゆく歩みが併行されると考える。

私が問題に上せたいのは右についてではなくて「差別意識」の糾弾、告発、自己批判要求運動領域である。私はここでも国家共同性と民衆共同性の観点から問題を掘り下げてゆきたい。差別意識について日本共産党の「支配階級のイデオロギー」との主張と、部落解放同盟の「社会意識としての差別意識」との主張との対立が矢田教育差別事件を頂点に為されてきたことはよく知られている。私はそれらに対し全く別の視角を持っている。

Ⅲ私の考えでは部落問題における「差別意識」は国家問題ではなく社会問題である。在日朝鮮人等が日本国家によって差別されながら、その日常は民衆相互間による社会的差別として為されるという意でそうである。民衆共同性における差別は、異邦人としての差別であろうと、非一般人民としての差別であろうと、共に民衆の生活圏における日常結合が擬似共同化され、集団化を介して、国家共同性へ上げ底されたものである。そこでは何の生活的、日常的根拠もない日本民族や国民やの名で国家的異分子としての朝鮮人、台湾人、中国人、沖縄人やへの差別がされ、市民の名で社会的異分子としての部落民の差別がされているが、両者共に集団性を介して為されるという点を注目しておかねばならない。

日本共産党の「米日支配階級が勤労人民の階級的自覚のおくれにつけてこんで注入している」イデオロギーとの把握は、「労働者階級の前衛党」として、部落差別を利用してきた天皇制支配と米日独占資本の支配に反対する日本人民の先頭になってきたかたが日本共産党」などは差別意識をもたないとする強弁である。他方井上清の「部落民が、現代の社会経済政治構造そのものによって、現実には差別された生活にしばり

る時、止揚の糸口を民衆成熟へ向けて持つ。革共同派の内ゲバの水準、光文社等の一組と二組の対峙、三里塚に典型的な政治集団と社会集団の拮抗等は、民衆の関係意識、共同性の水準を如実に示しているが、差別意識も関係意識の一つであるからそれらの集団間対立にも影を落していることは言うまでもない。

Ⅴ社会的差別意識は、個人の観念や言語表現とは別の根拠をもっている。個々人の無意識の言語表現が、深層化の社会的差別意識のあらわれだということとはこじつけに近い主張である。人は個の観念においてのみ共同的であり自由であり、そこに扱われている関係の引き寄せが日常への結び目をなすということは全く自明のことである。

個々人の言語表現に、深層的、社会的差別意識のあらわれを見て、差別用語撤回を要求するのは、言語そのもののタブー化を双方の間で保守することであり私は賛成しない。政治的解放とはまず言語の下での解放であるが、それは言語の上のみの解放にすぎず、社会観念の解放には遠く及ばないのである。社会的差別観念の解放は民衆共同性の成熟として為される他はないが、「差別言語」タブー化からの解放はその前提である。もう一つつけ加えておきたいのは、部落問題は生活圏からの集団的疎外を最も強いられて抱え込んでおり、日本民衆の均等な課題として最も深い所から逆転するには、自らの最強所を最弱所として見出す所からしか始まらないという点である。何事にも善人づらして一口加わらねば気の済まぬ管孝行『倒錯の偏理と人義』の沈黙による陰謀、無意識の差別構造、受益者との斗いの主張などは、木を見て森を見ない小知識人の悲劇であり、新左翼の差別言辞への代理告発者の対極で、別の仕方の構造告発者としての啓蒙をなしているに過ぎないのである。両者

つけられているという実態があるかぎり、そして一般の人民もまた同じ社会経済政治構造によって収奪左制され、『下には下がある』ことを見出して自らなぐさめる生活におかれているかぎり「人民の間にも生れ、つつける」という『部落の歴史と解放理論』での把握は差別観念が社会意識として普遍的に存在するという解放同盟の主張を裏付けるものである。

私は、両者が政治意識と社会意識という別の領域でのかみ合わない主張を行なっていること、にも拘らず上部構造と土台についての硬直したマルクス主義の土俵を共有していることを指摘しておかねばならない。ブルジョア・イデオロギーとプロレタリア意識という指標をめぐっての自然成長性と外部注入という対立は既に基盤において解体しているのだ。Ⅳ現下の部落問題の根本は社会問題であり、民衆共同性の疎外の問題である。明治以降の国家や資本家階級が部落を温存し、労働者階級へのしずめ石と為したのは事実であるが、これは民衆における内部交通が産む共同性が、国家に収奪された結果である。民衆共同性も累積するから、社会意識としての差別観念もまたそこに包括されている。ここにおける差別観念は、部落民に対するのみならず、他民族、下層貧民に対しても同様に溢出し、またいわゆる一般人民相互の間における交通においても為されている。差別観念から誰もが自由ではないというのは全く正しい。だがそれは国家と民衆の関係に産み落とされる差別観念も含んだ民衆共同性の水準から誰もが自由でないという意味においてである。

民衆共同性の疎外は、生活圏のレヴェルでの小集団からの集団性の離脱、包括共同性への組み込みとして為されてきたし、今もそうである。差別意識は集団表現における民衆共同性の水準のあらわれであり、集団相互の間で差別者も被差別者もそこから自由でない鏡として取り込まれ

ともに自らの日常と無縁である故に、民衆とも被差別者とも遠く隔っているのである。

④次に身障者、精神障害者等の差別について触れよう。民族差別、部落差別について述べてきたように当事者運動はまず、自らの意志責任を負う必要のない一切の差別に具体的に反撃し、経済的、法的保障をも積極的に要求する。だが問題は民衆相互間で障害者等が通常人にとつての異和として扱われてきたことの切開にあるという二点は必然の事柄である。だが、民族差別や、部落差別が生活日常を引き寄せた市民社会内の強力な集団性として登場してくるのに対して、様々の障害者は家庭の中へ押し込められ、病院に隔離され、個別的脱落者として多く遇せられている。公的な社会保障への横断的な要求も、患者や被害者や家族やの連合によって為されているが、それらは日常共同性を有しない、どちらかと言えば生活部分的結合であり、医者や看護婦や学者の協賛も、制度批判と被害補償の斗いとして為され、ここでは理念的な諸問題はそれに関わる個の思想のレヴェルで併行して扱われる。

⑤日常的な社会生活が、住宅や居住地や食品や医薬品やの生活環境の側からくずれ、国家や企業に丸裸のまま直面させられる。公害問題や、環境汚染への住民運動がそれである。国家や企業にとって必然的な矛盾の発現であっても、民衆は偶然的被害としてそれを受けとらされるという所から反撃は形成されるが、生活圏日常にとってみれば原状回復か、それが不能なれば最大補償要求が解決方法としてあるに過ぎない。支援運動の論理と被害者、患者、家族の要求との落差はこの共通の壁にぶつかっている点を見ねば当然である。例えば森永製品不買運動は、厚生省と森永と被害者の三者妥結で運動根拠としては解体するのであり、それ

以上でも以下でもない。にも拘らず、森永もチッソも昭電もカミネも肥え太り延命するという事態へは、倫理的抑制や政治的宣伝や支援運動と、全く別の視角からの反撃以外回答しえないのである。民衆の深い敗北は、如何ような形式的差別の撤廃、医療施設の整備、積まれた補償金等の何によっても、歴史を償うことは出来ず累積されるのであり、自らの相対化を通じた総体化への引き寄せは今だ遠いといわねばならない。拡散する日常圏を、擬似共同性に預けず、集団性内へ解消せず、誰もが自らの時空を引き寄せることが第一歩である。

三、生活圏の解放像

①天下大いに乱れている。だが民衆の、あるいは誰にとっても日常の側は更に総括軸を失っている。日本国家の展望は政策的にも行き詰っているが、それより更に国民の側で先行している職場、地域、家族を通じての関係の拡散に打つ手もない窮状である。先だって語る理念は、天下国家の行方であれ、会社展望であれ、労組の階級的強化であれ、さまざまな家庭内の対立であれ、右から左へと関係の闇の中へ吸い込まれ冷笑で応えられる。自らの日常が、如何なるバラ色の政権構想下においてもよくはならないだろことを政治理念や集団への不信として繰り返し思い知らされつつ、他方人々は自らの職場において、家族や老後について、住宅確保や近隣コミュニティについてのささやかな希望をも打ち壊されつつ生活を、ただ毎日の繰り返しとして言っている。

理念や集団の前でUターンしつつ、良くも悪しくも、ただ時の流れ

族や性の解放はないのである。個人は自己の観念の中においてのみ何を望み、何を夢想しようが自由である。そこでは日々のめくるめくる充実感も、完璧な男女の一体感も、黒田寛一の好きな「永遠の今を体現する共産主義的団結」も可能であり、自らは十全の資格と能力を持つという自負も、いかなる恣意も自由である。だが、観念と現実の落差以上に、観念と関係の落差は深いのである。つまり観念の時間の尺度は、現実の時間の尺度と同一でないのであるが、個体の観念と、性関係が導く観念とは、構造が異なるのである。自由な性関係、自由な家族などはその「自由」が個体の観念におけるそれとして扱えられている限り言語矛盾である。

関係的世界は、性関係においては相手に規定され、家族関係においては更に親や子に規定され、生活圏においては教師や同僚や近隣者に規定されている、個の観念においては不自由極まりない世界である。ここにおける解放は、生活圏の共有に基づく、個の観念の解体＝解放、共同経験の累積と、日常時間の対的統括にあるのであり、それがどのような形態を引き寄せるかは時代と情況の中での強いられた選択でしかない。

家族は、自然的に等価な一対の男女の性関係に根拠を持つのであり、親と子の関係は派生的な生活共同関係にすぎない。それは大家族制下も核家族の今もキブツや中国や北朝鮮の家族制度も含めて貫通する本質である。自由な性愛の排他性をエンゲルスが語ったのはかかる相互規定関係の内部本質を言ったに過ぎない。

男も女も自由な性関係の仮象に、自らの観念の自由を重ねんと夢想することは出来るが、性関係において自由な個の観念は相手への抑圧や、差別や支配を強制しつつ、せいぜい個の自己満足を引き寄せるに過ぎ

に身を任せつつあるかのこの日常を、生活圏を問わねば何事も始まらないという想いは、民衆生活圏と逆立した理念結合を持つ政治集団員においても日々回答を迫られている共通の壁である。ただ時間のみが過ぎてゆくという事実のみ、責任所在のあいまいな単調な労働や、ただ月給鳥でありまた主婦であるという家族維持や、劣悪な住宅事情やから、人々を当てのない不安と焦燥へ駆っている。だが焦燥が自らに時間蓄積の、経験の回路を有さぬ限り、四十男の蒸発や、三十女の家出や、二十代の同棲や十代青少年の現実逃避やは監獄もまた一つの日常であるという三上治の言をまつまでもなく、又しても旧来とは別の個所で、あるいは自分の持場に舞い戻って逃れようのない日常へ帰帰する他ないのである。人は変わるし、また変わらぬという思想と経験の結び目に生活圏を引き寄せる他に、如何なる道徳も、法による強制も、排他的な集団意識も、科学的マルクス主義も人々の半身を熱狂させ、規制するに過ぎない。思想が関係にどう応えうるか、構想力は経験をどう包括しうるかは、いかなる語り口であれ、沈黙の表現であれ、理念的回答を待たずくれない、現実への日々の個々が直面している現在にして未来をはらむ壁である。

②家族をめぐる面白さとは何か、解放感や、充実感とは何か。これらの問いへは、伝統的一夫一婦制からのドロップアウトとしての不倫から同棲時代まで、オルガスム願望の性放浪から、フリーセックス、家族制度解体を實踐するというコミュニケーション運動まで色取りどりに出されている。だが、どれもこれもつまらぬと思えるのは空間的バラエティのみに目が走って、時間を問うていない点である。性関係が如何に、多様に空間化されようと、性関係の本質は一対の男女の性交にあり、その持続力はそこからつむぎ出される対幻想の内にあるという基本線を外して、家

ない。

経験は累積することを最もよく性関係は教える。一組の性関係の破綻は、互いを特定の他の男女に現実に行らせる先に観念を走らせているのであり、一組の家族で生涯を終えるか、何組もの家族を経るかにも、また多くの女と関係をもつか、多くの男の子を産むかにも価値の大小も、面白さの大小もありはしないのである。

若い内にやりたい方をやっておく程度の小インテリの焦燥に根拠を有する自由な性愛や、自由な親子関係やの模索は、家族の形態への空間的代位に止まる限り、家族制度への啓蒙的批判はなしえても、家族の解放へは一步も近づけぬのである。誰も、観念における夢想が自由であるように、未婚の母や保父志願も、レスビアンやホモも倒錯性愛やフリーセックスも当事者の間では恣意であるが、社会や他の男女に対してコンプレックスを持つ必要もなければ、大層な理由づけを与えたりや優越心を持つ根拠もないのである。だが、生活圏の解放は時間軸の側でまず為されるのであり、諸々の欠如の倒錯の形態をも含めて、関係の深化は、かくめいの原基を透視しうるのである。対幻想が破綻した時、男女は制度としての家族を保っている。家族本質として解体しているのだ。別れようが、別れまいが彼等の勝手であるが、どのみち破綻した関係の経験化からしか歩を進めることが出来ぬということが重要なのだ。自らの意志のみで、あるいは相手のみの意志で関係が切断される時、その水準からのみ再出発せざるを得ぬことに目を向けねばならない。ここにおいて、将に空間は時間を撃ち得ないのである。

③職場についても同様である。職場の解放感、同僚間の親密感、職場を越えた組合的、階級的団結感、これらは日常関係からの透視としての

み為される。どのような金の稼ぎ方も自由であり、自分の思うような仕事へ歩まんとする事も自由であるが、人はある時代と状況に生かされるのみならず、他者からの一方的能力評価で職種や地位を限定され、協業的労働を強制される。労働の自由とは搾取される自由であり、労働力を高く売りつけるにはそれなりの経験と団結と斗争が必要であるということも自明である。

生産手段を資本家階級に私的に所有されている労働者階級は、生産手段をわがものにせねば解放されない。マルクスの労働価値説、経済学抑制、階級斗争、労働者階級解放への学説は多くの「社会主義」国で、各々の流儀で実践されている。だが、精神労働と肉体労働の分裂の止揚の方途はおろか、そのずーと手前の生産手段の共同所有という第一歩において今だに試行錯誤にあると思われる。最も早く「社会産業」革命を達成し資本家階級を追放し、生産手段を国家所有、協同組合所有と為したソ連において、あるいは当初ソ連を導きの糸としつつ、独自の道を歩みつつある中国において、あるいは他の「社会主義」国において、日常労働はどのように変容したか。資本家の強搾取の廃止、労働時間の短縮、労働環境の整備等の数多くの労働制度の根本的改革の他面で、ノルマ制、能力給、労働工程の合理化は共存している。国家から工場まで貫徹する、行政機構を総括するのは、民族や人民や階級や特に党の名における管理組織である。

私たちは、本誌八号や、本号第三論文で、経済社会構成の累積という視座から、「社会主義」国の経済構造が資本主義的生産様式を根本的に越え出るものではなく、戦時経済構造の平時への収収パターンの一つという把握を提起している。ここで問題にするのは生産諸関係であり、特

つつある。都市への人口流入は、密集した劣悪な賃貸住宅に半数以上の家族を押し込め、好運にチャンスを手に入れた団地では画一化した生活が展開される。民法違反である賃貸契約がまかり通り、薄い壁を隔てた隣人関係は、子供の泣き声をも相互抑制する中で、いびつに萎縮してくる。偶然のチャンスや、遺産や、資金援助やを除いて考えれば、居住環境は、生活水準の、収入のパロメーターである。

家族の居住空間から小コミュニティへの回路は、都市計画や、居住環境の整備に先じて、日常生活の等価性を介した相互関係で産まれる。立川斗争で、はからずも示された、同じ場所、型式の団地でありながら分譲住宅所有者と賃貸住宅居住者の、自衛隊進駐への取り組みの差異は、近隣関係度の差でもあるのだ。このレベルを越えるには、居住地は家族の再生産の場であり、特に子供にとっての自己史形成の場であるとの配慮が、近隣者へ開かれねばならない。地域ぐるみ斗争や地区ソビエト論や、三里塚の土地問題等についてはここでは割愛する。それぞれの関連文書を参照してほしい。経験の場としての居住区の自然、共同性の欠落は、未来の大人達を全く変えた相互関係に導びくことは、農村の不可避な縮少と共に確かなものであると思われる。関係への引き寄せとは別の公共的政治の課題は日本では、ここに最も多くの矛盾と課題を集中させていることもはっきりしていると思われる。

⑤さて、以上の②、③、④で垣間見た生活圏の解放像は、私たちに自分らなりの体験の経験化からのイメージであるが、何人かの読者には単なる生活価値感の吐露のみだと思えるかも知れない。私たちは生活圏日常に価値源泉を置き、そこから歩む回路をさぐらんとしたのであり、本稿の意図は、かくめいへの必須な迂回路としての生活圏域への接近な

に職場におけるそれである。職場団結が生活圏の側へ還流しているにも拘らず、包括的、階級の共同性へ絶えず啓蒙的に上げ底され、その収収の上に人民国家がそびえているという構造にこそ、日常圏の解放の労働現場における壁はあると推論するのである。

現代日本において、労使関係は近代的大工場に典型的な資本家と労働者の緊張関係か、家内企業や個人商店に典型的な大家族の関係しか取り得ぬのである。これは、いかなる職場を選ぼうと、あるいは使用される事を嫌い自由業に就き、仲間経営の小企業を起こそうと、新しい村以降のコミュニケーション連動に入ろうと、資本制社会の冷徹な法則は貫徹する以上自明のことである。職場の解放はそれの労働者相互の関係に、互いの生活圏を引き寄せることであり、更にその上で公的社会原型を深度として把握する事にしほられていると言えよう。

④地域や居住区における解放像もまた、生活の恒常性の深度の側に求められねばならない。都市を捨て農村へ行こうとの主張も、全国を放浪してまわりたいという家への定着の拒絶も、OLや学生を中心に根強い海外への憧れも、ファッション化した盆、正月と、連休の民族大移動も「家へ帰れるから、旅は楽しい」という国鉄キャンペーンの手の内にある。生活的限定がない間に何でも見てやろうに徹すればそれでよし、風物や民俗やの背後に、どこにでもある生活圏の骨格を透し見ることである。

現在の日本において人は、性関係の自由、職場選択の自由より更に限定されて居住の自由を有するにすぎない。土地は再生産されないにも拘らず、人口は激増し、土地が商品化されている故、地価は高騰し権利は細分化され、庶民のマイホームへの夢は一生の事業でもまだ遠い幻と化し

のであるから、それで結構と応えてもよい。政治は特にこの地点の先に始まるのである。粗雑な素描が、未だ本稿の主題をばやけたものとして

(一)

共産同盟論機関誌

好評発売中

叛旗

Vol.8

FUB.1974

〈目次〉

三里塚闘争の現段階——木の根叛旗現闘

——我々は八戸村選挙を許さない——

早大闘争と学生運動焦眉の課題——共産同学対部

資料

①早大學生運動の革命的再生に向けて烽火をあげよ——西北地区反帝戦線大座
②「クロシニエタット」特別号——同右

ニチバン移転・諸闘争の総括——斉藤 進治

「国家—民衆共同性」の歴史像——立花 薫

死すべき権力と共同性の行方——神津 陽

再びわれら過渡期の途上にて——三上 治

定価六〇〇円(三代一一〇)

■編集／共産主義者同盟「叛旗」編集委員会

■発行／蒼氓社(振替・東京一六二八五六)

新宿区百人町1の11の31 斎藤ビル

〈かくめい〉への越境

共産主義者同盟政治論文集 / 700円

想像力・創造力が衰退し、空想と願望に転落する時、実践と問題意識は文献引用と先験に一般的な危機の強調に墮落する。冷徹なる歴史的現実を直視し、日本革命運動における負的伝統「啓蒙主義—大衆主義」の閉塞的円環と訣別し、観念—生活諸力を〈かくめい〉へ至らせんとする営為は、即党派—分派闘争への火蓋であった苦汁な闘争のうちに獲得した綱領的視座・階級形成論、三里塚・砂川・沖繩闘争のうちに生起した〈かくめい〉への問題提起、党派—分派闘争の理論的諸問題

共産主義者同盟機関紙

叛旗

月二回発行 一部五〇円
半年八〇〇円 一年一五〇〇円

理論誌

叛旗

5・13 特集号 / 6・3
特集号 / 7号

共産主義者同盟「叛旗」編集委員会

支配の危機と情勢の旋回軸

—反インフレ闘争の前進のために—

共産同盟政治局

はじめに

七一年夏(四六年)以降、ドラマティックな再編劇と流動として、その本質を露呈した戦後世界秩序(現実)はかつて経験しなかった深刻な事態を政治や生活のうえにもたらすにちがいないと確信してきた。私達はこの戦後世界秩序(現実)の動向—現実運動を「情勢の新局面」と呼んできた。より抽象的には「過渡期」の現実的展開と語ってきた。そして事態は疑いもなく、私達の予測どおりに(正確にはそれを超えてというべきかも知れないが)進展している。そして又この事態は上層の危機と下層、中層の生活的破局として前兆的であれ、現象しており、これはますます深まるにちがいない。『安定と永続の指標や舵が崩れ、痴呆的混乱に支配階級—支配層がおちいつていることであり、被支配層—民衆が暮しの在り方を疑わざるを得なくなっていることである。支配階級—支配層と民衆の双方にとって戦後世界としての社会秩序や、その体制の安定と持続に疑いをはさまざるを得なくなっている事態は、戦後史が加

つてもたなかった深刻な危機の端初というにあまりあるものだ。』(注1)この事態をどのような名称で呼ぼうとも、それが私達の想像を超えた深刻な意味を持っていることも又間違いはない。この事態の進行の中で私達が遭遇しているのは一定の予測や判断の正しさにかかわらず、これに介入することも出来ず、はじかれていた無力感であり、いらだちである。これは私達が、自己を含めて七〇年以降の主体的後退戦と呼んできたことでもある。私達は今や死活をかけて、無力感といらだちから、いいかえれば後退戦から跳出せねばならない。この死活をかけた闘いの道が、現実的欲求と課題を暗澹たる絶望のうちに沈めるほかない民衆のころと架橋し、火花をちらすものであることを私達は信じる。だが私達はまず、ほかならない無力感やいらだちの克服、後退戦の旋回に舵を切るにあたって、自己自身の現実を認識するところから始めなければならぬ。即ち、理論的にも、実践的にもあまりに貧困な自己の現実を。実践的、具体的闘争での無力さはほかならぬ理論的無力さである。私達は理論的、具体的に両面に渡って情況に応える努力をはらわねばならない。

第一章 経済的分析の視座

(1) 経済的概念について

情勢論(分析)について私達の立場は「過渡期」論であった。このことは現在も私達の基本的立場である。が「過渡期」という概念は情勢一情況を一語でいづくすにはふさわしいが、具体的分析のためには別のちみつな方法視座が問われるのであるが、ここでは以下の三点に絞ってこれにふれてみたい。第一点は人間の自然過程、幻想過程一非幻想過程の内で経済過程の位置の解明である。この問題に関しては基本的素描にとどめるが、理論誌(8号)を参照してほしい。第二点は「経済過程」と経済国家の位置の解明である。マルクスの経哲草稿一経済学批判序説一資本論の私達なりの学び方である。第三点はいわゆる階級形成論との絡みでの「経済」闘争の内容規定である。経済闘争に於ける二つの道の内容である。

幻想過程一非幻想過程という人間の全現実の中での「経済過程」の位置を私達は次のように抽出することが出来る。「人間は自然によって生活する」という意味は自然が彼の肉体であって、もし死んではならぬいとすれば、彼れがこの肉体との不断の交流過程一疎外過程にとどまらなければならぬ」(マルクス経・哲草稿)ここでいう自然との交流過程一疎外過程、いかえれば自然を彼れの非有機的的肉体(自然の人間化)と彼れを自然の有機的自然とする過程の労働過程を示している。

あるが、その一つは「観念論」的な人間論と「唯物論」的な人間論への批判によって、人間の活動をはっきりとらえなければならぬ。ヘーゲルに象徴される「観念論」は人間が自然の一部であり、その内部にありながら、自然との対立的(相互規定的)な対象活動をなすという人間的特質をもつば「観念の内部(思想の内部)での対立(即自的自己と対象化された自己との対立、意識と自己意識の対立、客観と主観の対立)としてとり出されている。それ故に、ヘーゲルにあっては人間の実存が「観念・思想」に過剰に引き寄せられてとらえられる。と同時に「観念・思想」の内部での人間と自然との対立(相互規定)と本来の意味での対立が混同される。このことは人間の感性的活動そのものを偏在的に解するほかないだけでなく、自然的活動に対しては疎外するか、観照的にする。そして時間的一空間的活動そのもの、その構造を歪曲化する。他方フォイエールバッハに最良の内容を見出す「唯物論」は人間と自然との対立的な、対立的(相互規定的)活動を自然へ解消する(共通規定存在)ことで、ヘーゲル的な思惟や思想と区別された客観的な感性的存在を指定するが、人間の実践、感性的活動を観照的なものにしてしまう。われわれは自然の一部にあり、自然の内部にありながら、それとの相互規定的な対象的關係にたつ、人間の活動を「人間の自然」活動と解する。非有機的自然を人間の非有機的身体一器官へ転化し、又有機的自然の編成・再生産等々で、いわゆる自然を「人間化」する作用と人間そのものが有機的自然として自然構成をなしていくという相互規定的な關係をである。人間の对象的、感性的活動を「人間の自然」と解することで、旧来の「唯物論」や「観念論」を超えなければならない。

「人間の自然」という概念で旧来の「唯物論」、「観念論」を超ると

マルクスがフォイエールバッハに関するテーゼで語っている感性的人間の活動・実践、もしくは人間の活動そのものを対象的活動としてとらえるということ、私達は人間の実存の様式としての時間、空間の弁証法的運動ととらえる。対象・現実・感性が对象的にとらえられるということは「対象」が客観的に、(それ故に自己の反映として)解されるヘーゲルの、フォイエールバッハ的な生命論と異なる。对象的にというのは客観的にとか、認識的にとかでなく、次のようなものである。「人間が肉体的で、自然力のある、生きた、現実的で感性的で対象的な存在である」ということは、人間が現実的な感性的諸対象を、自分の本質の対象として、自分の生命発現の対象としてもっているということ、あるいは、人間がただ現実的な感性的な諸対象によってのみ自分の生命を発現できるということの意味するのである。对象的、自然的、感性的であるということと、自己の外部に対象、自然、感性をもつということ、あるいは第三者に対してみずから対象、自然、感性であるということは同一のことである。」。自分の本質の、生命発現の対象を感性的諸対象として持つということ、その活動そのものを時間/空間的活動というのである。時間的活動とは了解作用(判断の結合、概念への転化)であり、空間的活動とは關係づけである。例えば人間の身体は言語、労働、性という表現行為で、その再生産活動を繰り返しているが、それは自然としての身体「生から死」への曲線的な再生産であるとともに「時間・空間」的活動の再生産である。われわれはマルクスのいう感性的活動・実践的活動というものをかかると時間的一空間的活動と解さなければならない。

このように、人間の感性的活動・実践を時間的、空間的活動、その弁証法的運動というとき、いくつかの諸問題を解かなければならないので、いつでもそれが簡単なものでないのは明らかである。何故なら、「人間の自然」という概念は自然との相互規定性(対立的な対象的活動)との側面からみれば、「観念論」と重るところがあるし、自然の一部というときは「唯物論」と重るからである。だから「人間の自然」という概念をよりはっきりつかむために、二つの問題を鮮明にしておかなければならない。その一つは自然の一部でありながら、自然との相互規定關係を形成するその連続主体として「類」という概念を想定すること。他の一つはその感性的、対象的活動の内容を鮮明にすることである。前者は「個的存在」の生誕から死への生涯の曲線に対し、連続する人間の「存在構造」を絡めて、われわれの総体を明らかにすることである。後者は自然、物的、観念と呼ばれてきたものであるが、これらは広範な意味での、幻想的なものと、非幻想的なものとして構成される。この双方の人間の活動は時間、空間としてはかられ、累積度や構造性として抽出される。これらは人間の諸關係としての共同、対、自己、又言語・労働・性という表現構造からもとらえられる。ここでいう労働過程はこのような全体的イメージのなかでとらえられる。

「類」と「個」という概念の中で、労働過程一経済過程を把握してみよう。

人間の存在が「類」や「歴史」と不可避的に連続、接続することを強いられるという意味では人間の非有機的身体一器官へ転化した労働生産物(累積されたもの)の独自運動(自己運動)に個の労働は規定されるだろう。逆に「類」や「歴史性」は個の労働の累積物であるというとき、人間が自然の有機的自然へ転化したものだというとき、それは個々の労働過程の現存性に規定されるだろう。

『すなわち特定の仕方で生産的に働いている特定の諸個人はある特定の社会的および政治的關係を結ぶ。経験的考察はそれぞれの個々の場合に社会的、政治的編成と生産との関連を経験的に、そしてどんなごまかしもなく思弁もなしに示すはずである。社会的編成と国家はたえず特定の諸個人からの生活過程から出てくる。ただし諸個人といってもそれは自他の表象のなかにあらわれうるような諸個人のことではなく、現実存在しているような諸個人、すなわち、はたらし、物質的に生産しているような諸個人、したがって特定の物質的な、そして彼らの意志からは独立な諸制限、諸前提および諸条件のもとで活動しているような諸個人のことである』(マルクス、ドイツ・イデオロギー)。

ここでいうある特定の社会的關係、また特定の物質的な、そして彼らの意志からは独立な諸制限、諸前提、諸条件を自己運動としてその歴史性と構造において、経済過程と労働過程を考察すること『あらゆる人間歴史の第一の前提はいまでもなく生きた諸個人の現存である』というところに力点を置いてそうすることは明らかでない位相、また回路のーちがいがあろう。『たとえ、一社会がその運動法則を探りだしたとしてもーそして近代社会の経済的運動法則を明らかにすることはこの著作の最終目的であるー、その社会は自然的発展の諸段階を跳び越えることも法令で取り除くことも出来ない。しかし、その社会は、分岐の苦痛を短くし、緩和することは出来るのである。起きるかも知れない誤解を避けるために一言しておこう。資本家や土地所有者の姿を私は決してバラ色にえがいていない。しかし、ここで人が問題とされるのはただ人が経済的諸範ちゅうの人格化であり一定の階級關係や利害の担い手である限りでのことである。経済社会構成の発展を一つの自然的過程と考える私の立場

治的国家に対するものとして、社会的共同体、市民的社會という概念をもちいている。そしてこれは幻想過程に対する非幻想過程という概念でも用いられている。また公的世界に対する私的世界というようにも展開されている。思想的には政治的(国家的なもの)、幻想的なもの(精神性)、公的世界を人間の本質(価値)とするヘーゲルの思想の転倒を志向している。社会的、非幻想的、私的世界、ということのほうがより本源なのだというように。そしてこの幻想的なもの、公的世界、国家の考察として宗教法へ収斂する共同幻想の構造分析をせんとしたのに対して、社会非幻想的なもの分析一考察を経済過程一労働過程の解剖によってなさんとした。この手段が経済学であった。そして、この段階で展開されている社会的共同体や市民的社會はその構造的抽出として経済過程一労働過程の解剖の想定がなされーそこからブルジョア階級とプロレタリア階級が導かれていくが、他面で万人に対する万人の個人的利益の相關の場、都市と農村の階級対立というものが想定されている。経済学批判以降のマルクスでは社会的共同体、市民的社會の解剖、構造的抽出は歴史概念の導入とともに、経済過程そのものを自然史的過程とみる立場への力点の移動がある。そこから後世の「マルクス主義」は経済過程一労働過程を即社会的共同性、市民的社會と解し、階級概念(資本家階級、労働者階級)をそのまま社会的共同性の階級概念に拡大、適用してきた。ここでは次の二つの問題がある。その一つは私的階級社會という言葉が意味する階級概念と経済的諸範ちゅうの人格化、一定の階級關係という場合の階級概念の関連である。前者は現存的・生活過程に於ける経済過程を引き寄せた場合の階級概念であり、後者は歴史的過程としての経済過程でのそれである。階級概念が二重性をもっており、相

はほかのどの立場にましても、個人を諸關係に責任あるものとするのは出来ない。というのは彼が、主観的にはどんなに諸關係を超越していても、社会的には個人はやはり諸關係の所産なのだからである』(マルクス・資本論)。人間の存在構造が「類」と「個」の接点、歴史性と現存性の交点にあるものであり、表現行為がこれらに架橋するものであることは労働、言語、性のどれにも共通に存在する。

諸個人の現存過程、生活過程に歴史過程を引き寄せたところでの労働過程・経済過程の分析はマルクスでは経哲草稿でなされ、逆に経済学批判以降では歴史過程に引き寄せたところで展開されている。資本論とりわけ、第一編の労働過程の分析ではその架橋の構造の分析がなされている。けれどもこの構造を把握することは難しい。この稿は、労働過程、経済過程の歴史的過程の分析に軸があるのだが、現存的、生活的過程のその把握は生活圏論、社会論として可能となる。この問題を実践的に語れば次のようになるはずである。

人間の存在構造が、二重の構造(歴史性、現存性、「類」と「個」)とその架橋の構造を不可避とする。このことは歴史的、類的なものが現存的、生活的過程から出てくるものを不可欠な構成とするように、現存的、生活的なものが歴史的、類的過程として累積されてきたものを不可欠とするということだが、それは一定程度相対的独自の過程を持つということである。それ故に、人間の解放はこの二重過程を不可欠とする、この架橋は引き寄せの構造としてあるということである。

この前提で「経済過程」なるものの位置について、一、二の事柄を加えておこう。その第一は社会的共同体、もしくは市民的社會という概念との関連である。よく知られているようにマルクスは政治的共同体、政

互連環を持つているのだが独自の位相をもっている。

例えは経済的諸範ちゅうの人格化、一定の階級關係として人間の人格的・階級的位置を抽出することと現存的・生活過程の場面性・具体性でそうすることの間には位相差があり、相互転換のためには關係の構造を介する必要があるのだ。他の問題はある抽象度のものとして成立している構造的抽出が即現実的なものとして解され、適用されることで社会的共同体、市民的社會の(非幻想域のといってもよい)、非経済過程、非労働的過程の疎外、歪少化を生むということである。

かつて私達が「経済闘争」という概念に社会的闘争や生活闘争という概念を用いたとすれば経済過程の了解の誤謬への批判をさしていたであろう。『われわれが経済一社会過程を把握しようとするときの基本的視座は、市民的視座は、市民的社會の再編成過程であり、この中軸が生産關係によるいわゆる経済過程である。経済過程そのものからは相対的独自であり広範な意味で社会過程に属する家族・地域を含めての把握をめざさねばならない。家族域、地域として独自の社会關係を構成するものはいわゆる生産的諸關係に包摂されるものとしてもよいのだが、自然過程一労働過程という考え方が支配的に流通するところでは、経済過程と他の社会過程と区分と連環して押えなければならぬ。』(情勢の新局面とわれわれの道)は前述のように把握しなおす必要がある。

もうひとつの事柄は有名なマルクスの経済学批判序言での定式の問題である。

『人々は、その生活の社会的生産において、特定の、必然的な、彼らの意志に依存せざる諸關係を結び、この生産關係は、彼らの物質的生産力の特定の発展段階に应当するものである。これらの生産關係の総体は、

社会の経済的構造を形づくり、これが実在の基礎であって、その基礎の上に法律のおよび政治的上部構造がたち、その基礎に相応して特定の社会的意識諸形態がある』(『経済学批判』)。

これは経済決定論、土台―上部構造論、発展段階論の証拠へ利用されてきたところである。私達は三つの点に留意する必要がある。その第一は相応や実在という概念を巨視的な歴史的な構造的抽出というように解すべきであること。第二に政治的上部構造や社会的意識諸形態との相応的關係を即目的対応関係(その枠内での規定力と反作用ということも含めて)ととらないこと。政治的上部構造としての共同幻想がそれ自身の独自の累積と生活過程から疎外され共同の幻想の交点に成立するということが、またその相応というとき、ちがった時間的尺度をとらねばならぬことは繰り返してきた主張である。第三に上部構造という概念を持ちいるとき、その中には経済的―社会的国家を包摂すべきであろう。

(2) 経済分析の対象

市民的社会―社会的共同体の解剖としての経済過程の構造分析、また情勢分析というときの問題は何か。私達の方法と帰結は経済過程の弁証法的運動構造を内在的に抽出することであり、階級関係の現段階を押しやることである。さらに「その社会は自然的な発展の諸段階を跳び越えることも法令で取り除くこともできない。しかしその社会は、分娩の苦痛を短くし緩和することが出来る」ということを階級闘争の現実として展開することである。このとき、弁証法的運動構造を内在的に抽出するにあたって、私達の絞るべき焦点―軸はどこであり、何んであるか。資

とも先端的な)社会経済構成―生産様式と社会編成―を抽出することが、最も世界的なそれであったと同様にまたそれがそのまま各社会的共同体の社会経済構成(編成方法も含めて)へあてはめられないのである。

労働の累積が価値法則としての資本の形態と自己運動へ現象し、生産様式―社会経済構成を形創っていく普遍性―世界性はどこまでも貫徹していくし、いかなる社会的共同体、市民的社会もここから自由であり得ない。また各々の社会的共同体、市民的社会の生産様式―社会経済構成はその重層―成層構造において種々の組合せ、特質をもつのである。いわゆる資本主義の世界史的貫徹と「類型性」「段階性」という概念はこのように位置づけられなければならない。私達は現在どのように国境で画しようとも、労働の累積とその帰結物である資本の蓄積の世界史的水準その自己運動の―価値法則―の規定力から免れることはないといえる。

いいかえればここに規定される階級関係から免れることはない。この階級関係がイデオロギー的擬制で解決されないことは自明である。事態は逆なのである。また生産様式―社会経済構成の編成が発展段階論的方法(単線的)をたどらないことも、たどる必要のないことも自明である。

②資本制の生産の総過程をその資本の形態と自己運動へおしあげ把握するとき(資本の再生産を資本蓄積と労働力創出の編成として)、マルクスの経済学批判序説でのプランとの関連が問われる。

マルクスは経済学批判序説で次のように書いている。『(1)ブルジョア社会の内部編成をなしている基本的な諸階級がそれに立脚している諸範ちゅう―資本、賃労働、土地所有。これらのものの相互関係都市と農村。三つの大きな社会的階級。これらの階級面の交換。流通、信用制度(私的)。(2)国家形態でのブルジョア社会の総括。それ自身の中で考察され

本主義的生産の総過程が現象する諸形態であるが、ここでのポイントはそのより抽象化された水準での把握である。もちろん、ここでいう抽象化されたという意味が非現実的なことではなく、個々の、現存的個体へ引き寄せた現実性ではなくて普遍化された「類」位相での現実性であるということは論をまたない。もともと「個」と「類」の接点、交点のなかで人間の現実性があるのならば、労働行為はその双方を架橋するものとしてあるが労働過程とその諸結果は、どちらかへの引き寄せでは別々の展開として現象する。独自の運動構造を持つのであり、このことは分娩の苦痛を短くする現実過程の回路も二つの方法をもつということなのだ。現実への入りかたが、二つの道をもつということである。

資本主義的生産の総過程の現象を把握するポイントは何か。

①資本の運動(生産、再生産、総過程)抽出は資本論にてなされている。この資本の運動を歴史的傾向、形態のうちにとらえるとき、まず問題となるのはいわゆる社会経済行動の世界性と歴史的な生産様式である。マルクスは労働者と生産手段の結びつきの様式の歴史的特徴によって歴史的な社会編成を総括する。これをいわゆる「アジアの古代的、封建的、および近代ブルジョアの生産様式が、経済社会構成の進歩の諸段階として特徴づけうる」(『経済学批判』)というとき社会経済行動の自然的展開としての世界性とともにとらえよう。だが社会経済行動の世界性と諸段階が地理的、空間的区分でなく、時間的なものであることは自明である。ここでいう諸段階を地理的、空間的にあてはめることが出来ないように、社会的共同体の区分的な発展段階とみることが出来ないのである。世界がそうであるように、現実的な社会的共同体の社会経済構成は重層的、ないし、成層的にある。だからこそ、マルクスがイギリスの(もっ

たそれ。「不生産的階級」。租税。国債。公信用。人口。植民地。国外移住。(3)生産の国際的諸関係。国際的分業。国際的交換。輸出入。為替相場。(4)世界市場と恐慌』。

もともと『商品交換は共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる。』(『資本論』)というように資本の世界的性格と社会経済構成の共同体的性格の連環を前述(①)との絡みでおさえることである。だから、私達にとって、情勢分析の方法は資本の現実運動を(資本形態、蓄積法則、再生産構造)世界史的水準、その現象として序説プラン(3)、(4)を果すことが一つとなる。また生産様式―社会経済構成の社会共同体的性格―国民的経済―に制約された特質その現水準を把握することにある。

③私達の方法的立場は社会経済運動の法則を自然史的過程と解するといふマルクスの方法を継承すると語った。このとき難問は資本の運動法則をそれ自身の世界的性格の側面に軸をあててそうすること(価値法則の世界史的貫徹―究極的には社会的有用労働の人類史的等価とその表現形態、運動展開)、国民経済的な生産様式―社会経済構成(社会的編成)―(社会的有用労働の各国民的平均値の差とその制約する表現形態、運動展開)へ引き寄せてそうすることの連環である。資本の運動がもともと国家的枠をでえているという性格と、国家に相応する(類比する)社会的共同体の枠に制約されていることに依っており、相互関係にあることは明らかであるとしても。そして国民経済的な経済展開を―経験を―人類史的、世界的なものとして押し出せない条件をもつところでは。

④ここでの問題は経済過程に介入する国家的なもの(経済的国家―社会的国家)―経済過程内部のそれといってもよい―性格、その意味を浮

び上がらせることも関わるはずである。社会経済行動の自然史的展開は傾向性として、国家を超えた世界的、人類史的性格を「価値法則」の徹底化として「増大させる」。「経済国家的」要素を縮小、排除していく度合は増大する。例えば、私的階級社会の拡大と、ワールド・エンタプライズの成立、自然発生的な世界通貨の要求等々の諸現象はこれを示すであろう。だが逆に、「経済国家的」要素は増大する。この、必然的根拠は二つほど考えられる。そのひとつは世界経済の成層的・重層的構造に依っている。世界的レベルでみれば国民経済の編成要素が拡大し、またその内部で「経済国家的」要素が強化されるのはまさに弁証法的必然であるのだ。よく知られているように、遅れて国民経済の編成に登場した部分こそより過激に国家的要素を投入せざるを得ないということと共に了解されるだろう。他の一つは「価値法則」が徹底化される必然的傾向とともに、その矛盾・崩壊の中でその止揚の方法を持たないが故に「疑似的価値法則」が「擬制的止揚」が持ちいられるということである。「疑似的価値法則」自身は独自の矛盾を生み、資本制の危機を累積していくことはいうまでもないが、これはいくつかの例をあげられるだろう。金本位制の解体と危機の中での管理通貨制の採用、クリッピング・インフレーション（有効需用政策）、ニューディール、ファシズム、スターリンニズム、混合経済策、ETC、いずれにせよこれらはそうであるのである。いくつかのあたりであらわれたこれらをつらぬく基本的性格を次の点に総括できる。

④これらはどのようにイデオロギー的に仮装されようと「価値法則」を止揚したものでなく、「疑似的価値法則」が「擬制的止揚」以上のもではないこと。だからいかなる意味でも次のようなものとして語り

得ない。

『共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現するのであるが、ただし、個人的にはなく社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物は、ただ彼ひとり個人的生産物だったし、したがって直接に彼のための使用対象だった。この結合体の総生産物は、一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は再び生産手段として役だつ。それは彼らのあいだに分配されなければならない。この分配の仕方は社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに対応する生産者たちの歴史的發展度とにつれて、変化するであろう。ただ商品生産と対比してみるために、ここでは各生産者の手にはいる生活手段の分けまは各自の労働時間によって規定されているものと前提しよう。そうすれば、労働時間は二重の役割を演ずることになるであろう。労働時間の社会的に計画的な配分は、いろいろな欲望にたいするいろいろな労働機能の正しい割合を規定する。他面では、労働時間は、同時に、共同労働への生産者の個人的参加の尺度として役だち、したがってまた共同生産物中の個人的に消費される部分における生産者の個人的な分けまの尺度として役だつ。人々が彼らの労働や労働生産物にたいしてもつ社会的関係は、ここでは生産においても分配においてもやはり透明で単純である。』（マルクス・資本論）

⑤これらはある意味では人類史の生み出した英智であり、巨視的にみれば分娩の苦痛を短くし、緩和するものであったといえ、逆に資本制的生産と社会の延命策であった。

④これらは広範な意味でマルクスの国家的形態でのブルジョア社会の

総括というときの国家的形態の諸力の発現、展開といつてよい。それ故、これらは国家的なもの（政治的のもの）であった。これらの表われる差異は（スターリン主義、ニューディール、ファシズム等）社会経済構成・生産様式の成層度の差によっている。労働時間（資本）の累積度の差によっていた。社会的共同体の解剖として経済過程の構造分析（世界的な経済過程の分析でもあるが）にあたって私達のとる（ここでの）対象は主に「情勢の新局面」と呼んできたここ二、三年の局面である。

その詳論は2、3章でするとして、一応予備的に分析の内容の骨格をあげておこう。

⑤分析内容の骨格は以下の諸点である。

①三〇年代以降、永続的な危機にみまわれながらも「価値法則」は貫徹されており、それは擬制的なイデオロギーや国境を超えてあるということ。

②ここでの主要な分析対象であるが、「疑似的価値法則」が「擬制的止揚」と呼んできたものの諸形態、その累積、運動構造の分析である。もちろん、これらは「価値法則」の危機と止揚展望なき故に弁証法的運動として形成されたのだから、同時に「価値法則」分析も同時になされる。「価値法則」自身の貫徹が内在的に形成する矛盾とその過渡的解決としての導入された「疑似価値法則」自身が逆に形成する矛盾の相乗化の分析として。

A、金本位制の崩壊と管理通貨制の歴史的分析。二重通貨としてのドルの歴史の総括。

B、過剰生産、過剰資本の形成局面。拡大再生産の諸問題。技術開発

と利潤率の諸問題。技術開発と資源問題。

C、過剰資本と再生産、吸収策の諸過程と諸形態。恐慌・戦争・インフレ（有効需用政策）。資本輸出の諸形態。植民地の戦後の変容と世界企業。

D、「価値法則」の危機と資本蓄積、金融寡頭性の変容的発現。

E、産業、資本の有機的高度化と労働力の構造的創出の現段階。

F、スターリンニズム、ファシズム、ニューディール、混合経済論の総括と展望。

G、戦後アメリカ経済と日本経済の諸問題。

(3) 「経済」闘争と「階級形成」

「インフレ」闘争の二つの道

「情勢の新局面」が「インフレ」激化として支配階級・支配層（上層）の前兆的危機と民衆の前兆的な生活破局を現象させているの中で、私達が深刻に考えなければならぬのは何事もなしえない自己を含めての現状である。その理由は二つある。その一つは情勢の動向を認識し得ないということ、いかにすれば理論的無力さである。「革命理論なくして革命運動なし」というレーニンの言ではないが、理論的無力さは実践的無力の別名である。もうひとつの理由は「階級闘争論」の内容である。ここでは後者に焦点をあて、インフレ闘争の二つの道について説明しておこう。その一つである対「経済的国家」社会的国家「闘争」は政治闘争である。これは政治闘争の多重性として包括してよいのだが、「法的疎外」の闘いへ収斂する共同幻想をめぐる政治闘争とは位相を異にす

る。△経済的国家闘争—社会的国家闘争△は市民社会的階級、経済的階級
疎外をより直接的に対象にするがゆえに、いわゆる△社会闘争—生活闘
争△に近いといえる。これらの区分をするのはスコラ的な範ちゅうご
こであろうか。経済的、社会的階級疎外と法的階級疎外が混同されが
ちなところではこのことは重要である。△対経済国家△闘争は歴史的、類
的過程に引き寄せられたところでの闘争である。それ故対象は国家的、
公的位相での経済過程である。また、民衆や大衆を個人々々として公的に
組織するものであり、地域的、私的団体が代行したり、とってかわった
り(組合政治)することは出来ない。何故なら、地域的、私的団体は現存
的生活過程、日常的生活圏にあり、どんなに公的意味を付与しても、そ
れを政治化しても原理的に政治を組織することにならないからである。
企業的、職域的、地域的団体は市民的社会の私的性に原理をもつもので
あり、それが公的意味を持つことは絶対矛盾にはかならないからである。
たしかにブルジョアジーや支配階級はこの絶対矛盾を肯定的に演じてい
る。それは△市民的社会内部△の私的な特権や支配を公的のものとして
に根拠づける上で政治的国家と市民的社会の二重性を肯定性とするから
である。彼らは市民的社会の国家なのである。官僚が国家を市民的社会
(私しごととして)とするように、ふるまううえで△市民的社会の原理△
を肯定するように。両者は結びあうのだ。現存的、生活過程で階級関係を
普遍化するため公的なるものを引き寄せて強化し、公的過程ではそこ
での階級関係の強化のため、現存的、生活過程での階級関係をくりこん
でいくのである。私的な団体に公的な意味を与えようとする連中には注
意したほうがよいのである。逆に公的世界を私的に、いかえれば政治
を私生活の根拠とする官僚に注意したほうがよいように、政治闘争を私

社会闘争の論理のうちに「類」的な、共同的なものと考えるならばそ
こでの「類」的、共同的とは個体の存在と逆立し、生活の恒常性から離
脱していく、宗教的、国家的、団体的イメージの対極に、人間が千差万
別に、私的に、個々的にあること自身のうちにみなければならぬ。人
類史の現実には自由な人間も、大衆も自立も不可能とさせている。私的な、
個人々の存在を原理とする市民的社会もまた何らかの「公的」、「政治
的」なるものをはりつかせて階級的疎外抑圧、差別を生み出している。そ
れ故、このとき何らかの「公的」、「政治的」なるものに不可避免的に関わ
ざるを得ないとしたらそれを価値的なものとするのでなく△かえりめ△
として引き寄せることが重要なのだ。とりわけ日常圏や社会闘争にあっ
ては。

政治闘争として△経済的国家△との闘争を提出するとき、ほぼ三つの
傾向と闘いに留意しなければならない。組合政治の延長でのものである。
構造改革論や社会権力論はこれである。また議会主義政治のものである。
前者は私的団体の直接的な政治的転化であり、運動的、内容的に政治的、
国家的位相にあるものを無視するか、疎外することになる。後者は現存
の国家、政治の肯定的あり方であり、かならず現存的・生活過程での階
級関係の肯定となっていく。もうひとつは日常的生活圏での闘争との連
環である。絶えず政治・社会の編成が生活過程から出てくるように、日
常的生活圏での闘争をくりこんでくる必要があり、それは重要なことで
あるが、このくりこみは△日常的生活圏・生活過程での闘争△を政治的
なものへ、引きあげるのでも転化するのでもない。政治的構想力の内部
へとりこむことであり、そこでの国家の幻想構想の粉碎の契機とするこ
とである。国家・政治の否定に向う政治的構想力、闘争を△かえりめ△

的な地域団体、企業、組合に演じさせることは絶対的矛盾か、現状肯定
しかならない。これらのことは私的な個々の原理に、いかえれば市
民的社会の原理に根拠をもつ、労働組合運動や地域住民運動(日常的生
活圏の諸闘争)に公的的政治的集団が介入したり、代行したりすることが
間違があることを教えている。本当の意味では政治闘争、公的世界を
組織するということ、私的な、市民的社会から離脱(疎外)して個々
人を組織することであり公的世界を私的化しないで、普遍性に向ってそ
うすることなのである。そうでなければ公的、政治集団は私的利害集団
か、官僚的私物になるのである。それ故にもうひとつの反インフレ闘争
は日常的生活圏に引き寄せられたところでの闘いであり、典型的には
賃金闘争である。そこでの闘いを政治闘争へ転化することが問題なの
でなく、それを引き寄せるだけである。この引き寄せのしかたは日常
生活圏闘争—政治闘争というパターンでなく、日常的生活圏の収奪構造
としての政治構造の排除である。つまり公的、政治的幻想や支配を排除
するために、引き寄せるのであって自らが政治化するのではない。社
会闘争が有効な闘いをくみ、革命性を保持する道はいつでもなく「公的」
な性格を、可能な限り排除し、私的な、個々の(せいぜい職域や地域へ)
へ徹底していくことであり、そのような意味で自立し、大衆の生活の恒
常性へ近づいていくことだといえる。いかえれば日常的生活圏での矛
盾での闘いと同じである。私的な個別的な関係の中であらわれる階級的
疎外、抑圧、差別は何らかの「公的」なるものに支えられてたちあらわれ
てくることは理論的、経験的にもたしかであるが(例えば企業的利益、
地域開発、制度的家ECI)、前述したように「公的意味を与えれば与
えるほど国家化し、権力化するにちがいないからである。

として日常的生活圏の闘争の契機へ引き寄せることこのようにして共
同の利益をなすのである。また△経済的国家との闘争は△価値法則△
の止揚(経済的な階級疎外からの解放)の過渡として、レーニンのいう
「半国家—死滅しつつある国家」の形成にあたるものである。だからす
ぐれて権力闘争なのだ。△価値法則△の止揚—資本制社会の転覆—への
過渡か、延命への過渡かのせめぎあいでの闘争である。

第二章 情勢の軸と経済的動向

(1) 国際通貨体制の解体・再編の意味するもの

「情勢の新局面」論以降の諸問題を経済過程を軸とする情勢論として
抽出することは難しい。この難しさはいくつかの特徴的事象が現象化し
ながら、現象を追うことでは事態を解明出来ないというようにあること
と、逆に本質論的解明は現象にとどき得ないということが同時に存在す
ることである。この背後には経済過程の現象的把握、本質的把握として
一般的に流布されている近経—マル経の無力性があるのだが。

ニクソン新経済政策以降、情勢論の特徴として抽出し得る問題に通貨
問題が存在してきた。通貨問題は端的にいえば金とドルとの交換性の停
止ということである。がここに凝縮されている諸問題は今日の構造的イ
ンフレのひとつの軸をなしている。ニクソン新経済政策—ミソニアン体制
の成立、共同変動相場制等々としてこれはたちあらわれてきた。戦後初
の平価切下げから、為替差額を利用しての商社・銀行ポロ儲け、土地等々

への投機としてこれは作用してきた。一般的に通貨問題としてこれは語られ貿易信用上の諸政策の問題としてとりあつかわれてきた。

私達がこの現象の中から抽出すべき問題は何か。まず現象を現象として押えることから始めよう。ニクソン経済政策が通貨問題の解決に向けて提出した最大のものは金とドルの交換停止である。これは一九二〇年代の金本位制崩壊以降、いくつの変遷を経て「ブレトンウッズ協定」へ結晶した国際管理通貨制の解体である。この事態に対する種々政策はスミソニアン会議以降、繰り返えされてきた先進国会議の中で金に代役するSDRの拡大、金の交換率の切上等等いくつか検討されながら、結局のところ平価調整と変動相場制の採用以上は出ていない。金の一定の復位を主張するフランスと金の廃貨へ一步を進めんとするアメリカとの対立は継続している。

ここで逢着している事態は一九二〇年代以降、繰り返えされてきたことであるが、金の廃貨を実質的に進めてきた管理通貨の膨大な累積と依然として金の廃貨は不可能であるということである。この現象の中から抽出すべきは次の点にある。

①貨弊は金であるが、金は貨弊ではないという意ではなく、金に替り得る貨弊は可能かという問がその一つである。もちろん私達の結論は自明である。金に貨弊が同致されたのではなく、貨弊に金が同致されたという想定が可能である以上、理論的には金にかわる貨弊は可能である。そして管理通貨が金にかわる貨弊の一定の機能、金の代役を歴史的にはたしてきたのは事実である。けれども、私達にとって、管理通貨による金の廃貨、代役が不可能であることはあきらかである。いろいろのかたちで展開されている金の廃貨論、SDR等々での代役が根本的に不可能

禁止によって停止・解体した。当時この措置は第一次世界大戦という異常事態への対応であって、戦争が終れば復原するものと考えられていた。そして一九一九年アメリカの金解禁から一九三〇年日本の金解禁を含めて、再建金本位制として再登場する。いずれにせよ第一次大戦下での金本位制の解体は再建金本位制の登場・崩壊を含めて、いわゆる管理通貨を形成させた。金本位制と管理通貨制の混合的、過渡的形態が継続してきた。これが最も安定したかたちをもったのは第二次大戦後の「ブレトンウッズ協定」—IMF・GATT体制においてである。管理通貨制や、第二次大戦後の国際通貨体系にふれる前に、金本位制の崩壊と呼ばれるものの要因に言及してみよう。

①金の自由な移動による国際的清算過程と自動調整メカニズムの構造としての金本位制の崩壊・解体はその要因を二つの点にもとめることが出来る。その一つは正貨外の膨大な戦時公債の発行等々に示される事実上の不換通貨の発生いかにえれば通貨量の膨張である。もうひとつの要因は再生産過程の運動と構造の膨張である。つまり自動調整メカニズムと呼ばれてきた金本位制の通貨内部の構造と再生産過程の構造の双方における膨張によってである。

②一般的に金本位制崩壊の要因として膨張する通貨量や生産構造に対応する金生産の不足が語られたり、特定の諸国への偏在的な金の集中が指摘されたりした。このことは貨弊と金の関係をはじめとする諸問題の理論的説明への問題提起をなすが、これを金本位制崩壊の要因とするのは現象的な把握になるだろう。

③この構造的矛盾は恐慌と呼ばれる運動を必然的に惹起させるとともに、その運動構造の逸脱をも形成する。この逸脱は管理通貨の発行や独

であることも。何故なら、貨弊としての金の歴史性に対応してきたのは(管理通貨等々が)、政治権力であり、政治権力の国家的な共同性と経済の世界性の間の矛盾を解決し得ないし、そのことによって限界が明らかなのだから。

②この面で、私達が明らかにしなければならないのは金本位制の崩壊と管理通貨の形成問題である。

周知のように、金本位制は次のような内容を有していた。

①貨弊単位が金に対して一定の価値関係を維持し、この価値関係の不安が何らかの方法により確保されることが根本である。国内で流通する色々な通貨が同じ名目単位で表示され、この名目単位の価値は金の一定量の大きさに法律で定められる。

②金地金の一定量と通貨の一定額との間に自由な交換がおこなわれること。金貨または金地金の輸出入が自由に出来ること。

③各国の金本位制度の採用は各国の通貨が金平価で固定され、一元的な国際通貨体系を編成する。この国際通貨体系は金本位制度の自動調整メカニズムと呼ばれるものであった。一国への金の流入があれば、それによって金準備がふえ中央銀行の信用がゆるみ、信用と通貨が増大して国内経済は刺激され拡大し、それにとまって物価も上昇し、輸出へのチェックと輸入の増加があらわれ、金の流入は止まる構造として。この構造は貿易不均衡—金貨流出—国内通貨増減—物価騰落という単純な形で素描できるものであるが、金本位制下の自動調節作用が自由主義段階の景気循環過程における均衡化—恐慌の国際経済的側面にはかならぬことはまた明らかである。

かかる諸点を主とする金本位制度は一九一七年、アメリカの金銀輸出

占的資本蓄積傾向の徹底化や金融資本の本格的登場というようにさまざま抽出し得る。そしてこの契機を資本制的生産構造の危機の克服と考える部分が生まれると同時に、新たな段階と特徴づけられる部分が生まれてきた。唯だ金本位制の崩壊となった要因は大戦を契機とするものであれ、あともどりすることの出来ないものである。

第二次大戦後、日本から波動した戦後恐慌や、再建金本位制がこの要因(金本位制崩壊)となった矛盾を吸収し得ず、別のところに解決されていったことで明らかである。戦中過程で膨大に累積した通貨量や、生産構造の膨張をくりこみ、資本制的生産様式と社会の構造的転換として吸収したようにもちろん、この構造的転換が、あたかも「独占が競争の排除でなかった」ように、資本制的生産の段階的、歴史的編成以上でなかったことに自明であるが。

金本位制の解体と崩壊のあと発生し、国際通貨体系の中に入りこまれていった管理通貨とは何か。

①管理通貨とは抽象的にいえば貨幣が金という自然的属性をもった物質へ体现されていくのに対して、人間の管理上のものに見え出すものとするものである。だが「貨幣を金という自然的素材へ結びつけていくこと」、「管理上の素材に貨幣を体现させていくこと」の間には、想像を超える難問が横たわっている。

②管理通貨は金と兌換を停止し金との直接的連携のない、いかにえればその価値が金に裏づけられない銀行券のことである。国内経済の必要や商品流通の必要度に応じての理想上の金量に対応して自由に発行出来る銀行券である。これは戦時の正貨外の膨大な赤字公債や膨大化した商品流通の必要度に想像上の金量に対応させて自由に銀行券を発行してき

た措置の制度化であった。

③この制度を積極的に理論づけたケインズ以降の近代経済学では投資・輸出・政府支出による有効需要や所得変化で再生産構造や運動にもたらす政策「メカニズム」と一緒に展開されている。

④このような管理通貨はその裏づけを対内的に中央的な権力によって、対外的には為替管理、二重操作という政治権力にもとめざるを得ない。政治権力、もしくは国家的な共同体が、経済過程の世界性になることが、出来ないという意味でも、単一な世界権力などないという意でも、管理通貨は金とリンクせざるを得ない。

さて、金本位制と管理通貨制の中間的、混合的形態をとり、いくつかの変遷をくり返してきた国際通貨体系は「ブレトンウッズ協定」で最も完成された姿をとった。この歴史的な展開、いかえれば戦後経済過程は相対的安定期と呼ばれてきた。ドルの二重性へおしあげられた金本位制と管理通貨制の最も完成された中間形態は戦後の膨張した通貨量や再生産構造を吸収し、かつその圧力に耐えたといえる。金とドルの交換停止によるこの国際通貨体系の破産は通貨制（その内部構造）と再生産過程の双方から追求される。ここでは通貨制に焦点をあてて問題の深化をしてみよう。再生産過程については(2)項以下で詳しくふれる。通貨と貨幣は一般的にはどのように理論づけられてきたのであろうか。マルクスは「貨幣」の問題についてあるところでは市民的社会的宗教、ユダヤ教として語っている。がよく知られているように資本論の第一章商品論のところでも明解に位置づけている。商品の諸現象を価値の源泉としての労働価値と交換価値の普遍的表象形態としての「貨幣」存在へ拡張して解明する脈絡のうちにある。第二章以下の資本制的生産過程の中では「

①資本の本源の蓄積過程とそこを経て、資本の運動が明確に歴史的な生産様式と社会構造となるとき、国家的な共同体との新たな関係を形成する。共同体そのものとして生産諸力が存在する「資本制的生産に先行する諸形態」の社会と資本制社会の区分はいろいろの特徴をもって抽出することが出来るが、共同体と資本の自己運動との関係としても考察し得る。あたかも商品交換が共同体の果てるところから始るように、商品経済としての資本の自己運動は国家的な共同体を超えて存在する。共同体を超えてという意は国家間関係としての世界性と社会的共同体の国家からの分離という面を示している。が市民的社会が国家に統括され、世界が国家間関係としてあるように、資本の自己運動もまた共同体の統括のうちに存在する。商品経済が国民的経済と呼ばれるように。この二重性と、その内部構造は資本蓄積の累積度、または共同体の生産諸力の成層度の差によって異なる。この二重性は世界経済と国民経済の二重性として把握出来る。資本の自己運動の二重性は資本蓄積（例えば本源の蓄積）の歴史的な普遍性と特殊的な謝形態蓄積傾向・様式の普遍性と不均等発展等々さまざまに現象する。同じように、「貨幣」が通貨とし現象する場合もあてはまるのである。これは現象的にいえば金としての「貨幣」、「通貨」と国家に統括される「貨幣」、「通貨」の二重性といえる。私達は貨幣の本質、その現象形態、運動構造をそれ自身のうちに考察し得るが、金本位制の崩壊と管理通貨制の採用、その中間形態の完成とその危機をどのようにとらえられるか。

④通貨問題での二〇年代以降、繰り返えされてきた危機はその背後に恐慌や恐慌の圧力があったのであるが、価値法則自身の危機であるというように語る。「金」の廃貨が自然発生的にせよ、支配階級自身から語

貨幣の資本への転化」や「貨幣形態としての資本」の運動と構造について書かれている。そして「貨幣」は例の序説プランの③、④（ブルジョア社会の国家的形態での総括、信用、貿易、世界市場、恐慌等々）の中で位置づけられている。これらは「貨幣形態」での価値、資本、運動構造の解明であるが、それらについても少しふれてみよう。これらでのマルクスの主張は次のところに要約される。

①価値の現象形態としての「貨幣」、「貨幣」の自立的運動形態と、価値の明確な区別。「貨幣」は社会的有用労働の対象化された産物なのであって、「貨幣」が価値を生成するのではないということ、価値法則が貫徹するところでは「貨幣」の存在や、「貨幣形態」を止揚することが出来ないということである。「貨幣」が価値の現象形態であるところから生れる二つの幻想形態をマルクスは鋭く批判している。「貨幣」そのものが価値を生むという重金・重商思想への批判と商品経済の内部で「貨幣」の存在を止揚出来るというブルードン批判としてである。

②「貨幣」の資本への転化と「貨幣」資本」の自己増殖運動をG—W—G、G—G—Gとしてとらえ、価値の現象形態としての「貨幣」の自立的運動と自己運動をとらえている。この自己運動を資本の本性としてとらえているがその歴史性への転化の過程を本源の蓄積論とその内部的累積差が形成する運動の諸形態としてとらえている。ここで重要なのは「資本」が「貨幣」としてたちあらわれることと「貨幣」が「資本」としてたちあらわれることである。

だからマルクスは資本の自己運動—価値法則の生み出す内的矛盾としての恐慌が貨幣収縮としてあるということと逆に、貨幣収縮としての恐慌を資本の再生産過程から根拠づけている。

らざるを得ない現状は明快にそれを物語っているのである。

③この「急機と矛盾」の救済策としてあらわれた管理通貨は「価値」から分離されているが故に、あたかも金の廃貨を進めるものとして現象しているが、それは金の廃貨を可能とするものではない。価値法則の止揚なしに、「金」の廃貨が不可能であることは自明である。管理通貨は「自然物」としての「金」にとつてかわって想像上の「金」としての役割をはたしているのだといえなくはない。価値法則の徹底化が「自然物」としての「金」を想像上の「金」にかえることを不可避としていると現象的に語れるかも知れない。けれどもこれらは次の点で明らかに誤っている。たしかに「貨幣」が金を同致したのであって、「金」が貨幣を同致したのでない以上、「自然物」としての「想像上の金」にとつてかえることは可能であるが「自然物」としての「金」といったとき、即物質を意味する以上に、自然化した人間諸力の歴史的体現という側面をもっている。

この歴史的な力を人間が制御するということはそう簡単なことではないのである。そして「想像上の金」という場合、それを支えるのは政治権力や国家であり、それが経済過程の世界性に拮抗しえないだけでなく、国家を介在させて大衆・民衆が自然過程の中に累積させてきた諸力の収奪を意味するのである。

「金」というかたちの貨幣を価値法則自身の内的矛盾によって進めることを不可避とし、このことを「管理通貨」で進める支配階級は「金融資本」という概念に表現される最も高度な自己形態を逆転するような換物政策を演じる。今日の物価高騰や資源問題は管理通貨体制の通貨の膨張と生産過程の拡大にだけなく、同時に「金」という自然物との交換

性を喪失しつつある貨幣を「金」にちかい自然物へ交換しようとする衝動にもよっている。資源獲得や土地を始めとする諸投機が産業資本や商業資本によってだけでなく、金融資本によって積極的に進められてきた事実をみれば鮮かにこのことはつかめる。資本による「貨幣—資本」への自己不信としてである。

④周知のように、「管理通貨」をもっとも理論的に展開したのはケインズである。第一次大戦下で通貨、赤字公債の膨張、生産過程の拡大、金本位制の停止は戦後イギリスにあっては経済的な停滞と不況を生んだ。戦時下のインフレ膨張した通貨の収縮、金本位制への復帰による通貨・為替の安定を意図した伝統的な経済政策に対して、ケインズは戦時経済の戦後の継承と編成を逆に主張した。投資・輸出・政府支出などの独立支出が所得変化におよばず乗数的効果を利用しての景気の拡大と停滞と不況下の失業救済策としてである。ケインズにあって、「管理通貨」はいわゆる自由放任主義の経済政策と経済理論への批判としてあった。金と銀行券との兌換を完全に停止して国内経済の必要に応じて自由に銀行券の量を調節するという管理通貨と利子率の変更と操作を軸とする政策の提起として、ケインズの経済理論は有効需要論、乗数理論をはじめいくつかの構成内容をもっているが、ここでは管理通貨に関する問題に絞って、他の内容批判は後に述べることにする。

ケインズは金本位制のように一国の貨幣量が金の量から制約される方法をたち切り国内経済の要求する水準まで自由に貨幣発行することを主張したとき、当然にも通貨の世界的側面と国内でのいくつかの問題があったはずである。前者の問題は各国家間関係として金払い決済をとるというものであり為替管理と世界銀行的なものを構造していた。通貨の

現象的、政策的にならざるを得ない。マルクスが貨幣の収縮運動として現象する恐慌を生産過程の問題と把握したように、目をそこへ転じてみよう。

ここでの問題を概括的にとらえるならば、私達は次のように整理することが出来る。資本の自己運動が不可避的に背負い込む矛盾は断えざる過剰生産、資本、信用の圧力である。絶対的、相対的剰余価値を資本へ転化し、自己増殖を続ける資本の自己運動は絶えず拡大生産、価値下落、物価下落、利潤率低下の中で好況—恐慌—不況—好況という周期性恐慌、景気循環のサイクルを繰り返す。第一次大戦下の膨張した生産と貨幣の存在が圧力へ転化してきた一九二〇年—三〇年は典型的な慢性的不況—恐慌として現象した。貨幣の収縮運動と自動調整メカニズムが金本位制の崩壊として存在したように絶景気循環にもひとつの異変があったというべきであろう。膨大な流動性資本の過剰化と遊休の生産設備、失業の存在として典型的な危機の現実化であった。そしてこれらの中で明確に登場したのは二つの事柄であった。その一つは資本蓄積の独占的傾向というべきものであり、レーニンが帝国主義論の中で提起している内容の具体的展開である。他のひとつは新たな政治的要素の登場である。前回で私達はこれを広範な意味で、疑似価値法則、擬制的止揚則の登場と語ったが、このことである。そして、この二つとも、二〇年代—三〇年代、戦中過程、戦後過程と内容は転換もしくは成熟している。周知のように、レーニンは帝国主義論の中でその五つの根本的標識をあげている。①経済生活において決定的役割を演じつつある独占をつくりだしたほどに高度の発展段階にたっした、生産および資本の集積、②銀行資本と産業資本との融合と、この「金融資本」を基礎とする金融寡頭制の形式、③商

二重化と国家管理は矛盾である以上、どこかで一元化されているところが必要である。世界的な政治権力や、国民経済が世界経済になることが出来ぬ以上、かならず矛盾としてふき出さざるを得ない。アメリカの戦後の位置を利用して可能となったにすぎないのである。「管理通貨」が金と分離される時、それは「価値」としての貨幣との分離であり、これは「価値」の下落が利潤率の低下と結びつくことになる収縮運動の救済のように見えるが価格と価値の分離を不可避にまねく。ケインズが非活動階級と名付けた金利生活者の収奪と退蔵貨幣化する資本の有効な動員を意図するものであっても、もうひとつの収奪へ転化する。何故なら、国家・政治権力が大衆のものであるはずはないからである。資本蓄積の成層度によってさまざまのあらわれかたをしても、社会ファシズムの根拠となったものであるのだ。(注)貨幣論は難しい。多分その理由に貨幣を価値論の側から把握すること、貨幣そのものの発生を歴史的に把握することを統合することにあるとおもわれる。例えば「価値論」の側から「金」はその生産に要した労働力の価値に還元されるのであるが、「金」が歴史的に貨幣へ転化してくる水準ではそう簡単ではないのである。この背後には資本主義の把握を論理的にするのと、歴史的にするとの統合の難しさがあり、いわゆる本源的蓄積(原蓄過程)把握のそれと同じことがあるはずである。

(2) 戦後経済と再生産の構造・運動

経済的諸動向の中で情勢をめぐる特徴として抽出し得る通貨問題一つにしてみても、当然にも再生産過程、構造からとらえない限りきわめて

品輸出とことなる資本輸出がとくに重要な意義をもっていること、④世界を分割している国際的、独占的資本家団体が成立していること、⑤資本主義的最強国による地球の領土的分割が完了していること、である。

この内容は基本的には二つに構成される。即ち、独占的な資本蓄積傾向と新たな資本の運動であり、他のもうひとつは政治的・国家的な内容である。

私達はこの二つの内容をもう少し、広い方向で再構成しなければならぬ。

第一の問題はつじつめれば競争は独占へ転化するというマルクスの命題の歴史的現実化である。独占資本と金融寡頭制として資本の構造のうちにはあらわれた、独占的な資本蓄積はどのような構成と運動をたどったかである。恐慌—不況期の膨大な過剰生産、資本、遊休設備を整理・集中して生産と資本を独占的に集積した独占資本の構成は「金融資本」と「産業資本」の融合である。それまで歴史的な資本の諸形態を構成のうちにもっていたことはいうまでもない。

この独占資本が展開した運動構造は独占価格の維持(カルテル)と生産制限による供給制限であった。これには均衡財政政策、保護貿易への転換による国内産業の保護、賃金切下げという当時の基本的な政治政策と結合していた。それ故に過剰生産と資本の圧力が慢性的不況として現象しただけでなく、資本輸出や市場再分割戦への衝動もまた強力であった。これらが不況と失業という停滞経済、資本制的危機の深化としてたちあらわれてくることによって、救済策として種々の政治的、国家的策が登場してくる。

現象的にいえばスターリニズム、ファシズム、ニューデール等々と

してあらわれてくる。これら総じて社会ファシズムといつてよい。これが現実の力を形成するのは戦時下であり、戦後であるが。

私達は通貨問題の分析のところで「管理通貨」のところで経済過程の世界性と共同体の性格に規定される国家性の二重性について述べた。経済・社会構成体の共同体的性格と超出的性格の二重性としてである。よく知られているように、アジアの共同体がアジア専制国家の基礎を、ギリシア・ローマの共同体の特質が奴隷社会を、ゲルマンの共同体が封建制社会を生んできた。これらの共同体社会の分解の上に近代市民的社会が形成された。またこれらの共同体と資本制生産に先行する諸形態とは相応している。これらの諸共同体と生産様式は社会に成層的に存在するものであることはいうまでもない。

市民的社会、商品经济社会、資本制社会、どのように呼ぼうともそれ自身がはらんでいる二重性が新たな展開に入ったということである。経済過程の共同体的刻印、国家的要素はもとより自由放任原理と呼ばれている時代にもあったのであるが、資本制社会の発展はより強力にこれらの要素を排除していくものと考えられていた。

過剰な生産と資本の圧力が自由放任原理下の自動調整メカニズムを解体させ、慢性的不況―膨大な失業者の存在として現象した。「管理通貨」に対する「管理通貨」に対応するように、再生産過程の中に新たな様式が登場した。前述した資本の独占的蓄積傾向とその運動に相まって、国家管理的傾向が強化された。投資・輸出・政府支出等々の、または経済統制の登場によって、下況―失業の解決、過剰生産、資本の圧力を回避すべく、再生産過程の再編成がめざされたのである。資本輸出、市場再分割がその外的編成とすれば有効需要策を軸とする財、金融、労働の需

生産の諸現象が、歴史的な局面（社会経済構成体を単位でみるときはその成層度）で変容的に存在するのは当然であり、戦後経済把握の上でこれを考えるのは不可欠である。周知のように自覚的であるかどうかは別として段階論によって、歴史的変容論は練み込まれてきた。この内容上、われわれは宇野弘蔵をはじめとする種々の見解（いわゆる段階論）と決定的に異なるのはわれわれが「過渡期論」を想定することである。そのメルクマールをロシア革命による「社会主義経済」の成立や、拡大にではなく、△二つの大戦▽、つまり△戦争▽の、生産様式や生産過程にあたえた変容をより中心的にみるということである。われわれは「社会主義経済」と呼ばれてきたものを、△戦争や戦時経済▽がその後の経済過程にもたらした変容としての「ファシズム」や「ニューディール」と同一の枠であつたのであり、旧来の「ロシア革命―社会主義経済」論の過大評価と△戦争―戦時経済のもたらした変容▽の過小評価を逆転しなければならぬのである。戦後経済の性格論議が、資本主義変貌論やその批判と絡みながら生み出されてきた理論的成果をわれわれは批判的に摂取すべきであるが、それはまた分析に生かされるであろう。

さて、われわれは戦後経済の再生産過程、その構造と運動をみるとき、その歴史的な変容性格こそ鋭く押えなければならないのであるが、われわれが本質的―永続的であるといったものの若干の検討と歴史的変容的性格を二〇―三〇年代との対比でやってみよう。資本制的生産過程の構造的、運動は論理的に把握されれば、絶対的、相対的剰余価値の生産とその資本への転化とその繰り返しでありW・G・I・W・G・I・W・Gである。そしてこれらは資本の自己増殖としてのG・I・G・I・G産業構成の高度化の展開である。この展開は資本の側に引き寄せてみれば、絶えざる剰余価

給関係における再編成がその内的編成であった。財、金融労働市場に於ける需給関係が価格利率率、賃金率の自動調整的動向で決められていくと想定されてきた編成方法の新たな展開として、これを推進する力と支える力が政治権力や国家に求められたのだ。

資本蓄積の独占的傾向とこれとの結合が、いわゆる「国家独占資本論」といわれるものとして、広範な現象となってきた。これら二つの方向、資本蓄積の独占的傾向と世界性と国家性の新たな関係がより本格化するのは戦時経済を経て、第二次大戦後過程である。再生産過程と運動の構造が資本制的生産様式としても、社会経済構成体としても、新たな展開としてより明確に抽出し得るのは、それ故に、戦後過程である。

恐慌―不況現象に関する議論は戦後経済の性格把握の中心の一つを占めてきた。恐慌―不況（失業）は資本主義経済、資本制的生産過程の宿命の危機と考えられていたから、その論争は同時に、その擁護と批判に結びついていた。戦後の経済過程の中で、恐慌―不況現象が古典的なかたちでたちあらわれなかったから、資本主義経済の宿命的危機からの脱出、資本主義変貌論が出された。他方から依然としてそれは存在するだけでなく政策的に回避されているにすぎないというイデオロギイ的批判と△危機論▽の予測の中で想定された。別の見方をすれば、これは資本主義経済の変容論と本質的永続論であったといえるだろう。われわれのこれらの議論に関する見解―立場は何度も繰り返してきたように明確である。もともと生産様式からみても、社会経済構成体からみても、資本主義、資本制的生産過程は巨視的に想定されてきたのであり、この視座からは本質的に永続的であると考える。△価値法則▽の貫徹を始め、基本的（宿命的）矛盾はつらぬかれていく。だが資本主義や、資本制的

値の生産、もしくは利潤獲得の過程である。そして労働者には自己維持のための労働力の売買と労働の被収奪である。ここで究極の問題はこのような生産構造の変革による労働者の解放とそれを通しての、このような人間の労働の革命であるが、主要な問題はその自己運動の内在的展開の形成する矛盾である。マルクスは過剰生産、資本の圧力と恐慌の中にこれを対象化している。資本制的生産は生産過程における相対的、絶対的剰余価値の生産であり、そこでは可変的資本と労働力の量的拡大（労働時間の拡大）と資本の有機的構成の高度化と労働の社会的生産力が強化される。

これが資本制的生産過程の基礎であるが、商品交換（流通過程）が総過程ではもうひとつの軸をなす。資本制的生産過程はこの循環である。生産過程を支配するのが剰余価値の生産であるが、それを規定するのは流通過程での財、金融、労働の市場を介する需給関係である。そこで支配するのは商品の交換価値であるが、自由競争の原理である。資本の有機的構成の高度化と労働の社会的生産力の強化は、価値下落による競争とともに、不可避な法則である。この法則の上で生産過程は好況―恐慌―不況の循環をたどる。資本の有機的構成の高度化と労働の社会的生産力の強化は生産物の価値下落を生み出し、労働需要の減少による相対的過剰人口と資本の高蓄積を生み出す。価値下落による商品価値の下落、資本の有機的構成の高度化―産業構成の高度化は商品と資本の需要の拡大を、ときには可変資本の拡大による労働需要の拡大を促す。だが供給の累進的拡大と相対的過剰人口によって需要に対する供給の過剰と利潤率の低下による資本の過剰へ到る。可変資本の拡大による労働需要の拡大は労賃の騰貴による利潤、資本蓄積の低下をなす。需要の拡大に

よる生産の活性化は過剰生産、利潤率の低下による資本の過剰へ旋回することによって産業循環としての好況から恐慌への局面転換を生み出す。恐慌による価値破壊は過剰生産による過剰な供給構造の破壊であるが、同時に資本の有機構成の高度化―産業の高度化、相対的過剰人口の創出によって次の局面への準備をなす。断えざる過剰生産と過剰資本の圧力の中で、景気循環を繰り返すのであるが、資本蓄積の独占的傾向と超過利潤、市場獲得をめざして戦争を生み出す。資本制的生産過程を巨視的にみたととき、資本の有機構成の高度化、産業構成の高度化、相対的過剰人口の創出利潤率の低下、過剰生産と過剰資本の創出等々は貫徹している法則である。資本主義の発展が危機を生み、危機が発展を促すという弁証法的活動は歴史的には好況―恐慌―不況という景気循環と資本主義の不均等発展を介しての資本主義の世界史への拡大によって過剰生産と過剰資本の圧力を回避してきた。それ故に、恐慌や戦争は過剰生産や過剰資本による危機の不可避的帰結であると同時に、その矛盾の解決形態であった。今日、歴史的にみれば、恐慌や戦争が部分的、変容的にしかたあらわれないとすればそれは過剰生産や過剰資本の吸収形態を別に生み出しているということであるが、同時に恐慌や戦争という矛盾の解決形態を失っているのだといえる。資本の有機構成の高度化、相対的過剰人口の創出、利潤率低下、過剰生産、過剰資本の圧力から資本制的生産過程が免れているのではなく、その深化の段階にあることを認識する。問題は恐慌や戦争の歴史的な変容化と部分化と新たな矛盾の解決形態を押しやることである。われわれは今、三つの視点から問題を考えなければならぬ。その第一は恐慌や戦争の要因となってきた資本制的生産過程の構造と運動である。第二に、恐慌や戦争が資本制的生産過程の構造と

だと思われる。国家(幻想的)や生活的な価値意識にあたえた作用と同じものが経済過程にあることは間違いない。われわれは経済過程の認識や分析において、断片的にそれらを繰り返して来たかも知れないが、そこを自覚的に扱うべきだと考え始めたのは反インフレ闘争のとり組みの中である。それはわれわれのインフレ問題を介する経済分析が、幻想論、集団論としての国家論や日常圏論として蓄積してきた理論成果とよく絡み得ないという反省を契機としてきたのである。

第一次大戦の戦中過程に膨張した通貨、信用、生産は、戦後ただちに恐慌―不況現象をもたらした。二〇年の日本の恐慌から波動した恐慌―不況、二九年アメリカの恐慌からのそれはサイクルのちがいをもっているのであるが、慢性不況として、二〇―三〇年代を現象させた。膨大な流動性資本の過剰化と遊休の生産設備、失業の存在として典型的な危機の現実化であった。金本位制の解体、管理通貨制の採用等々については前回述べたが、この時代を鮮明にするものは資本蓄積の独占的傾向と国家の新たな形での経済過程への登場である。これらも前回すでに述べたのであるが、もう少し詳しく述べてみよう。資本蓄積の独占的傾向はマルクスによって命題とされ、レーニンによってより深く展開されている。資本の有機構成の高度化―産業構成の高度化をめぐる資本間の競争は巨大で独占的な資本の制覇をもたし、市場をめぐる競争を激化させる。資本蓄積の独占的傾向と活動はレーニンが帝国主義論でたてた標識や内容とみればよいのであるが、これらは二〇―三〇年代、生産過程にどのようなにあらわれたか。自由放任原理下の自動調整メカニズムとしての産業循環そのものが異変としてあらわれるはかなかった慢性的不況に対し

運動自身にもたらすものであり、第三はそれが戦後の経済、生産過程の変容へ作用したものである。恐慌や戦争の資本制的生産過程からの不可避的な疎外についてはマルクスの見解やレーニンの見解で正確に述べられているのでここでは多くふれない。われわれは資本制的生産過程の構造と運動の内在的矛盾としての危機は深化していること、部分化し、変容しつつあるとはいえ依然として展開されている事を押えておけばよい。そして恐慌や戦争自体の経済的意味、その生産過程の運動と構造へ作用しているもの、戦後経済過程に作用してきたものにより多くの考察を払わなければならない。ことわっておくがこの論文では戦争の共同幻想的側面では一定程度、捨象しているのであって、それについては別論文(理論誌七号や八号)を参照してほしい。恐慌や戦争が資本制的生産、経済、社会の最も深く、激しい危機の産物であることはいうまでもない。同時にそれが危機の矛盾の解決であることをみなければならぬ。恐慌は一挙的な価値の破壊であるが、それによって資本の有機構成の高度化、産業構成の高度化、相対的過剰人口の創出をなすことで資本制的生産と資本主義の生命力の更新をなしていくものである。戦争はより徹底した価値破壊であるが、それ自体のうちに過剰生産の吸収、産業構成の高度化(技術革新)、不均等発展の平準化と再編成等々を同時に創り出していく。われわれは戦時経済の概念とともに、戦争の経済過程に作用するものVについての理論化をなしえる準備も、力量もいまないが、戦争をやがては平常にもどる異常状態、危機一般でなく、ある面では矛盾の解決形態としてとらえなければならぬ。レーニンが戦争を不可避性といったことをそこまで広げて解すべきであろう。戦争によって、そこでの経済編成がV戦後の経済過程Vに作用したものは大きな位置をもったの

たのは二つの方途である。そのひとつは膨大な流動性過剰資本遊休設備、失業者の圧力の中で、つまり過剰生産の局面で、生産制限による供給制限と独占価格の維持である。もう一つは超過利潤獲得である。産業循環の中で好況―恐慌―不況サイクルは過剰供給―価値下落―価格下落から貨幣収縮―倒産―生産破壊を生み出すことで過剰生産に対してきた。がこの過程はまたこれを媒介に資本の有機構成の高度化―産業構成の高度化、相対的過剰人口の創出で次を準備していく。この循環が巨視的にみて、資本制的生産過程の拡大再生産としてあらわれてきたとすれば、資本の有機構成の高度化―産業構成の高度化による相対的剰余価値生産の拡大であったのだが供給制限と独占価格維持は次を準備させるものではなかった。何故なら、独占的な生産制限による供給制限は過剰生産に対するものであるといえ、新たな需要を生み出すものではなかったし、独占価格維持は利潤を保証するものであったとはいえ、断えざる価値下落―資本有機構成の高度化―産業構成の高度化、相対的剰余価値生産の拡大による新たな拡大再生産を準備していくものでなかったからである。自由放任経済下の自動調整メカニズムのような景気循環―産業循環が成立しなくなったのは資本制的生産過程自体の歴史的限界、危機により根本的な要因があったのだが独占的な資本蓄積もその一因をなした。さればこの独占的な資本蓄積―金融寡頭制の支配力は慢性不況の強化へとも作用したのである。そして独占体、金融寡頭資本は独占価格維持や植民地支配による超過利潤獲得の強化をはかっていたのである。資本蓄積の独占的傾向は大戦前からの支配的傾向であったばかりでなくその(戦争)推進力をなしたものであったが、二〇―三〇年代の危機にこのように対応していたのである。二〇年代において支配的な政治経済政策は均

衡財政政策、保護貿易による国内産業保護、賃金切り下げというものであったが、これは自由放任経済下の自動調整メカニズムにもとずいて想定されていた需給原則にのっとっていた。何故なら戦後の過剰生産は競争という異常下の経済活動に起因し、やがて平常の過程へ回復していくものと考えられていたからである。また独占資本の超過利潤獲得の衝動と政治政策は世界経済の構造の再編成を激化させた。

二〇一三〇年代の経済過程をみると、慢性的不況（二〇年アメリカの空前の好況とか、いくつかの不均衡なところもあるが）であり恐慌一不況を従来のような現象としてほとんど経験していない第二次大戦後とはいちじるしい対照をなすものであった。この慢性的不況期への独占体一独占資本の対応と支配的な政策は、とりわけ二〇年代では戦中の異常な状態の平常過程への回復という前提でたてられており、景気循環にともなう好況への転換が想定されていた。けれどもますます慢性的不況を激化させた。慢性不況の中で、膨大な失業者を背景とする労働者、民衆の闘争に促されて、新たな経済的過程が登上する。ニューディールやファシズム、スターリニズムというかたちの新たな経済過程であるが一括してこれらの共通点をあげれば次のようにいえる。従来の資本制の生産過程に対して、何らかの改変をなすものであり、自由放任的、自動調整的過程への国家的・政治的介入をなすものであった。

これは次の諸点において特徴的に抽出し得る。①計画的、統制的修正のどのように呼ぼうとも、これらの対応は古典的な経済概念に立つ支配階級から一定の反発をうけた。②濃度やイデオロギー的差はあれ反資本主義幻想をもち、慢性不況一失業下の労働者、民衆の不満を吸収するものであった。③これらが資本制の生産過程の危機と内在的矛盾を止揚す

目を今回の主要対象である戦後経済下の生産と運動に転じてみよう。われわれは資本主義変貌論と違って、資本制の生産過程の内在的矛盾は止揚されたのではなく、より深化しながらも、恐慌や戦争を部分化し、共時的に併存させながら新たな矛盾の解決形態を生み出してきたのだと考えている。通貨や貨幣の問題については管理通貨の本格化であるが、すでに前述した。再生産過程の構造と運動としては生産過程のメカニズムとしての有効需要の創出と世界経済の再編であるが、これら二つの側面に渡って把握してみよう。資本制の生産過程を巨視的にみる限り、その循環が自動的に回転し得ない過剰生産の構造が生み出されており、資本の利潤率低下は深化し、貫徹している。そして資本の有機構成の高度化一産業構成の高度化への自動展開も行きづまっている。相対的過剰人口一失業の圧力は強力である。恐慌による一挙的な価値破壊だけでなく、それを通して次を準備していく自動展開が不可能になっていることも。いいかえれば資本制の生産過程の拡大再生産の展開は利潤獲得の面においても、世界的な経済編成の面においても、停滞局面そのものである。二〇年代以降、退却過程にあるのである。巨視的にみる限り、労働者、民衆の闘争と力が規制力を獲得していることは真実である。過剰生産の圧力の中で、独占体一金融寡頭資本が二〇一三〇年代で展開したのは生産制限一供給制限と独占価格維持、植民地支配による超過利潤の獲得であったが、それは三点の矛盾をもたらしてきた膨大な遊休設備と過剰資本の存在であり、失業と超過利潤による収奪による先進一後進地域民衆の反撃と闘争の激化である。そして反資本制の経済理論と実践を内部から生み出さざるを得なかったことである。われわれが恐慌と戦争にかわる新たな矛盾の解決形態と呼ぶものは、再三、再四述べるまでもな

るものでなかったこと、生産過程の内在的構造からみても、世界経済の編成からみてもそうである。④反資本主義、反帝国主義幻想の民衆の不満の吸収と帰結としての資本制の強化は天皇制の政治的意味と同じであった。二〇一五〇年代の独占体と帝国主義の競争と対立が第二次大戦へ到る局面で複雑な様相をもったとすれば、そこに帰因する。⑤これらは第一次大戦下の戦時経済の、その経済過程にもたらしたものの経済的総括、繰り込みであったが、力をなすのは第二次大戦下であり、本格的に組み込まれていくのは第二次大戦後である。⑥ニューディール、ファシズム、スターリニズムは資本制経済の歴史的危機への対応と戦時経済の経験的組み込みであったが、その差が国民的経済の成層度であったといえ、相互対立を経て戦後へ到った。第二次大戦下の国家対立の帰結が、共同幻想的レベルでは宗教的国家への自由的国家の勝利として帰結したように、経済的レベルではファシズムの敗北として結果した。

第一次大戦後の経済過程を概括的にみる限り、慢性的不況から脱するのは第二次大戦への突入過程によってであった。そしてこれらの時期は資本制経済の歴史的危機のそれであったのだが、これへの対応は理念的にも、実践的にも古典的なそれと（戦前的方式への復帰）、戦争経済の経験的繰り込みのそれとをきわめて過渡的なものであった。われわれが疑似価値法則、擬制的止揚則と呼んできたものは後者をさすが、二〇一三〇年代の過程ではこれらは少数であり支配力を獲得していくのは第二次大戦下と第二次大戦後である。例えば経済学的近経的側で、先進的経済国家の部分でのこれらのあらわれである、ケインズ理論や新古典派経済理論、ニューディールの政策は戦時経済と五〇一六〇年代で本格化するものである。

く、戦後過程でこそ本格化するのであるが、当然にも独占体一金融寡頭資本は繰り込んでいくのである。もちろん恐慌一戦争が矛盾の解決形態、危機発現としてなくなったのではなく、部分化して地域化されただけであることはいうまでもない。例えば近時のベトナム戦争、中東戦争の経済的側面は巨大な意味をもっているのである。スタグフレーションという概念が登場せざるを得ないように恐慌一不況の力は現実の規制力をなしているのである。唯だ資本主義変貌論への対抗上、全面的な恐慌一戦争の不可避性にめり込むことは新たな矛盾の解決形態とそれ自身の形成する矛盾を見失うのである。

資本制の生産過程の内部に遂行された新たな矛盾の解決形態とは何か。それは膨大な過剰流動性資本と遊休設備の稼動と失業の吸収を有効需要の創出をはかることによってなすものである。有効需要の創出はある面からみれば自然史的な経済過程への意識的制御であり、人類史の知恵の展開ともいえるが、恐慌一戦争のような価値破壊であるともいえる。それは恐慌の価値破壊の面と戦争の経済的活性化の面を平時化したものといえる。有効需要は公共事業、設備投資、所得変化による需要創出によって、過剰生産を吸収せんとするものであった。資本の有機構成の高度化、産業構成の高度化による金融、財需要、その波及効果による労働需要の拡大をはかうとしたのであった。過剰資本や過剰生産、失業等を吸収するものとしてこれは極めて合理的にみえるし、戦争や恐慌の発生を解決したという資本主義変貌論を生み出す程のものであった。拡大再生産と金融、財、労働需要の予定調和的發展、経済成長理論を幻想させるものであった。それは矛盾のないものであり、資本制生産過程の発展を保証するものであろうか。たしかに右効需要創出は過剰生産、資

本の吸収をなし得たし、拡大再生産を作り出してきた。がわれわれは次の事を見なければならぬ。第一に過剰資本を吸収し、稼働させるといったとき、過剰資本と貨幣収縮そのものからみなければならぬ。過剰資本とはもはや利潤を獲得する方向がなくなっているというところ、いいかえれば利潤率の低下であり、貨幣収縮とはそれ故の、貨幣退蔵化である。独占体―独占資本がこの過程でとってきたのは独占価格の維持や植民地支配による超過利潤獲得であったが、利潤低下の故に過剰化し、貨幣収縮をもたらしている資本を稼働させるとすれば何によってか。それは一面では新たな利潤獲得先―投資先の創出であったが、それは資本自身の自己破壊、つまり管理通貨によってである。「想像上の金」を想定して作り出されるものであっても、それを保証するのは権力しかないのであるから、現実の「金」と分離し、膨張する度合だけ、貨幣価値破壊、貨幣価値下落をもたらすのである。ケインズのいい草によると彼れが非活動階級と名付けた金利生活者の収奪というものである。現実には民衆が自然諸力として累積したものの収奪に結果し、国家権力と結合する独占体は別のカラクリをもつのであるが、戦略的にみたととき後退戦略であり、浮遊する管理通貨とインフレの怪物を生み出す。そして「金」と「管理通貨」の間のような退路なきジレンマ、矛盾へ行くほかないのである。さて有効需要にて作り出され、有効需要を生み出していく、公共事業等々の需要や設備投資―拡大再生産上の問題は何か。まず公共事業等々の需要の拡大はある面からいえば社会主義的な、合理的なところを有するだけでなく、利潤率低下の中で混合経済的な(平均利潤化)を今日の資本主義が強いられているのだといつてよい。がここには二つの問題が存在する。その一つは公共事業等々というとき、その中には戦争

その一つはどのように改良的であれ、生活利害を防衛するところとつみあげてきた民衆の力こそ、失業の吸収を独占体に強いてきたものであるということ。その二つめは独占体の収奪構造としてのインフレということである。それは価値法則の展開として資本制の生産が危機を形成したとき、有効需要によって危機をくりのべたのであるが、本来の意味での利潤率が低下する矛盾を超過利潤獲得へ転化したのであり、インフレはその今日的形態の主要なものの一つなのである。戦後経済の再生産構造と運動の大きな軸をなしてきた有効需要の創出による過剰生産、過剰資本の吸収、拡大再生産は通貨、一般需要、設備投資、労働需要、いずれの面からも不可避免的に新たな矛盾へ逢着しているのだ。

戦後世界経済の再編の問題については紙面の関係上、多くを扱うことが出来ないのは残念であるの、第二次大戦後、世界経済の軸としてアメリカ経済が成立したという一般事項でなく、総体として世界経済の八戦後Vこそ把握されなければならない。「管理通貨」の諸問題のところで通貨貿易についてはふれたが、再生産過程や運動の中で注視する必要があるのは前述した有効需要論や独占体の動向は世界経済として成立したものであるのだということである。資本主義が世界資本主義として成立したというファクターと不均等発展や成層度を軸に国民経済的に形成されるという構造が戦争過程を経てどのように変容したか、今日の構造をなしているか、いずれ種々の世界資本主義論批判とともになすであろう。

(3) 危機の累積と構造的インフレ

これまで、われわれの前に流布されてきた危機論は「恐慌」、「戦争」

を極点とする、平時の軍事スペンディングも含むということである。資本にとって需要は需要であるという法則は同時に価値破壊―浪費という需要を含むのであり、これが利潤法則から解放されていることは人間の意識的制御という面と歯止めないインフレの因ともなるのである。二つめの問題は公共的なものの基準は何かという問題であり、それは「開発」問題に象徴される何かがということ、誰が判断するかということである。われわれの結論は自明であるが、設備投資―資本の有機的構成の高度化、産業構成の高度化(技術革新)こそは戦後経済の推進力をなしてきたのであるが、本来これは相対的剰余価値生産の機構である。ここでの問題は何か。資本制の生産過程にあって資本の有機的構成の高度化や産業構成の高度化は相対的剰余価値機構の強化であるが、それは生産物の価値下落を形成することによって、社会的に前進的に寄与する面をもってきた。たしかに有効需要創出下のこれらも、そのような側面をもってきた。がわれわれが注視するのは次の点である。有効需要創出下の設備投資が、固定資本の更新にともなう需要とこれらの中から形成される商品の価値下落―労働力商品価値低下―相対的剰余価値生産という展開をたどっていないということである。商品価値の下落は、価値と価格の分離による独占価格維持で、価格下落にならず超過利潤がそこでは維持されているのである。超過利潤こそ、設備投資主導型経済の裏なのである。設備投資による財需要と商品需要の分断と独占体―独占資本の二面展開こそインフレ因をなすだけでなく、またスタグフターションを形成するのである。

有効需要の創出による経済過程の活性化は失業の圧力を吸収してきたことは事実である。われわれはこの中に二つの面をみなければならぬ。であった。がわれわれは久しい以前から、(戦後資本主義―帝国主義)はこれらとちがうところに危機を内包しているのではないかと予感してきた。国家論(幻想論)や生活論(関係論)を除いても、レーニンやトロツキーローザらと時代の位相のちがうところで革命を考えねばという想いにとらわれざるを得なかったとすれば理由はそこにあったろう。「恐慌」、「戦争」に、「構造的インフレ」を加えてこの課題に進まねばならない。「構造的インフレ」がかかる契機の一つにすぎないとしてもである。

「恐慌」や「戦争」は資本主義の危機、危機の発現形態であると同時に、矛盾的解決形態であると述べた。「構造的インフレ」はこのような危機であると同時に、また矛盾的解決形態ではないのか。くりかえすまでもなく、「恐慌」や「戦争」がなくなったのではない。それは併存的、成層的にあり部分化、地域化をしただけであって、資本主義の危機のハケ口である。「構造的インフレ」は自動調整メカニズム的な再生産過程が不可能となるような過剰生産と資本の形成(利潤率の低下)、本来の意味での価値法則の貫徹の危機の中で、「恐慌」、「戦争」のような価値破壊と再生産の活性化を同時に、かつ平時化される必然から生れる。有効需要の創出が価値破壊である面と有効な価値の誘導との面をもつとしても、資本制生産過程の中では貨幣、需要、産業構成の高度化が価値破壊による需要創出でしかない限り、不可避免的に「インフレ」を生む。独占体は利潤率の低下や彼ら自身をも不可避とする価値下落を独占体は植民地支配や「価値」と「価格」の分離―独占的価格維持による超過利潤によって解決してきた。だが「管理通貨」の浮遊的圧力が独占体をして、「貨幣」への自己不信を到らしめるように、価値破壊は深刻な

資源問題を提起せずにおかないのだ。そして膨張する生産の制御を不可能ならしめていく。民衆、労働者は金銭的な生活の高度化の膨張の中で、超過利潤による収奪とインフレの二重の収奪をしいられる。生計の破局を戦争として強いられるとき、民衆が自己の生活の利害で国家と対峙するのでなく、過剰に国家―戦争（非行としての戦争）へのめり込むように、「インフレ」の軸にある有効需要―拡大再生産のもたらす生活の高度化幻想で収奪されることに留意しなければならない。必要なのは社会的倫理でなく、生活利害に執着することである。賃上げの獲得と物価高騰の粉碎を日常的な生活利害による貫徹としてなすことと、資本制的生産過程の根源と闘う政治闘争で追いつめなければならない。戦後の経済過程をはっきり押えなければならない。闘いはそこからのみ始まるのである。

編 集 後 記

全国の同志諸君へ理論機関誌『叛旗9号』をお届けする。本年二月末に8号を刊行したばかりであるから我々にとっては極めて早いピッチの続刊と言うことになる。この三ヶ月余り我々は、2・27共産同政治集会におけるインフレ闘争の再生宣言以降、情勢と運動の環をインフレ問題に絞り矢次早に実践展開を為してきた。他方、政治闘争としてのインフレ闘争と併行して、三里塚、光文社等の象徴的な社会闘争に力を注ぐと共に、職場、学園、地域における地道な日常闘争を為してきた。インフレ問題一つとってみても、政府、ブルジョワジーからの民衆への矛盾転嫁として、情勢の側からの闘いの条件は十二分に成熟していながら、左翼や民衆の側からの有効な反撃が殆んど為しきれていない階級闘争の停滞状況に依然として我々も直面していることを否定しない。この我々が主体的後退戦と名付けたこの困難な局面に我々は対処可能な二つの道からアタックしてきた。その一つは、言うまでもなく試行錯誤を経つつ、日常的な宣伝、煽動、組織活動を基軸になされ重ねられる実践と、それらから導かれる経験思想の蓄積である。もう一つは、人間の自然過程が保持している幻想―日常構造の国家―市民社会への逆倒を再逆倒する方途の透視であり、構想力への歴史や世界への引き寄せである。

情勢のダイナミズムからすれば、前者の闘いの現段階を総括し展望する作業は極めて重要である。だが、本号では本誌の理論機関誌としての性格に顧み、そのような情勢故に抑制的に後者の領域の諸課題を照射せんと編集されている。現段階の実践的闘いへの我々の回答は、本号とはほぼ時を同じくして刊行される三里塚、労働、学園を主戦場とした『社会運動パンフ』を参照され度い。同時に赤燈社から救対・弾対活動の中間総括と、刑法改「正」への理論的批判を軸とした『赤燈社パンフ』、及び首都圏各地区や関西を中心に独自の反インフレ行動を展開している反インフレ行動委連合の『反インフレパンフ』も刊行されているので、併読されることをお勧めする。

さて、本号は三文の論文で編まれている。三上治の第一論文は、現在いかなる政治組織も集団として自らの内部で、また民衆に対して回答を迫られている必須の課題をいわゆる「内ゲバ」を直視しつつ述べたものである。民衆は政治

理念として党派を評価しているのではなく、彼らの政治行為と集団編成が何ら自らの生活圏の解放を照らすものではないという現況に対し、彼らに自らの日常の鏡を見る想いで沈黙しているのだと思える。この重い問いを回避することは、政治日常矛盾に眼をつむるばかりか、構想力にとっても敗北なのである。

神津陽の第二論文は、右のシビアな情況の重圧を、生活圏における民衆共同性の上げ底化への苦い批判として、日常価値の所在から述べている。現今の「社会主義」国下の労働、家族制度が、何ら自らの日常営為にとどめて、ちよちん持ちの揚言にも拘らず、心動かされるものでないのは何故か等を、政治集団にとってはもう一つの、民衆にとってはあたりまえの生活圏への遡行から、反撃の拠点から触れたものである。

共産同政治局の第三論文は、前二者と異なり「情勢の旋回軸とわわれの課題」というタイトルで政治新聞『叛旗』67、69号に連載したものに、手を加えたものである。反インフレ闘争への経済理論的視座は一応これで尽されていると考えている。

従前と同様に、全ゆる側面からの本誌各論文への読後感、質問、意見等を歓迎する。誠意あるものである限り、責任をもって返信する所存である。

一九七四年水無月

共産主義者同盟『叛旗』編集委員会

蒼氓の叛旗

神津陽著

1200円

戦後のあらゆる擬似前衛と共同体の崩壊を招来した60年から70年への闘いの質と位相に射程を定め階級創出・成熟の相を撃ち、輩出する「前衛主義者」を越えた論集。

かくめいの原巻

神津陽著

750円

「党・大衆」論に根ざす、一切の党派・「無党派」の運動・組織・理論の矮少な袋小路を撃ち続ける著者が「共同体論」をより鮮明に収斂させる戦闘的論文集。

焰への確執

神津陽著

750円

戦後秩序の解体と再編のこの「時代」の中で、党派・個人の狭間から、未だ歴史を刻印できぬその根を糾剔し、世界に情念の底の共同性へ至る隘路を見い出さんとする

関係の磁場

神津陽著

950円

歴史の覇者としてのブルジョワジー粉碎のため、「意識・生産・生活」の全域から、存在をさせる組織を、自らの個的営為が共同性を媒介して発現する組織形成を称える

戦闘の指示向線

三上治著

800円

世界の解体・再編下に蠢く日本帝国主義の危機を把握し、新たな政治戦略と社会生活の磁場に立つ組織論の転変を展き、共同的な戦闘性を世界の革命に呼びかける。

現代思潮社

東京都文京区小日向1-24-8

振替東京 172442
電話 (943) 4406

反帝戦線機関誌 <特別号>

嗚咽

社会的日常に叛乱の炎を

- ☆学生運動の情況と主体的突破
- △労働者運動編
- △三里塚闘争編
- ☆三里塚闘争と民衆共同性一家族・所有・心的規範―集団編成の諸問題
- ☆学生運動の情況と主体的突破
- ☆労働者運動の混迷の現段階と再生の方途―争議団問題の経験と日常闘争としての労働運動
- △三里塚闘争編
- ☆三里塚闘争と民衆共同性一家族・所有・心的規範―集団編成の諸問題

発行 / 全国反帝戦線連合
(〒160) 新宿区百人町2-16-18
本誌ビルT05号 TEL. 368-4630

煉獄の炎

発行赤灯社 A5版七〇頁

定価 400円

赤燈社の連絡先は次のように変わりました。
(番) 三六七一六〇九八
(自) 三六二一六五一五

刑改改悪阻止闘争の現段階とわれわれの課題
情勢の基本動向と時代思想の水準 / 刑法の歴史的変遷の構造と階級闘争の質 / 総括と展望 / 刑改改悪阻止に向けて
われわれの経験と総括
11・19中韓闘争小話 / われわれの克服すべき諸課題 / 敵対力の提起 / 八年獄中のラブレター
5月17日付書簡(高橋克行)
6月1日付書簡(高橋修)

『叛 旗』 第 9 号 頒価 400円
(〒1部80円, 10部以上無料)

発 行 日 1974年6月18日 第一刷

編 集 者 共産主義者同盟「叛旗」編集委員会

発 行 者 共産主義者同盟 03(362)0149

連 絡 先 東京都新宿区百人町1-11-31
斎藤ビル5F 蒼浪社気付

振 替 番 号 東京 162856
(宛先：共産同「叛旗」編集委員会)

